

2014（平成26）年

沖繩県感染症発生動向調査事業報告書

沖繩県保健医療部健康長寿課  
沖繩県衛生環境研究所



## はじめに

沖縄県の感染症発生動向調査事業の推進につきましては、一般社団法人沖縄県医師会をはじめ、定点医療機関など関係者の皆様方に多大なご協力をいただき、厚くお礼申し上げます。

本事業は、「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」に基づき実施しており、感染症の発生動向を継続的に把握し、その分析を行い、情報を公表することによって、感染症の発生及びまん延を防止することを目的としています。

さて、昨年を振り返りますと、海外においては、西アフリカを中心にエボラ出血熱が猛威を振るい、平成 26 年 8 月には WHO（世界保健機関）により「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」が宣言されました。本県においても、万が一の侵入に備え、関係機関との連携、医療体制の整備及び患者搬送訓練等が行われ、対策を強化しているところです。

一方、国内では、蚊が媒介するデング熱の国内感染例が約 70 年ぶりに発生し、その後、162 例の海外渡航歴のないデング熱患者が報告されました。県内では、国内感染例の報告はありませんでしたが、媒介蚊の対策が今後の課題となっております。

また、平成 26 年 11 月の感染症法の一部改正に伴い、中東呼吸器症候群（MERS）及び鳥インフルエンザ（H7N9）が二類感染症に位置づけられ（平成 27 年 1 月施行）、加えて感染症に関する情報収集体制が強化されました（平成 28 年 4 月施行）。

県としては、引き続き関係機関と連携を図りながら、患者情報等の収集・解析・情報還元を積極的に行うとともに、本事業の推進と感染症対策の強化に努めて参りたいと考えております。関係機関の皆様方には、今後とも御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成 27 年 10 月

沖縄県保健医療部健康長寿課長

## 目 次

医療機関届出対象感染症一覧	1
<b>I 事業の概要</b>	<b>3</b>
(1) 保健所別定点数（県内）	4
(2) 報告週対応表（2014年）および定点種別定点数（全国）	5
(3) 感染症発生動向調査事業定点医療機関一覧（県内）	6
<b>II 報告の概要</b>	<b>7</b>
1 全数把握感染症（一～五類:82疾患）の報告状況	
(1) 腸管出血性大腸菌感染症（2）レジオネラ症（3）レプトスピラ症	
(4) デング熱・マラリア（5）麻しん・風しん	7
(6) 梅毒・後天性免疫不全症候群（7）侵襲性肺炎球菌感染症	8
2 五類定点把握感染症（週報19疾患、月報8疾患）の報告状況	
(1) 週報	
ア インフルエンザ / 小児科定点	8
イ 眼科/基幹定点	9
(2) 月報	
ア 性感染症(STD) / 基幹定点	9
3 週別患者発生状況	
(1) 報告数一覧表（沖縄県）	11
(2) 報告数一覧表（全国）	11
(3) グラフ一覧（沖縄県）	12
(4) グラフ一覧（全国）	15
4 月別患者発生状況	
(1) グラフ一覧（沖縄県）	18
(2) 報告数一覧表（沖縄県）	18
(3) グラフ一覧（全国）	19
(4) 報告数一覧表（全国）	19
<b>III 定点把握対象 五類感染症（週報・月報）</b>	
1 週報	
（インフルエンザ/小児科定点）	
インフルエンザ	21
RSウイルス感染症	24
咽頭結膜熱（プール熱）	26
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	28
感染性胃腸炎	30
水痘	32
手足口病	34
伝染性紅斑	36
突発性発疹	38
百日咳	40
ヘルパンギーナ	42
流行性耳下腺炎	44

(眼科定点)

急性出血性結膜炎	46
流行性角結膜炎	48

(基幹定点)

細菌性髄膜炎	50
無菌性髄膜炎	52
マイコプラズマ肺炎	54
クラミジア肺炎	56
感染性胃腸炎（ロタウイルス）	58

2 月報

(性感染症(STD)定点)

性器クラミジア感染症	60
性器ヘルペスウイルス感染症	60
尖形コンジローマ感染症	60
淋菌感染症	60
疾患別報告数	61
性別・年齢別患者報告数	62

(基幹定点(薬剤耐性菌) )

メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症(MRSA)	64
ペニシリン耐性肺炎球菌感染症(PRSP)	66
薬剤耐性緑膿菌感染症	68
薬剤耐性アシネトバクター感染症	70

IV 資料編

1 各表

表1 疾病分類別報告数（沖縄県・2014年）	73
表2 疾病分類別報告数（全国・2014年）	76
表3 疾病別、年齢別区分による比較（週報・沖縄県・2014年）	79
表4 疾病別、年齢別区分による比較（週報・全国・2014年）	80
表5 疾病別、年齢別区分による比較（月報・男女・2014年）	81
表6 疾病別、年齢別区分による比較（月報・男性・2014年）	82
表7 疾病別、年齢別区分による比較（月報・女性・2014年）	83
表8 年次別、報告数（実数、定点当たり（月平均））	84

2 全数把握感染症（全医療機関報告・2014年1月1日～12月31日）

(1) 一類感染症	98
(2) 二類感染症	98
(3) 三類感染症	115
(4) 四類感染症	117
(5) 五類感染症	120

### 3 定点把握対象 五類感染症（週報および月報）

感染症発生動向調査システム 警報・注意報の解説	127
-------------------------	-----

#### (1) 週報

##### (インフルエンザ/小児科定点)

インフルエンザ	128
RSウイルス感染症	130
咽頭結膜熱（プール熱）	132
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	134
感染性胃腸炎	136
水痘	138
手足口病	140
伝染性紅斑	142
突発性発疹	144
百日咳	146
ヘルパンギーナ	148
流行性耳下腺炎	150

##### (眼科定点)

急性出血性結膜炎	152
流行性角結膜炎	154

##### (基幹定点)

細菌性髄膜炎	156
無菌性髄膜炎	158
マイコプラズマ肺炎	160
クラミジア肺炎	162
感染性胃腸炎（ロタウイルス）	164

#### (2) 月報

##### (性感染症(STD)定点)

性器クラミジア感染症	166
性器ヘルペスウイルス感染症	167
尖形コンジローマ感染症	168
淋菌感染症	169

##### (基幹定点(薬剤耐性菌))

メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症(MRSA)	170
ペニシリン耐性肺炎球菌感染症(PRSP)	171
薬剤耐性緑膿菌感染症	172
薬剤耐性アシネトバクター感染症	173

## V 参考資料

結核の発生動向（2014年）	175
腸管出血性大腸菌感染症の発生動向（2014年）	177
レジオネラ症の発生動向（2014年）	180
レプトスピラ症の発生動向（2014年）	182
後天性免疫不全症候群（HIV感染者／AIDS患者）の発生動向（2014年）	184
梅毒の発生動向（2006-2014年）	186
風しんの発生動向（2012-2014年）	189

# 感染症法における届出対象疾患一覧

(平成26年9月19日現在)

## 1 医師による届出対象疾患

○届出基準:「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律第12条第1項及び第14条第2項に基づく届出の基準等について」

### 一類

- |                 |             |
|-----------------|-------------|
| (1) エボラ出血熱      | (5) ペスト     |
| (2) クリミア・コンゴ出血熱 | (6) マールブルグ病 |
| (3) 痘そう         | (7) ラッサ熱    |
| (4) 南米出血熱       |             |

### 二類

- |   |                     |
|---|---------------------|
| (8) 急性灰白髄炎(ポリオ)   | (12) 鳥インフルエンザ(H5N1) |
| (9) 結核  |                     |
| (10) ジフテリア  |                     |
| (11) 重症急性呼吸器症候群<br>(病原体がベータコロナウイルス属SARSコ<br>ロナウイルスであるものに限る) |                     |

### 三類

- |                  |            |
|------------------|------------|
| (13) コレラ         | (16) 腸チフス  |
| (14) 細菌性赤痢       | (17) パラチフス |
| (15) 腸管出血性大腸菌感染症 |            |

### 四類

- |   |                              |
|---|------------------------------|
| (18) E型肝炎   | (39) 東部ウマ脳炎                  |
| (19) ウエストナイル熱(ウエストナイル脳炎を含む)                             | (40) 鳥インフルエンザ(H5N1及びH7N9を除く) |
| (20) A型肝炎   | (41) ニパウイルス感染症               |
| (21) エキノコックス症   | (42) 日本紅斑熱                   |
| (22) 黄熱   | (43) 日本脳炎                    |
| (23) オウム病   | (44) ハンタウイルス肺症候群             |
| (24) オムスク出血熱  | (45) Bウイルス病                  |
| (25) 回帰熱  | (46) 鼻疽                      |
| (26) キャサヌル森林病   | (47) ブルセラ症                   |
| (27) Q熱   | (48) ベネズエラウマ脳炎               |
| (28) 狂犬病  | (49) ヘンドラウイルス感染症             |
| (29) コクシジオイデス症  | (50) 発しんチフス                  |
| (30) サル痘  | (51) ボツリヌス症                  |
| (31) 重症熱性血小板減少症候群<br>(病原体がフレボウイルス属SFTSウイルスであ<br>るものに限る) | (52) マラリア                    |
| (32) 腎症候性出血熱  | (53) 野兔病                     |
| (33) 西部ウマ脳炎   | (54) ライム病                    |
| (34) ダニ媒介脳炎   | (55) リッサウイルス感染症              |
| (35) 炭疽   | (56) リフトバレー熱                 |
| (36) チクングニア熱  | (57) 類鼻疽                     |
| (37) つつが虫病  | (58) レジオネラ症                  |
| (38) デング熱   | (59) レプトスピラ症                 |
|   | (60) ロッキー山紅斑熱                |

### 五類 全数把握対象

- |   |  |
|---|--|
| (61) アメーバ赤痢   | (71) 侵襲性髄膜炎菌感染症                                    |
| (62) ウイルス性肝炎(E型肝炎及びA型肝炎を除く)   | (72) 侵襲性肺炎球菌感染症                                    |
| (63) カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症   | (73) 水痘<br>(患者が入院を要すると認められるものに限る)                  |
| (64) 急性脳炎<br>(ウエストナイル脳炎、西部ウマ脳炎、ダニ媒<br>介脳炎、東部ウマ脳炎、日本脳炎、ベネズエ<br>ラウマ脳炎及びリフトバレー熱を除く。) | (74) 先天性風しん症候群                                     |
| (65) クリプトスポリジウム症  | (75) 梅毒  |
| (66) クロイツフェルト・ヤコブ病  | (76) 播種性クリプトコックス症                                  |
| (67) 劇症型溶血性レンサ球菌感染症   | (77) 破傷風   |
| (68) 後天性免疫不全症候群   | (78) バンコマイシン耐性黄色ブドウ球菌感染症                           |
| (69) ジアルジア症   | (79) バンコマイシン耐性腸球菌感染症                               |
| (70) 侵襲性インフルエンザ菌感染症   | (80) 風しん   |
|   | (81) 麻しん   |
|   | (82) 薬剤耐性アシネトバクター感染症<br>(H26.9.19に基幹定点から全数把握疾患へ移動) |

診断後直ちに届出

全数報告

七日以内に届出

## 五類 定点把握対象

週報・月報報告

- |   |  |
|---|--|
| <p>週報・小児科定点<br/>↑<br/>(83) RSウイルス感染症<br/>(84) 咽頭結膜熱<br/>(85) A群溶血性レンサ球菌咽頭炎<br/>(86) 感染性胃腸炎<br/>(87) 水痘<br/>(88) 手足口病<br/>(89) 伝染性紅斑<br/>(90) 突発性発しん<br/>(91) 百日咳<br/>(92) ヘルパンギーナ<br/>(93) 流行性耳下腺炎<br/>↓</p> <p>週報<br/>↑<br/>(94) インフルエンザ*1<br/>(鳥インフルエンザ及び新型インフルエンザ等感染症を除く)</p> <p>週報<br/>↑<br/>(95) 急性出血性結膜炎<br/>(96) 流行性角結膜炎</p> | <p>週報<br/>↑<br/>(97) クラミジア肺炎(オウム病を除く)<br/>(98) 細菌性髄膜炎<br/>(インフルエンザ菌、髄膜炎菌、肺炎球菌を原因として同定された場合を除く。)<br/>(99) マイコプラズマ肺炎<br/>(100) 無菌性髄膜炎<br/>(101) 感染性胃腸炎<br/>(病原体がロタウイルスに限る)*2<br/>↓</p> <p>月報<br/>↑<br/>(102) 性器クラミジア感染症<br/>(103) 性器ヘルペスウイルス感染症<br/>(104) 尖圭コンジローマ<br/>(105) 淋菌感染症<br/>(106) ペニシリン耐性肺炎球菌感染症<br/>(107) メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症<br/>(108) 薬剤耐性緑膿菌感染症</p> |
|---|--|

定点報告

- \*1 インフルエンザ(鳥インフルエンザ及び新型インフルエンザ等感染症を除く)の基幹定点の届出対象は入院したものの  
\*2 (86)感染性胃腸炎のうち、病原体がロタウイルスであるものを基幹定点から届ける

## 新型インフルエンザ等感染症

(109) 新型インフルエンザ

(110) 再興型インフルエンザ

## 指定感染症

(111) 中東呼吸器症候群

(病原体がベータコロナウイルス属MERSコロナウイルスであるものに限る。)

(112) 鳥インフルエンザ(H7N9)

## 法第14条第1項に規定する厚生労働省令で定める疑似症

(113) 摂氏38度以上の発熱及び呼吸器症状(明らかな外傷又は器質的疾患に起因するものを除く。)

(114) 発熱及び発疹又は水疱(ただし、当該疑似症が二類感染症、三類感染症、四類感染症、五類感染症の患者の症状であることが明らかな場合を除く。)

診断後直ちに届出

全数報告

定点報告

届出は管轄保健所へ

## 2 獣医師による届出対象疾患と動物

○届出基準:「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律第13条第1項の規定に基づく届出の基準について」

### 感染症法第13条に基づく獣医師が届出を行う感染症と動物

- |   |                                     |
|---|-------------------------------------|
| (1) エボラ出血熱(サル)  | (6) ウエストナイル熱(鳥類に属する動物)              |
| (2) 重症急性呼吸器症候群(病原体がSARSコロナウイルスであるものに限る(イタチアナグマ、タヌキ及びハクビシン)) | (7) エキノコックス症(犬)                     |
| (3) ペスト(プレリードッグ)  | (8) 結核(サル)                          |
| (4) マールブルグ病(サル)   | (9) 鳥インフルエンザ(H5N1またはH7N9(鳥類に属する動物)) |
| (5) 細菌性赤痢(サル)   | (10) 中東呼吸器症候群(ヒトコブラクダ)              |

届出は管轄保健所へ

# I 事業の概要

## I 事業の概要

沖縄県は 1980 年 7 月から県医師会および定点医療機関の協力のもとに全県的な感染症の報告体制を敷き、疾患の流行状況の把握に努めるべく感染症サーベイランス事業を開始した。沖縄県においては、厚生省（現厚生労働省）より 1 年早いスタートであった。

厚生省は、1981 年 7 月から感染症の実態を的確に把握するために全国的な感染症サーベイランス事業を開始した。さらに、1987 年 1 月から新たに「結核・感染症サーベイランス事業」となり、全国の保健所、都道府県（指定都市）、厚生省（現厚生労働省）間がコンピュータオンラインシステムで結ばれ、結核および感染症の情報が迅速かつ的確に利用できるようになった。

感染症サーベイランス事業は、1998 年より感染症発生動向調査事業となり、さらに「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」（以下「感染症法」とする。）が 1999 年 4 月から施行され、感染症対策の強化が行われてきた。

2006 年 4 月には、新しい全国オンラインシステムである感染症サーベイランスシステム（NESID）が稼働している。

2014 年末までに届出対象となる感染症は、一類感染症 7 疾患、二類感染症 5 疾患、三類感染症 5 疾患、四類感染症 43 疾患、五類感染症 48 疾患（全数 22 疾患、定点把握 26 疾患）、新型インフルエンザ等が 2 疾患、指定感染症 2 疾患、法第 14 条第 1 項に規定する厚生労働省令で定める疑似症が 2 疾患の計 114 疾患である（医療機関届出対象感染症一覧を参照）。

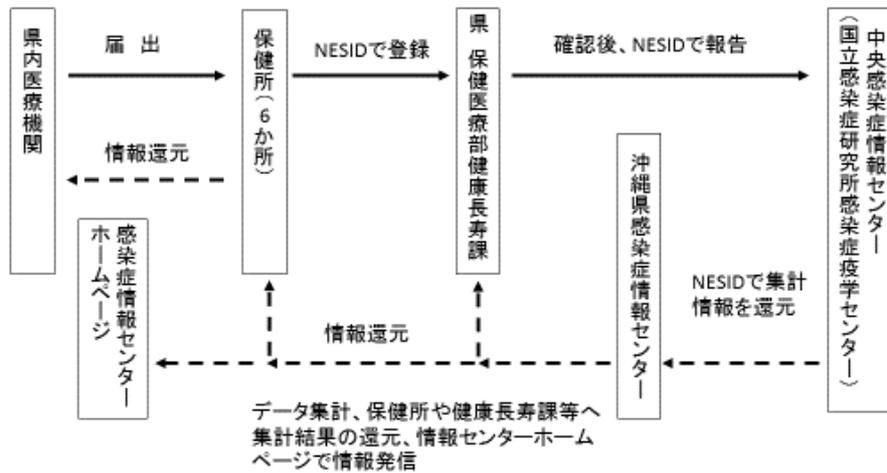
これらの感染症は、患者発生状況を医療機関が所管保健所に報告し、各保健所からの報告を県健康長寿課で集約して国に報告している。感染症情報の迅速な提供を図るための施設として感染症情報センター（<http://www.idsc-okinawa.jp>）が衛生環境研究所に設置され、データ収集及び提供を行っている。県健康増進課および各保健所においては、感染症情報センターで処理された集計データおよび全国の還元データを利用し、各関係機関に情報提供をするとともに、感染症の流行状況の把握を行っている（感染症発生動向調査事業～患者情報の流れ～を参照）。

2013 年 4 月 1 日からは、那覇市が中核市へ移行するとともに、中央保健所が廃止され那覇市保健所が設置された。那覇市保健所の設置に伴い、これまでの定点医療機関の所管保健所に変更はあったが、感染症情報の集約および国への報告はこれまでとおり県健康長寿課で行っている。

（定点医療機関）

2014 年の県内の定点医療機関は、小児科 34 定点、インフルエンザ 58 定点（同小児科定点＋内科 24 定点）、眼科 10 定点、性感染症 12 定点、基幹 7 定点の合計 87 定点である。

## 感染症発生動向調査事業 ～患者情報の流れ～



(1) 県内の保健所別定点数 (2014年1月1日～2014年12月31日)

保健所名	小児科 定点 (ア)	内科 定点 (イ)	インフル エンザ定点 (ア)+(イ)	眼科 定点	性感染症 (STD) 定点	基幹 定点	医療 機関数
①北部保健所	3	2	5	1	1	1	5
②中部保健所	12	8	20	3	4	2	24
③那覇市保健所	7	5	12	1	3	1	10
④南部保健所	8	6	14	3	4	1	15
⑤宮古保健所	2	2	4	1	0	1	5
⑥八重山保健所	2	1	3	1	0	1	3
合計	34	24	58	10	12	7	62

※性感染症定点において、1か所休止があった (H26.9～H27.5まで)。

## (2) 報告週対応表 (2014年) および定点種別定点数(全国)

月	週	平均 期間	週 報				月 報	
			インフルエ ンザ定点	小児科定 点	眼科定点	基幹定点	STD定点	基幹定点
			4920	3144	684	475	975	477
1月	1	12/30 ~ 1/5	4595	2896	634	473	976	477
	2	1/6 ~ 1/12	4935	3150	682	474		
	3	1/13 ~ 1/19	4950	3156	683	474		
	4	1/20 ~ 1/26	4950	3154	686	475		
	5	1/27 ~ 2/2	4954	3158	684	475		
2月	6	2/3 ~ 2/9	4953	3160	684	475	974	478
	7	2/10 ~ 2/16	4946	3152	684	474		
	8	2/17 ~ 2/23	4958	3161	683	473		
	9	2/24 ~ 3/2	4956	3160	686	474		
3月	10	3/3 ~ 3/9	4952	3157	687	476	977	478
	11	3/10 ~ 3/16	4955	3157	685	475		
	12	3/17 ~ 3/23	4951	3158	687	475		
	13	3/24 ~ 3/30	4948	3151	688	475		
	14	3/31 ~ 4/6	4949	3156	686	475		
4月	15	4/7 ~ 4/13	4973	3172	691	474	975	478
	16	4/14 ~ 4/20	4944	3156	689	476		
	17	4/21 ~ 4/27	4920	3146	683	475		
	18	4/28 ~ 5/4	4881	3119	675	474		
5月	19	5/5 ~ 5/11	4933	3156	688	475	979	479
	20	5/12 ~ 5/18	4939	3160	687	476		
	21	5/19 ~ 5/25	4934	3157	688	476		
	22	5/26 ~ 6/1	4935	3158	687	476		
6月	23	6/2 ~ 6/8	4927	3152	688	475	979	478
	24	6/9 ~ 6/15	4932	3159	686	475		
	25	6/16 ~ 6/22	4928	3158	688	476		
	26	6/23 ~ 6/29	4933	3158	688	476		
	27	6/30 ~ 7/6	4929	3160	687	475		
7月	28	7/7 ~ 7/13	4928	3156	686	476	977	478
	29	7/14 ~ 7/20	4922	3154	688	476		
	30	7/21 ~ 7/27	4928	3154	682	476		
	31	7/28 ~ 8/3	4922	3156	688	475		
8月	32	8/4 ~ 8/10	4869	3123	679	474	976	477
	33	8/11 ~ 8/17	4761	3022	663	475		
	34	8/18 ~ 8/24	4886	3124	686	476		
	35	8/25 ~ 8/31	4920	3149	685	476		
9月	36	9/1 ~ 9/7	4919	3148	685	476	975	480
	37	9/8 ~ 9/14	4904	3147	685	476		
	38	9/15 ~ 9/21	4909	3139	686	474		
	39	9/22 ~ 9/28	4912	3146	685	476		
	40	9/29 ~ 10/5	4915	3150	688	474		
10月	41	10/6 ~ 10/12	4897	3139	683	476	970	477
	42	10/13 ~ 10/19	4920	3151	687	475		
	43	10/20 ~ 10/26	4918	3150	687	476		
	44	10/27 ~ 11/2	4909	3143	682	475		
11月	45	11/3 ~ 11/9	4924	3150	685	476	975	477
	46	11/10 ~ 11/16	4932	3156	685	476		
	47	11/17 ~ 11/23	4915	3144	681	475		
	48	11/24 ~ 11/30	4939	3157	686	476		
12月	49	12/1 ~ 12/7	4939	3155	686	475	969	477
	50	12/8 ~ 12/14	4942	3156	685	475		
	51	12/15 ~ 12/21	4941	3153	682	474		
	52	12/22 ~ 12/28	4931	3149	681	473		

## (3) 平成26年度 感染症発生動向調査事業 定点医療機関一覧

平成26年12月31日現在

	保健所名	医療機関名	住 所	全 87定点	24	34	10	7	12
				(定点名)	内科	小児科	眼科	基幹	STD
1	北部保健所	県立北部病院	名護市大中2-12-3	小児科、内科、基幹	●	●		●	
2		儀保小児科内科医院	名護市大西2-4-32	小児科		●			
3		今帰仁診療所	今帰仁村字謝名139	小児科、内科	●	●			
4		辻眼科	名護市宮里1-26-11	眼科			●		
5		なかち泌尿器科クリニック	名護市大中5-4-50	STD(泌)					●
1	中部保健所	ほくと会北部病院	宜野座村字漢那469	内科	●				
2		石川医院	うるま市石川2-21-5	内科	●				
3		金武診療所	金武町字金武94	内科	●				
4		岸本内科クリニック	沖縄市登川1-1-24	内科	●				
5		愛聖クリニック	沖縄市高原5-15-11	内科	●				
6		よなみね内科	宜野湾市普天間2-4-5	内科	●				
7		ライフクリニック長浜	読谷村字長浜1530-1	内科	●				
8		ちばなクリニック	沖縄市字知花6-25-15	小児科、内科、STD(泌)(産)	●	●			●●
9		県立中部病院	うるま市宮里281	小児科、基幹		●		●	
10		みやぎ小児科クリニック	宜野湾市我如古447	小児科		●			
11		嘉数医院	沖縄市諸見里1-26-2	小児科		●			
12		大嶺医院	うるま市田場1417	小児科		●			
13		山田小児科内科医院	うるま市石川東山1-19-11	小児科		●			
14		もりなが内科・小児科クリニック	北谷町美浜2丁目7-4	小児科		●			
15		伊元小児科医院	沖縄市字泡瀬4-39-12	小児科		●			
16		そけん小児科	読谷村字波平2459	小児科		●			
17		愛知クリニック	宜野湾市字愛知16-1	小児科		●			
18		いとむクリニック小児科	宜野湾市伊佐1-10-9	小児科		●			
19		宮里眼科	うるま市石川東山1-22-2	眼科			●		
20		ひかり眼科	宜野湾市字愛知45	眼科			●		
21		松永眼科	沖縄市美里2-10-2	眼科			●		
22		中頭病院	沖縄市知花6-25-5	基幹				●	
23		上村病院	沖縄市胡屋1-6-2	小児科、STD(産)		●			●
24		名城病院	うるま市字赤道174-6	STD(産)					●
1	南部保健所	浦添総合病院	浦添市伊祖4-16-1	内科、STD(産)	●				●
2		同仁病院	浦添市城間1-37-12	内科	●				
3		みゆき小児科	浦添市字前田3-3-8-103号	小児科		●			
4		たから小児科医院	浦添市大平1-36-5	小児科		●			
5		ティーダこどもクリニック	浦添市城間4-3-10-1	小児科		●			
6		比嘉眼科病院	浦添市城間4-34-20	眼科			●		
7		県立南部医療センター・こども医療センター	南風原町字新川118-1	小児科、内科、基幹、STD(泌)	●	●		●	●
8		南部徳洲会病院	八重瀬町字外間171-1	内科、STD(泌)	●				●
9		豊見城中央病院	豊見城市字上田25	小児科、内科、STD(産)	●	●			●
10		わんぱくクリニック	南風原町字津嘉山1674	小児科		●			
11		与那原中央病院	与那原町字与那原2905	内科	●				
12		ひめゆりクリニック	糸満市字伊原107-1	小児科		●			
13		あおぞら小児科	与那原町字上与那原340-1	小児科		●			
14		安里眼科	糸満市字潮平722	眼科			●		
15		はえばる眼科医院	南風原町字兼城725	眼科			●		
1		宮古保健所	県立宮古病院	宮古島市平良字東仲宗根807	小児科、基幹		●		●
2	ひが小児科医院		宮古島市平良西里781-5	小児科		●			
3	下地内科医院		宮古島市平良下里1259-1	内科	●				
4	池村内科医院		宮古島市平良字東仲宗根194	内科	●				
5	下地眼科医院		宮古島市平良下里577-1	眼科			●		
1	保八健重所山	県立八重山病院	石垣市字大川732	小児科、内科、基幹	●	●		●	
2		よしもとこどもクリニック	石垣市登野城1024-1	小児科		●			
3		宮良眼科医院	石垣市字大川140	眼科			●		
1	那覇市保健所	国場十字路医院	那覇市字仲井真272-1	内科	●				
2		那覇市立病院	那覇市古島2-31-1	小児科、内科、基幹、STD(産)	●	●		●	●
3		沖縄赤十字病院	那覇市与儀1-3-1	小児科、内科、STD(産)	●	●			●
4		沖縄協同病院	那覇市古波蔵4-10-55	小児科、内科	●	●			
5		西町クリニック	那覇市西3-4-1	小児科、内科	●	●			
6		かおる小児科	那覇市字国場724-3 マゾンセブン101	小児科		●			
7		宮城小児科医院	那覇市牧志2-16-5	小児科		●			
8		安謝小児クリニック	那覇市安謝215-1	小児科		●			
9		石川眼科	那覇市泉崎2-3-20	眼科			●		
10		大浜第一病院	那覇市天久1000	STD(産)					●

## Ⅱ 報告の概要

## II 報告の概要

2014（平成 26）年、本県での報告は、一類感染症が 0 人、二類感染症が 436 人、三類感染症が 29 人、四類感染症が 58 人、五類感染症が 35,971 人（全数把握疾患：172 人、定点把握疾患：50,795 人）の報告があり、対象感染症 114 疾患の合計 51,490 人であった。

五類感染症定点把握疾患は、週単位報告（週報）と月単位報告（月報）に大別される。週報はインフルエンザ定点、小児科定点、基幹定点報告に、月報は性感染症（STD）定点と基幹定点（薬剤耐性菌）報告に細分類される。

週報は、2013（平成 25）年 12 月 30 日～2014（平成 26）年 12 月 28 日までの 52 週分である。月報は、2014（平成 26）年 1 月 1 日～12 月 31 日までの 12 ヶ月分である。

### 1 全数把握感染症（一～五類：82疾患）の報告状況

（IV 資料編 1 各表 表 1、表 2 及び 2 全数把握感染症（全医療機関報告）を参照）

2014 年県内で報告された全数把握感染症は 27 疾患で 695 件である。

注目された感染症は以下のとおりである。

#### （1）腸管出血性大腸菌感染症（三類感染症）

八重山保健所管内で 2 回の集団発生事例があった。いずれも保育園で感染が広がっている。8 月の発生は O-111（VT1）・4 人、10 月の発生は O-26（VT1）・7 人であった。

#### （2）レジオネラ症（四類感染症）

2013 年 17 人、2014 年 20 人と発生が増加している。集団発生はなく、また、半数の感染経路が不明であった。患者は 40 歳以上に発生し、そのうち 50 代の男性が最も多かった。

#### （3）レプトスピラ症（四類感染症）

2014 年の報告数は 28 人、全国の発生数の約六割を占める。毎年夏から秋にかけて報告が増え、2014 年は 9 月が最も多かった。推定感染地域は、八重山地域が 8 割を占めた。推定感染経路はすべて水系感染（河川でのレジャー活動等における感染）であった。

#### （4）デング熱・マラリア（四類感染症）

デング熱は、東京都での発生など話題となったが、県内の発生は輸入症例の 2 人のみであった。また、マラリアの輸入症例が 1 人報告された。

#### （5）麻しん・風しん（五類感染症）

麻しんは、2009 年以来 5 年ぶりに 1 人（輸入症例）が報告された。風しんは、2012 年・2013 年は多く発生したが、2014 年の発生は 6 人と激減した。

## (6) 梅毒・後天性免疫不全症候群（五類感染症）

梅毒の報告数は2011年以降増加し、2014年は39人で、前年の2倍以上となった。

男性が9割以上を占め、30歳代・40歳代が多い。感染経路は同性間性的接触が59%を占め、症状別では早期顕症Ⅱ期（46%）が最も多かった。

後天性免疫不全症候群は、33人が報告され、1987年以降、最も多くなった。報告者の殆どが男性で、2014年は20歳代の報告数が増えた。AIDS患者の占める割合は33%であった。

## (7) 侵襲性肺炎球菌感染症（五類感染症）

2014年の本県の侵襲性肺炎球菌感染症の報告は55人で前年の23人を大きく上回った。0～2歳児で25%を占め、50歳代から80歳代がそれぞれ全体の約15%ほどを占めていた。また、ワクチン接種歴があったものは26%で、そのほとんどが3歳未満であった。

## 2 五類定点把握感染症(週報 19 疾患、月報 8 疾患)の報告状況

(Ⅳ 資料編 1 各表 表 1、表 2 及びⅢ 定点把握対象 五類感染症（週報および月報）発生状況を参照）

### (1) 週報

ア インフルエンザ／小児科定点

（Ⅱ 3.（1）～（4）週別患者発生状況グラフ一覧及び報告数一覧表を参照）

2014年県内で報告された、インフルエンザ及び小児科定点対象の疾患を年間定点当たり患者報告数が多かった順に並べると、上位4疾患はインフルエンザ、感染性胃腸炎、水痘、手足口病であった。

2014年の本県におけるインフルエンザ患者の報告数は31,232人、定点あたりの報告数は538.48人であり、前年比1.73と増加した。2013/2014シーズン（2013年第36週～2014年第35週）に医療機関から提出されたインフルエンザウィルスの検出状況は、AH1pdmが31例、AH3亜型52例、B型28例であった（総数111例）。シーズンの開始当初から1月頃はAH3亜型を主流とする流行であったが、2月から4月はAH3亜型とA型が、3月以降はB型が主流となった。

感染性胃腸炎の報告数は5,695人、定点あたり報告数は167.50人で前年比1.22と増加した。1歳の報告が最も多く、全体の20.6%を占めていた。

水痘の報告数は2,460人、定点あたりの報告数は72.35人で前年比0.85と減少した。1歳から3歳で全体の6割を占めている。

手足口病の報告数は2,095人、定点あたり報告数61.62人で前年比0.85と減少した。全県で警報レベルには達しなかったものの、冬季は全国を上回る報告数であった。

## イ 眼科／基幹定点

(Ⅱ 3. (1)～(4) 週別患者発生状況グラフ一覧及び報告数一覧表を参照)

県内の急性出血性結膜炎 (AHC) の報告数は 16 人、定点あたり報告数は 1.60 人であり、前年比 0.41 と減少した。八重山保健所管内で散発的に警報レベルに達したが、継続しなかった。

流行性角結膜炎 (EKF) の報告数は 459 人、定点あたり 45.90 人であり、前年比 0.43 と減少したが全国より多い傾向にあった。

基幹定点対象の疾患では、マイコプラズマ肺炎が最も多く報告された。本県の年間報告数は 2006 年から 2012 年にかけて急増し、その後減少に転じた。2014 年は、173 人と過去 5 年で最も報告数が少なかったが、年間を通して全国より多く報告されている。

平成 25 年 (2013 年) 10 月 14 日から、ロタウイルスによる感染性胃腸炎が基幹定点の対象疾患に追加され、重症例を中心にロタウイルス胃腸炎の発生動向をより正確に把握することとなった。2014 年県内の患者報告数は 120 人 (定点あたり報告数 17.14 人)、4 月から 6 月にかけてピークがみられた。

その他の基幹定点対象疾患では、無菌性髄膜炎、細菌性髄膜炎及びクラミジア肺炎はいずれも前年と比較してほぼ横ばいであった。

## (2) 月報

### ア 性感染症(STD)／基幹定点

(Ⅱ 4. (1)～(4) 月別患者発生状況グラフ一覧及び報告数一覧表を参照)

2014 年県内で報告された性感染症 (STD) 定点対象疾患の報告数は、性器クラミジア感染症が 128 人 (定点あたり報告数 10.89 人、前年比 0.69)、性器ヘルペスウイルス感染症は 38 人 (定点あたり報告数 3.24 人、前年比 0.62)、尖形コンジローマが 25 人 (定点あたり報告数 2.16 人、前年比 0.83)、淋菌感染症は 17 人 (定点あたり報告数 1.45 人、前年比 0.39) であり、全ての疾患について減少した。

基幹定点対象疾患では、メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症が報告数 343 人 (定点あたり報告数 48.99 人) と最も多かったが、前年比 0.60 と減少した。

ペニシリン耐性肺炎球菌感染症 (PRSP) の報告数は 2011 年以降減少していたが、2013 年は 63 人、2014 年の報告数は 165 人 (定点あたり報告数 23.58 人、前年比 2.62) と増加傾向にある。

薬剤耐性緑膿菌感染症の報告数は 13 人 (定点あたり報告数 1.86 人) であり、前年比 2.61 と増加した。

薬剤耐性アシネトバクター感染症は 2011 年 2 月 1 日より五類感染症に追加され、平成 26 年 9 月 19 日より五類全数把握疾患となった。本県では昨年引き続き今年も報告はなかった。



### 3 週別患者報告数

#### (1) 報告数一覧表(沖縄県)

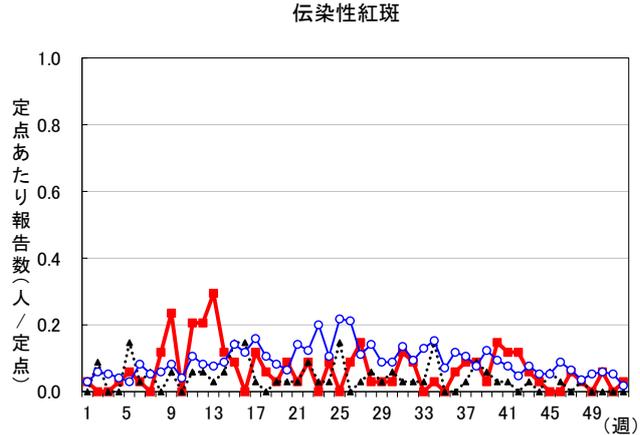
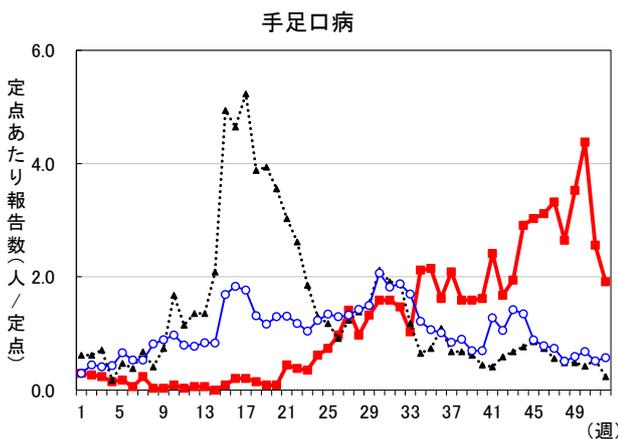
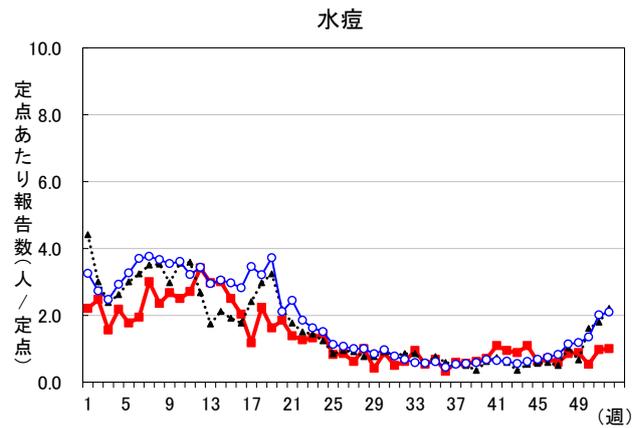
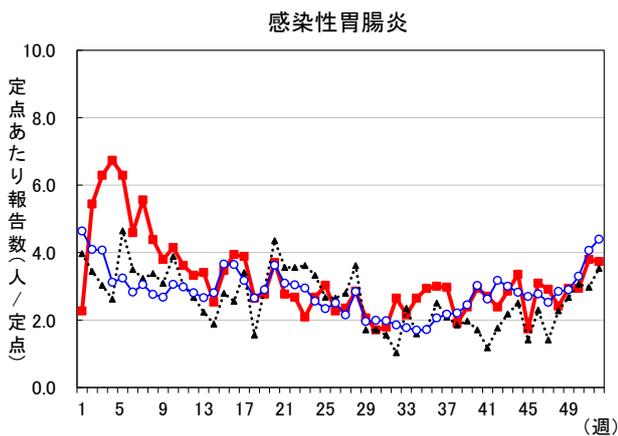
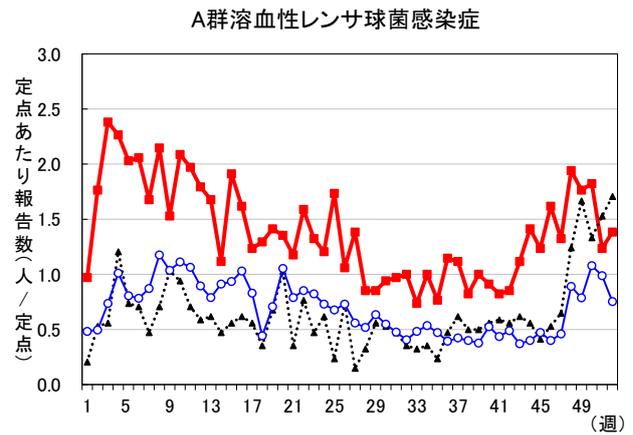
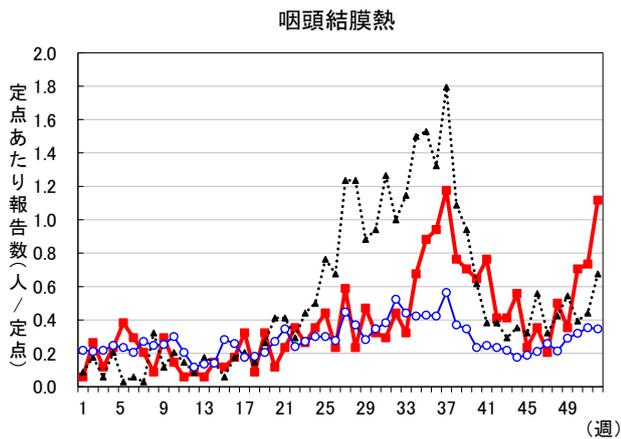
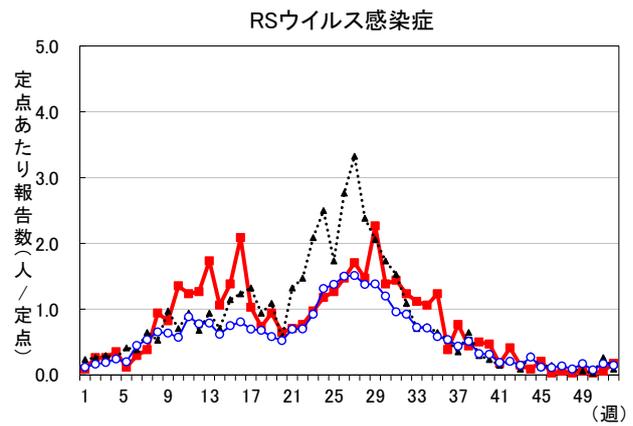
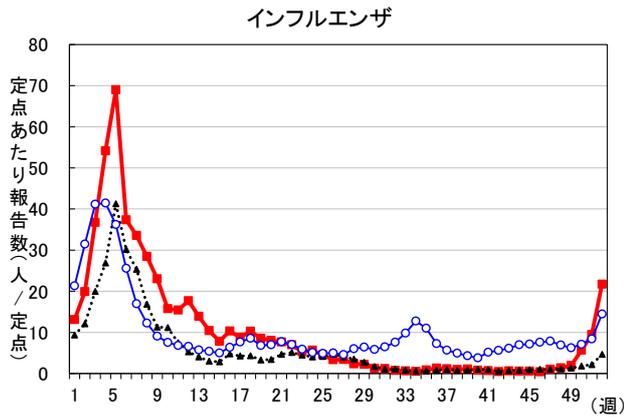
	疾患名	報告数(人)		定点あたり患者報告数(人/定点)		週平均の定点あたり患者報告数(人/定点/週)	
		2013年	2014年	2013年	2014年	2013年	2014年
小児 科 定 点	インフルエンザ	18,069	31,232	311.53	538.48	5.99	10.36
	RSウイルス感染症	1,499	1370	44.09	40.29	0.85	0.77
	咽頭結膜熱	944	690	27.76	20.29	0.53	0.39
	A群溶血性レンサ球菌感染症	1,144	2,462	33.65	72.41	0.65	1.39
	感染性胃腸炎	4,653	5,695	136.85	167.50	2.63	3.22
	水痘	2,902	2,460	85.35	72.35	1.64	1.39
	手足口病	2,459	2,095	72.32	61.62	1.39	1.18
	伝染性紅斑	71	115	2.09	3.38	0.04	0.07
	突発性発疹	610	613	17.94	18.03	0.35	0.35
	百日咳	99	186	2.91	5.47	0.06	0.11
	ヘルパンギーナ	399	607	11.74	17.85	0.23	0.34
流行性耳下腺炎	472	1672	13.88	49.18	0.27	0.95	
眼科 定 点	急性出血性結膜炎	39	16	3.90	1.60	0.08	0.03
	流行性角結膜炎	1,057	459	105.70	45.90	2.03	0.88
基幹 定 点	細菌性髄膜炎	29	31	4.14	4.43	0.08	0.09
	無菌性髄膜炎	60	64	8.57	9.14	0.16	0.18
	マイコプラズマ肺炎	324	173	46.29	24.71	0.89	0.48
	クラミジア肺炎	4	6	0.57	0.86	0.01	0.02
	感染性胃腸炎(ロタウイルス)	2	120	0.29	17.14	0.01	0.33

#### (2) 報告数一覧表(全国)

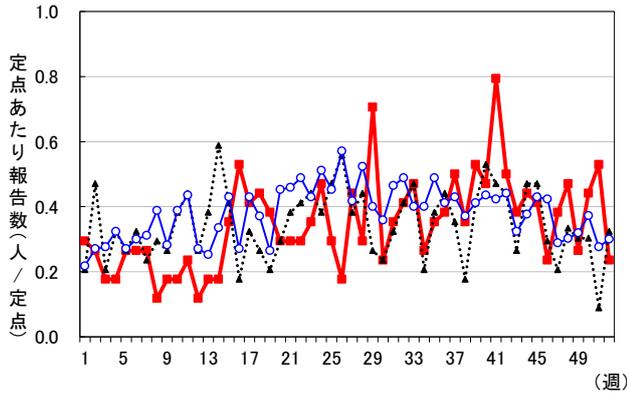
	疾患名	報告数(人)		定点あたり患者報告数(人/定点)		週平均の定点あたり患者報告数(人/定点/週)	
		2013年	2014年	2013年	2014年	2013年	2014年
小児 科 定 点	インフルエンザ	1,162,847	1,743,826	235.80	354.44	4.53	6.82
	RSウイルス感染症	95,874	100,394	30.54	31.93	0.59	0.61
	咽頭結膜熱	72,583	78,965	23.14	25.12	0.45	0.48
	A群溶血性レンサ球菌感染症	253,089	304,272	80.56	96.78	1.55	1.86
	感染性胃腸炎	1,066,126	1,005,079	339.45	319.68	6.53	6.15
	水痘	174,342	157,666	55.56	50.15	1.07	0.96
	手足口病	301,071	83,694	96.40	26.62	1.85	0.51
	伝染性紅斑	10,122	32,352	3.22	10.29	0.06	0.20
	突発性発疹	88,956	87,993	28.32	27.99	0.54	0.54
	百日咳	1,691	2,066	0.51	0.66	0.01	0.01
	ヘルパンギーナ	93,900	137,040	30.10	43.59	0.58	0.84
流行性耳下腺炎	40,830	46,342	13.01	14.74	0.25	0.28	
眼科 定 点	急性出血性結膜炎	675	414	1.01	0.61	0.02	0.01
	流行性角結膜炎	20,476	20,233	30.14	29.62	0.58	0.57
基幹 定 点	細菌性髄膜炎	436	393	0.94	0.83	0.02	0.02
	無菌性髄膜炎	1058	901	2.23	1.9	0.04	0.04
	マイコプラズマ肺炎	11,201	6,476	23.98	13.63	0.46	0.26
	クラミジア肺炎	740	325	1.58	0.68	0.03	0.01
	感染性胃腸炎(ロタウイルス)	158	4030	0.33	8.48	0.03	0.00

### (3) グラフ一覧(沖縄県)

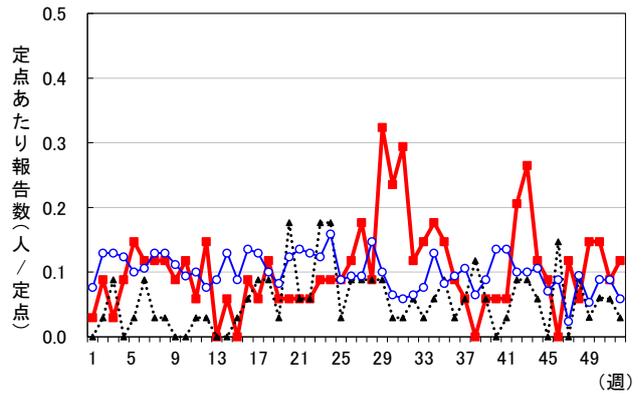
—■— 2014年    ····· 2013年    —○— 過去5年間の平均



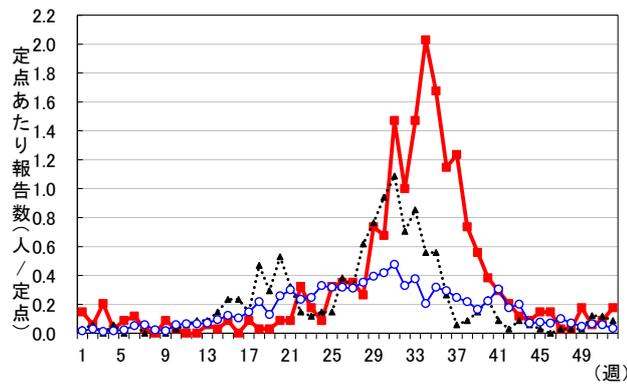
突発性発疹



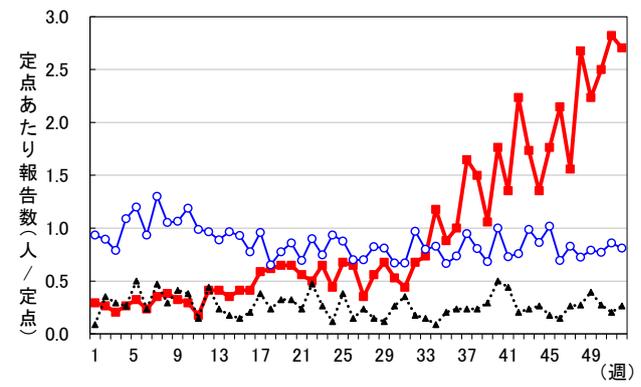
百日咳



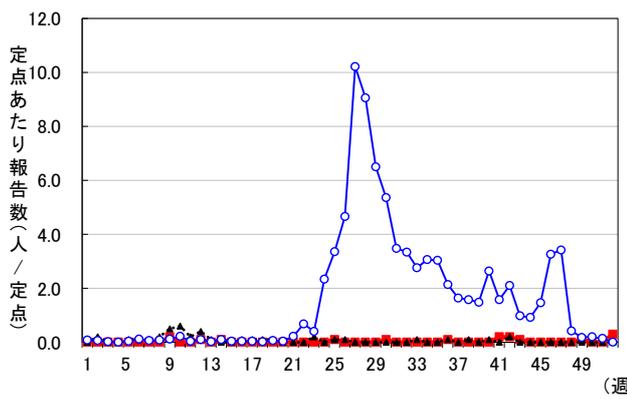
ヘルパンギーナ



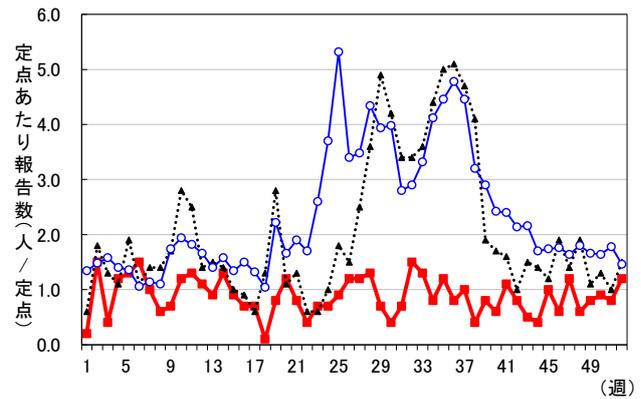
流行性耳下腺炎



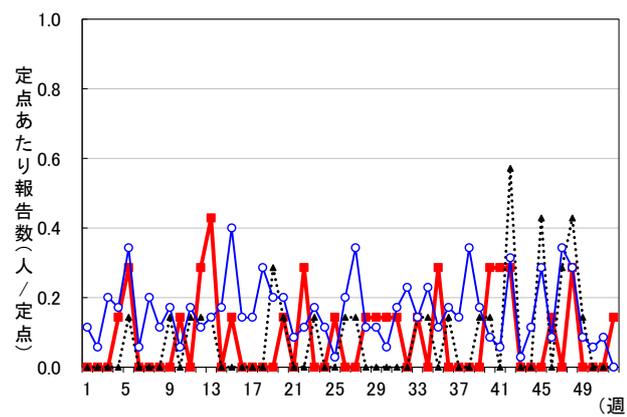
急性出血性結膜炎



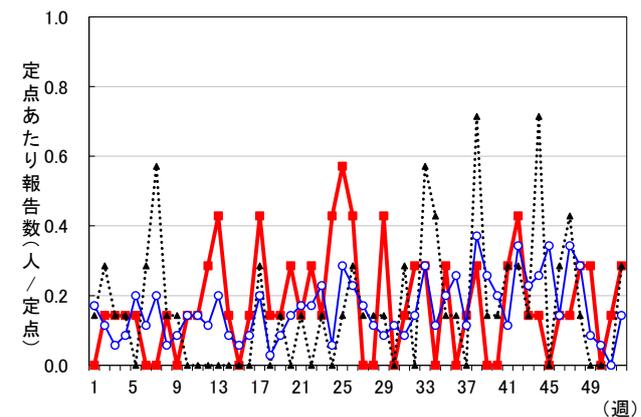
流行性角結膜炎



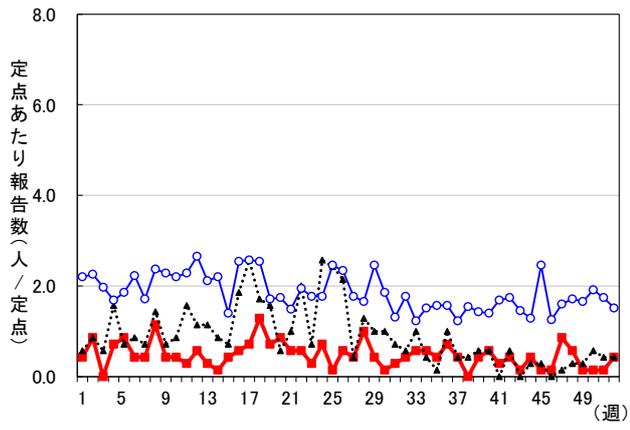
細菌性髄膜炎



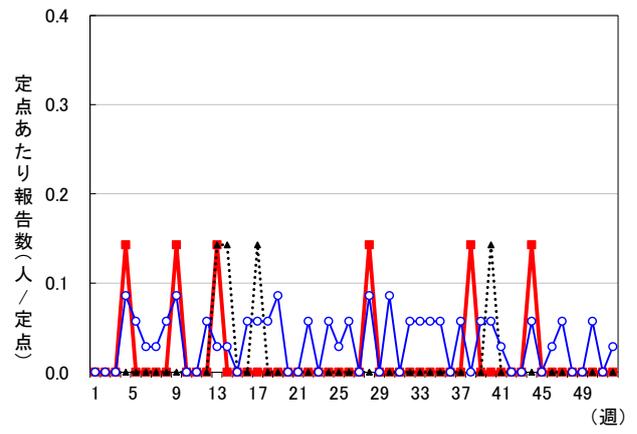
無菌性髄膜炎



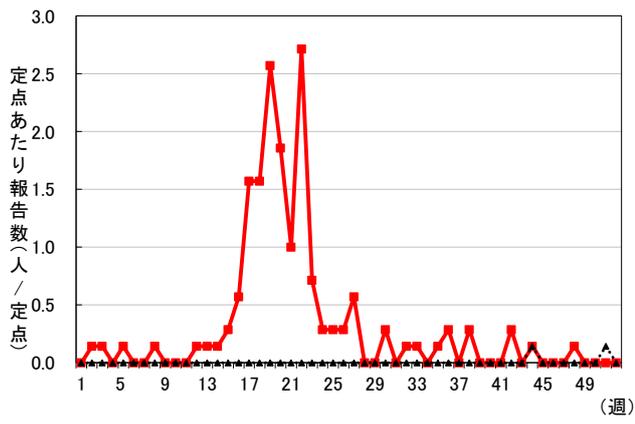
マイコプラズマ肺炎



クラミジア肺炎



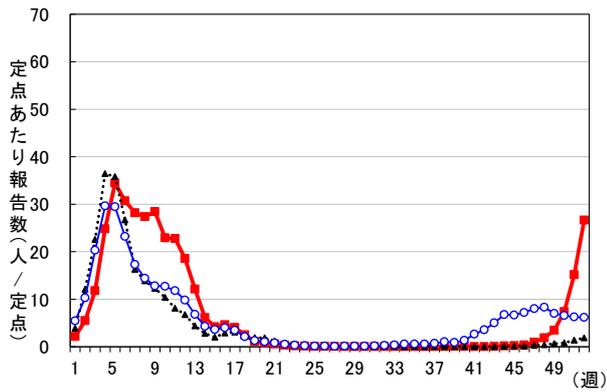
感染性胃腸炎(ロタウイルス)



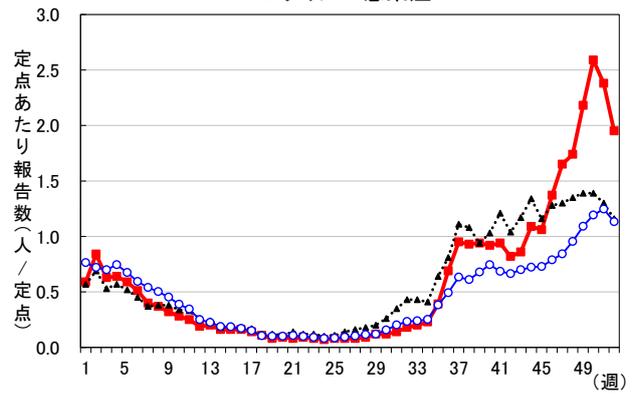
#### (4) グラフ一覧(全国)

—■— 2014年    ····· 2013年    —○— 過去5年間の平均

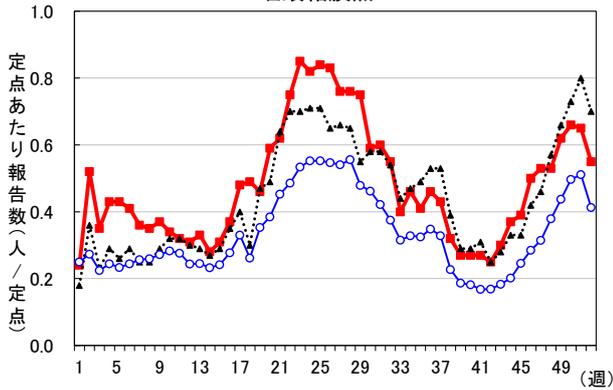
インフルエンザ



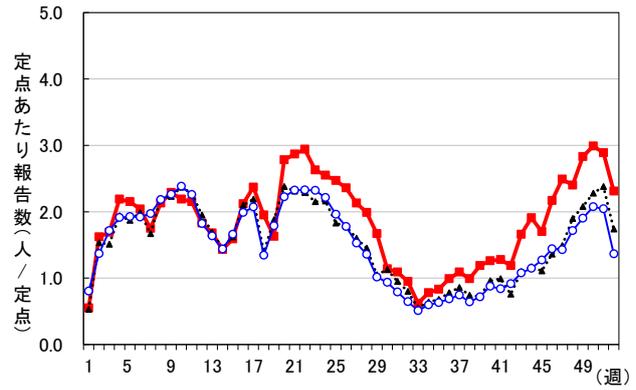
RSウイルス感染症



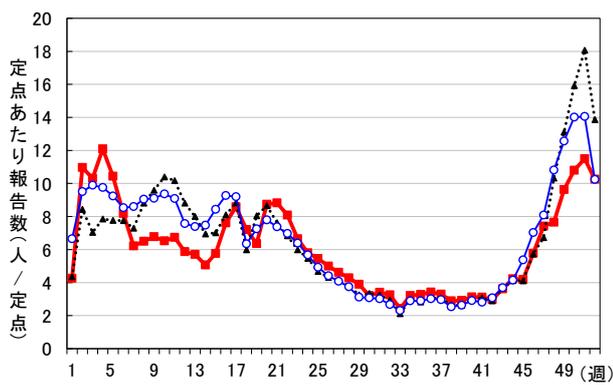
咽頭結膜熱



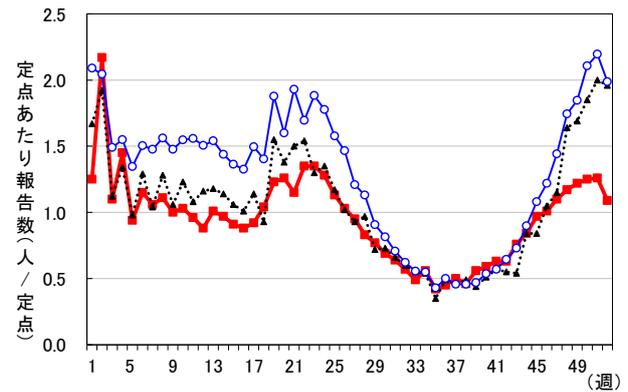
A群溶血性レンサ球菌感染症



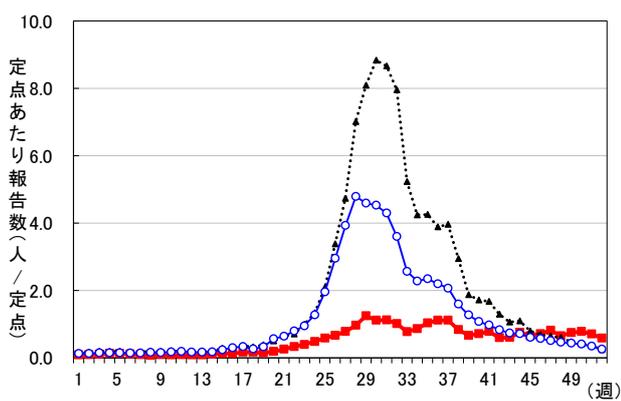
感染性胃腸炎



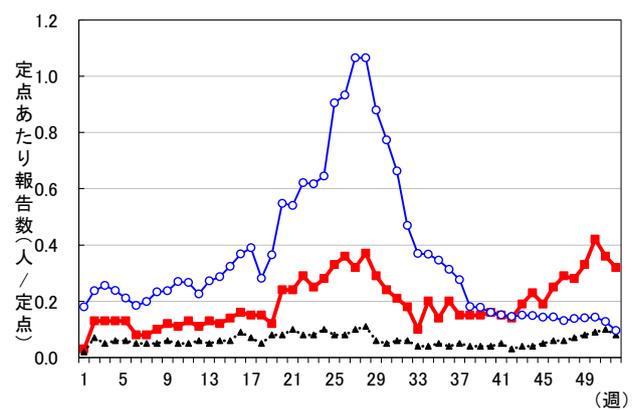
水痘



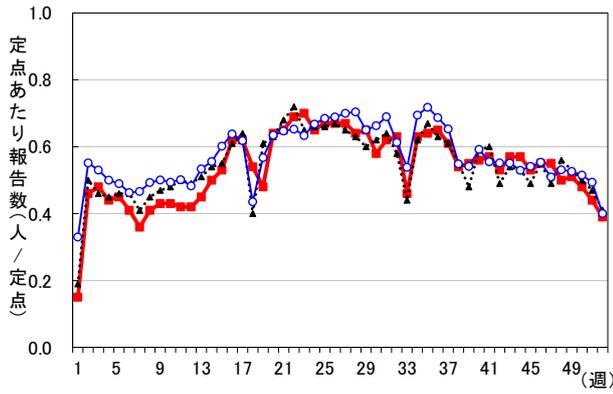
手足口病



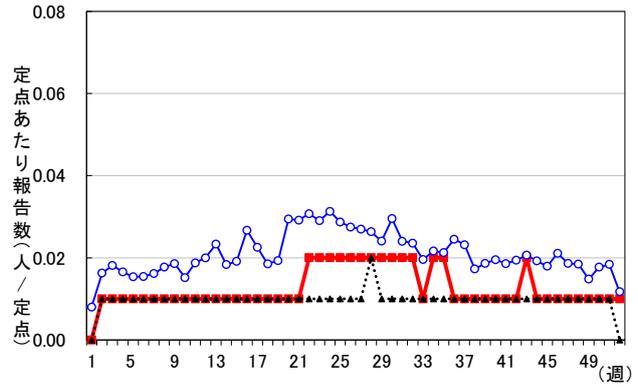
伝染性紅斑



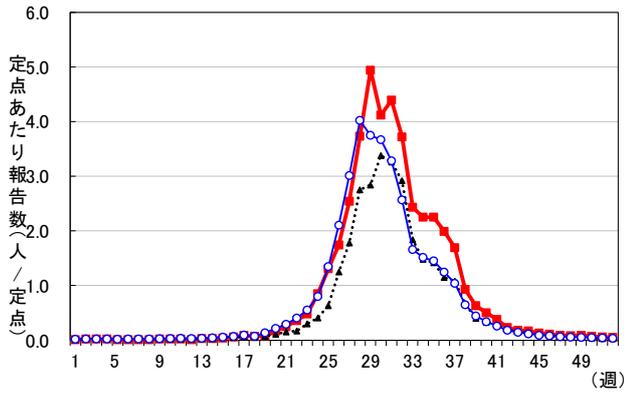
突発性発疹



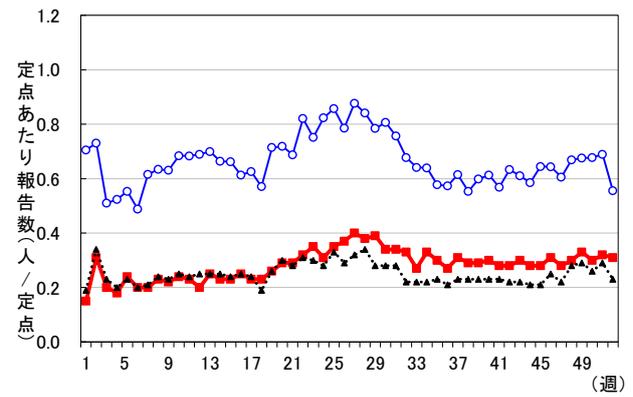
百日咳



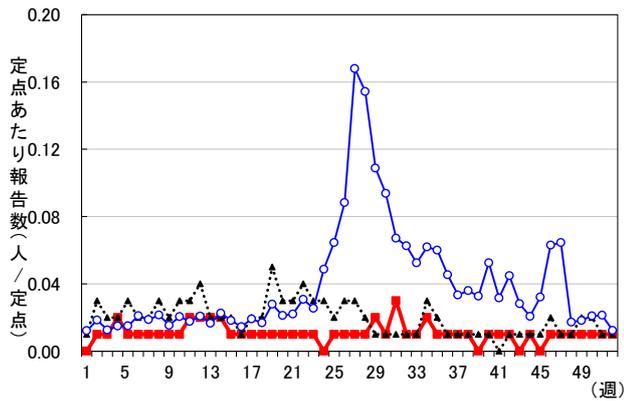
ヘルパンギーナ



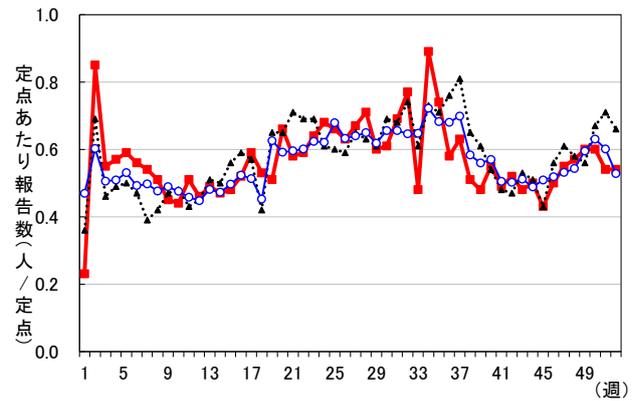
流行性耳下腺炎



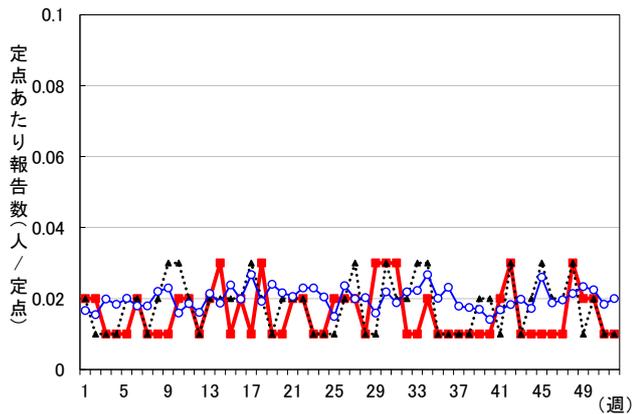
急性出血性結膜炎



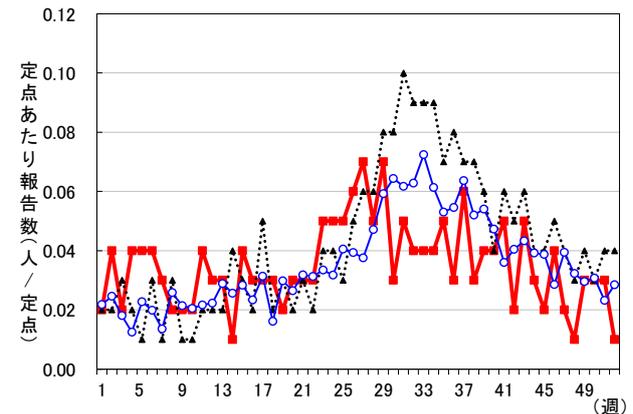
流行性角結膜炎



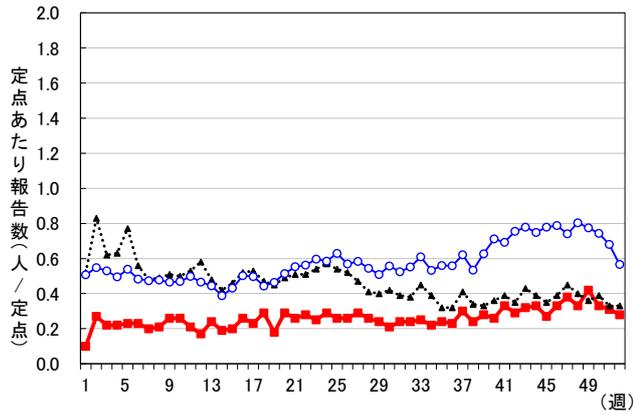
細菌性髄膜炎



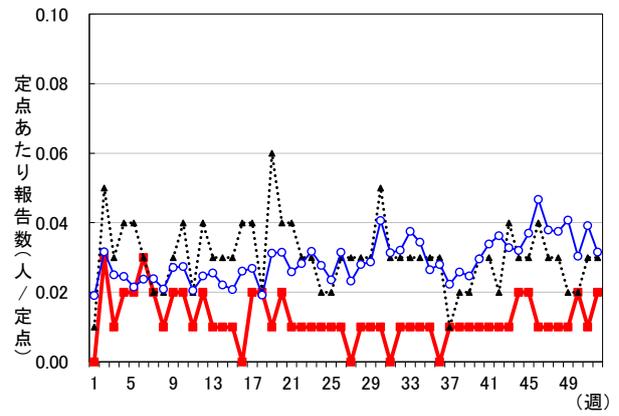
無菌性髄膜炎



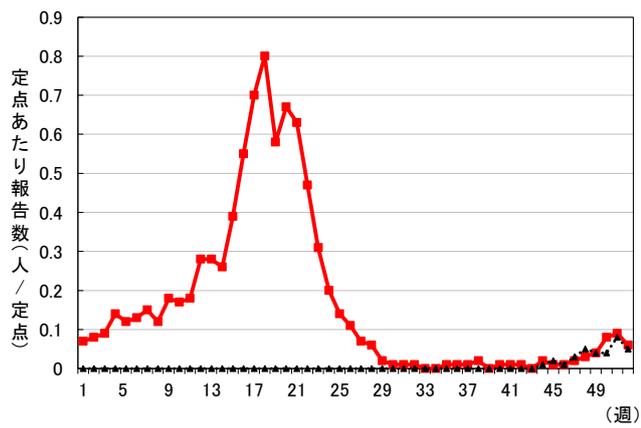
マイコプラズマ肺炎



クラミジア肺炎

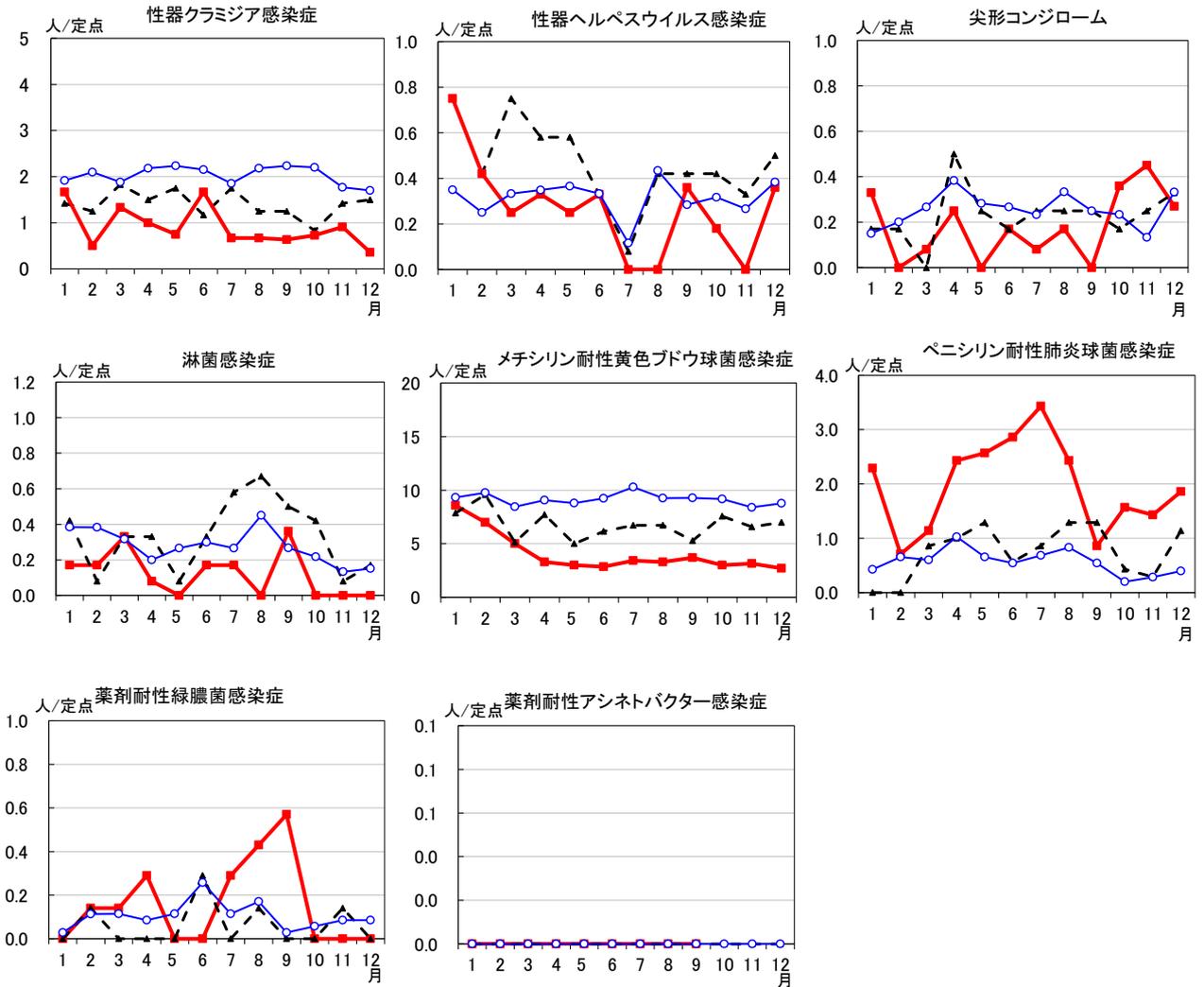


感染性胃腸炎(ロタウイルス)



## 4. 月別患者発生状況 (1) グラフ一覧(沖縄県)

—■— 2014年    - - - - 2013年    —○— 過去5年間の平均

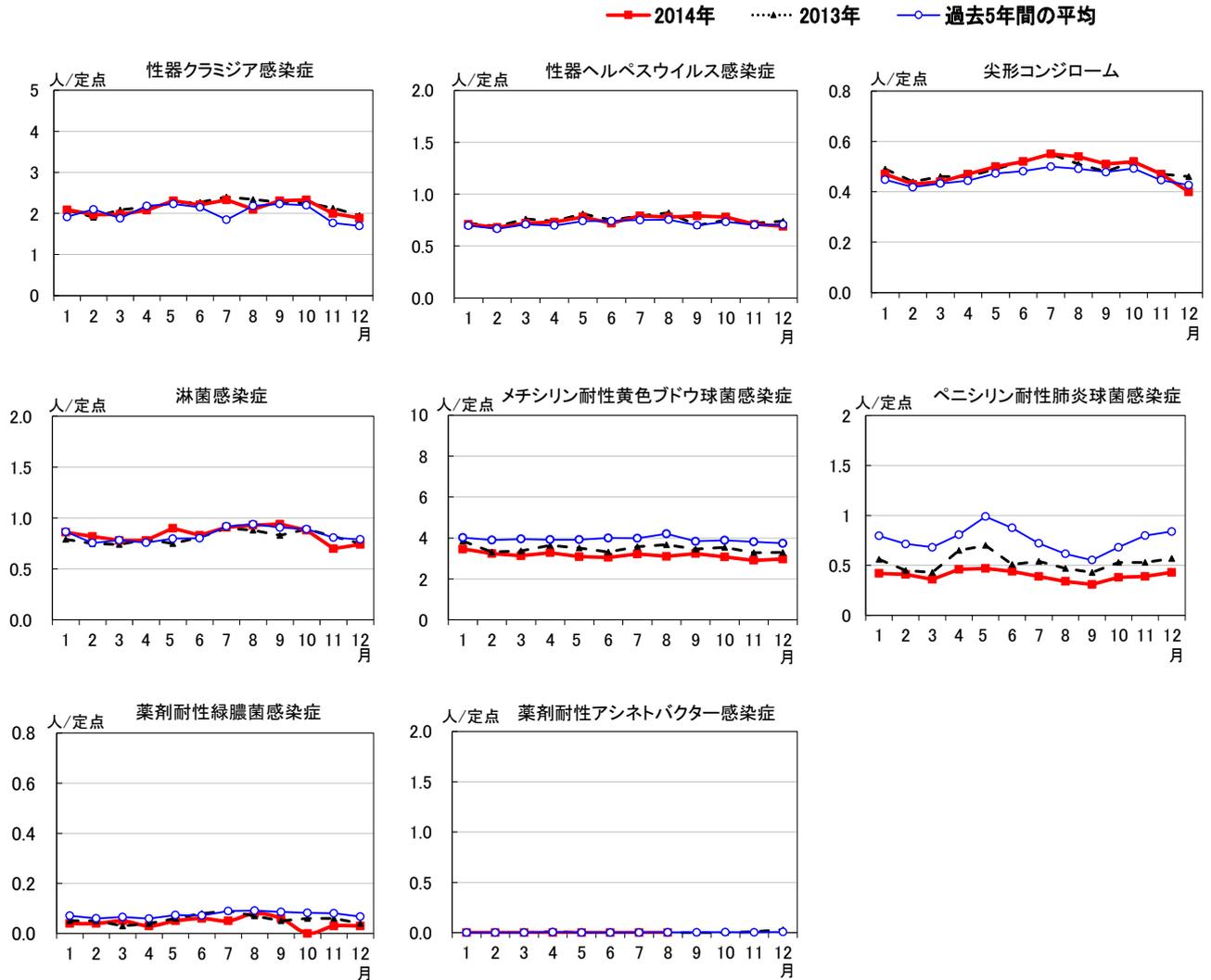


## (2) 報告数一覧表(沖縄県)

	疾患名	報告数(人)		定点あたり患者報告数(人/定点)		月平均の定点あたり患者報告数(人/定点/月)	
		2013年	2014年	2013年	2014年	2013年	2014年
STD	性器クラミジア感染症	203	128	16.92	10.89	1.41	0.91
	性器ヘルペスウイルス感染症	67	38	5.58	3.24	0.47	0.27
	尖形コンジローム	33	25	2.75	2.16	0.23	0.18
	淋菌感染症	48	17	4.00	1.45	0.33	0.12
基幹 定点	メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症	569	343	81.29	48.99	6.77	4.08
	ペニシリン耐性肺炎球菌感染症	63	165	9.00	23.58	0.75	1.96
	薬剤耐性緑膿菌感染症	5	13	0.71	1.86	0.06	0.15
	薬剤耐性アシネトバクター感染症	0	0	0.00	0.00	0.00	0.00

※薬剤耐性アシネトバクター感染症は平成27年9月19日から5類全数把握疾患へ変更

### (3) グラフ一覧(全国)



### (4) 報告数一覧表(全国)

	疾患名	報告数(人)		定点あたり患者報告数(人/定点)		月平均の定点あたり患者報告数(人/定点/月)	
		2013年	2014年	2013年	2014年	2012年	2014年
STD	性器クラミジア感染症	25,389	24,960	26.12	25.60	2.18	2.13
	性器ヘルペスウイルス感染症	8,748	8,653	9.00	8.88	0.75	0.74
	尖形コンジローム	5,698	5,687	5.86	5.82	0.49	0.49
	淋菌感染症	9,432	9,805	9.70	10.07	0.81	0.84
基幹 定点	メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症	19,701	18,042	41.82	37.77	3.49	3.15
	ペニシリン耐性肺炎球菌感染症	3,013	2,292	6.40	4.37	0.53	0.40
	薬剤耐性緑膿菌感染症	323	268	0.69	0.52	0.06	0.05
	薬剤耐性アシネトバクター感染症	28	0	0.06	0.00	0.01	0.00



### Ⅲ 定点把握対象 五類感染症(週報・月報)発生状況

# 1 週報 (インフルエンザ／小児科定点)

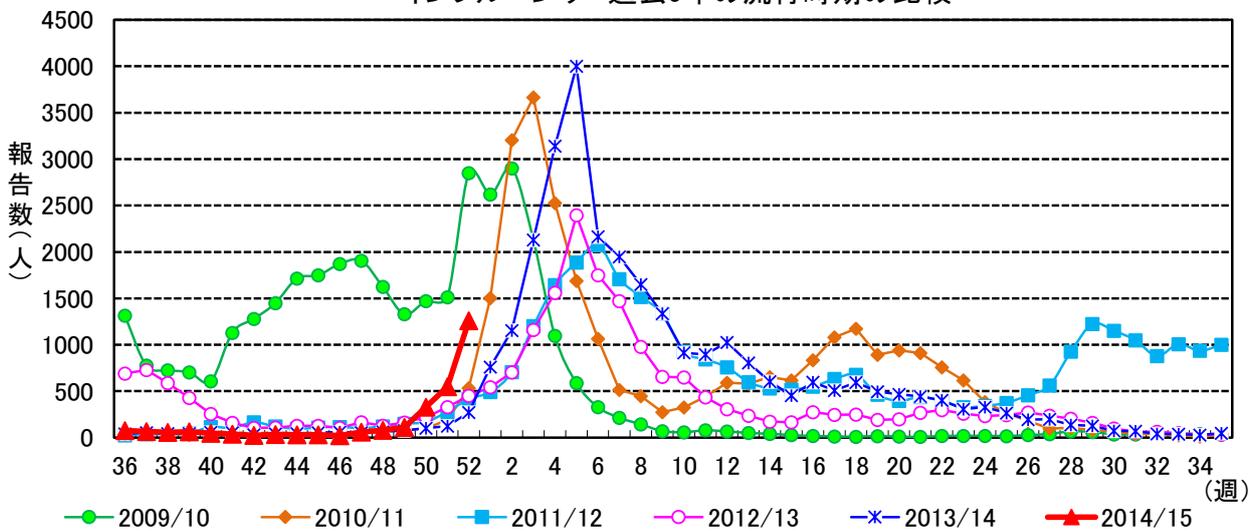
## インフルエンザ

2014年沖縄県内の患者報告数は31,232人、定点あたりの報告数は538.48人であった。沖縄県は、2012/13シーズン第32週（8月）から流行の兆しである1.0人／定点を下回った状態で2013/14シーズン（2013年第36週～2014年第35週）に入った。2014年第1週（1月）には13.10人／定点と注意報レベルを超え、第3週（1月）から第14週（3月）まで警報レベルが継続した。今シーズンのピークは、第5週（1月）68.98人／定点であった。その後は、第31週（7月）までおおむね流行の兆しレベルを継続した。2014/2015シーズンでは、第49週（12月）から流行の兆しレベル、第52週に注意報レベル（21.72人／定点）に達している。

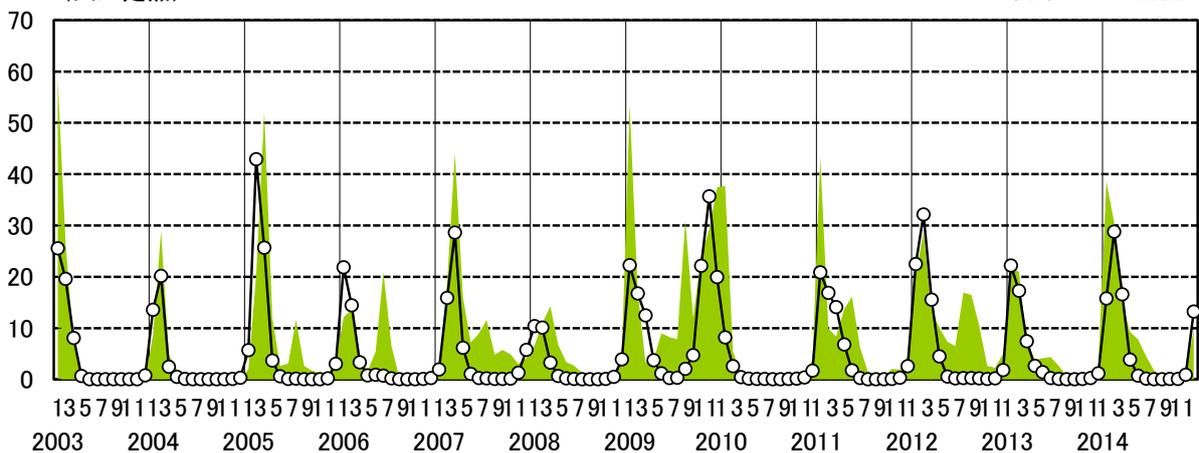
年齢階級別では、5-9歳が最も多く全体の19.6%を占め、続いて0-4歳が18.4%であった。

2013/14シーズンに検出されたインフルエンザウイルスは、AH3亜型が全体の約52%を占め最も多く、続いてAH1pdmが31%、B型28%であった。

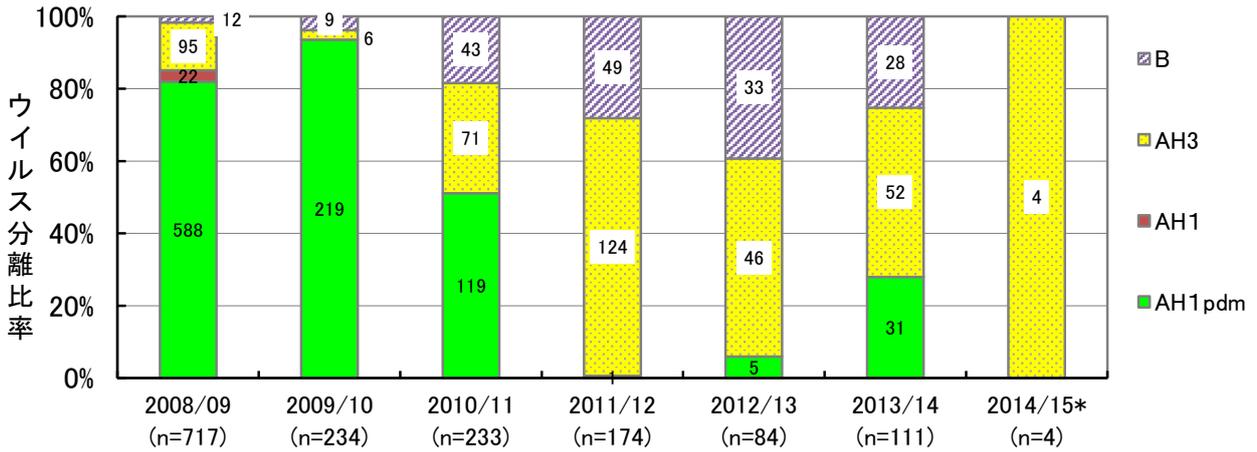
インフルエンザ 過去5年の流行時期の比較



(人／定点) 年次別患者発生状況の推移 沖縄県 全国

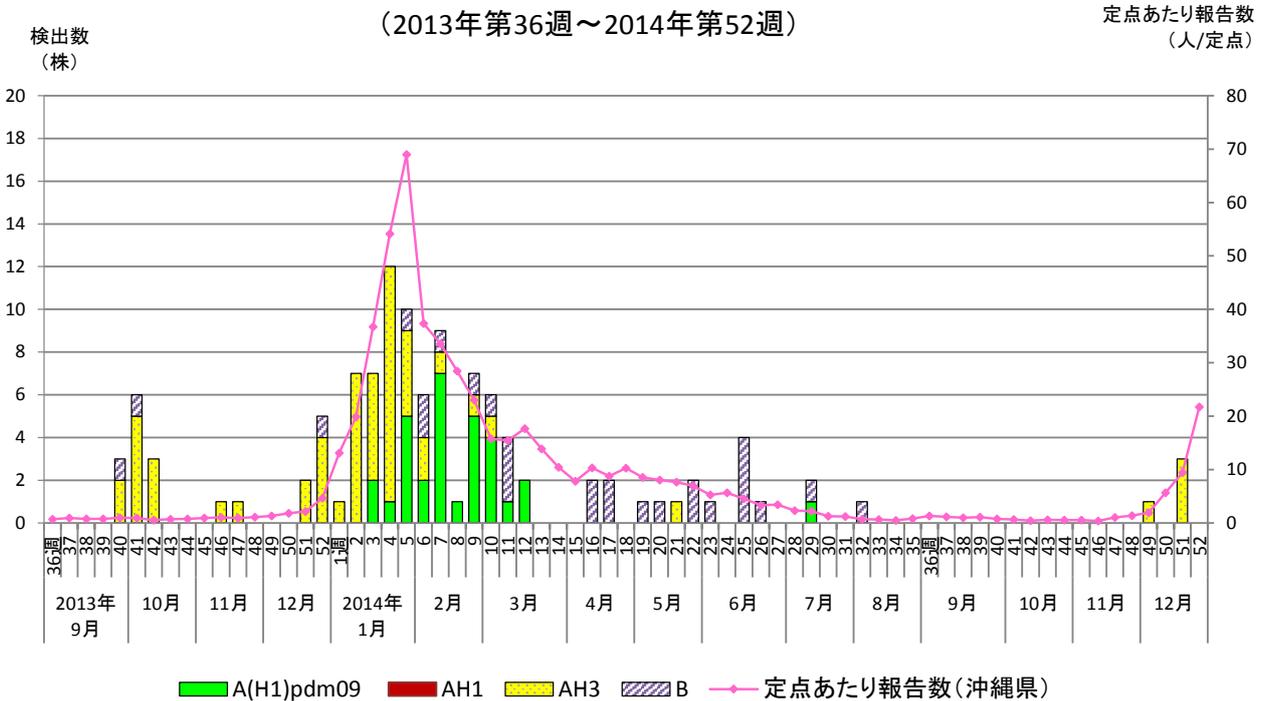


### シーズン別インフルエンザウイルス検出状況



\*2014年第36週～第52週

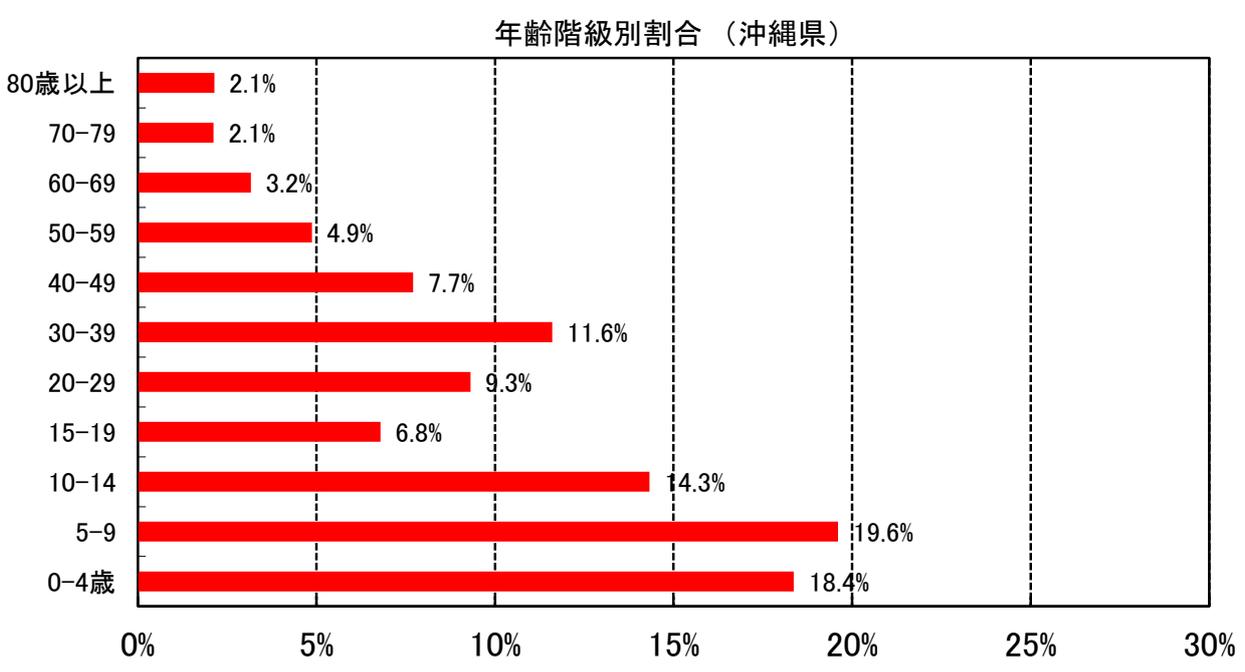
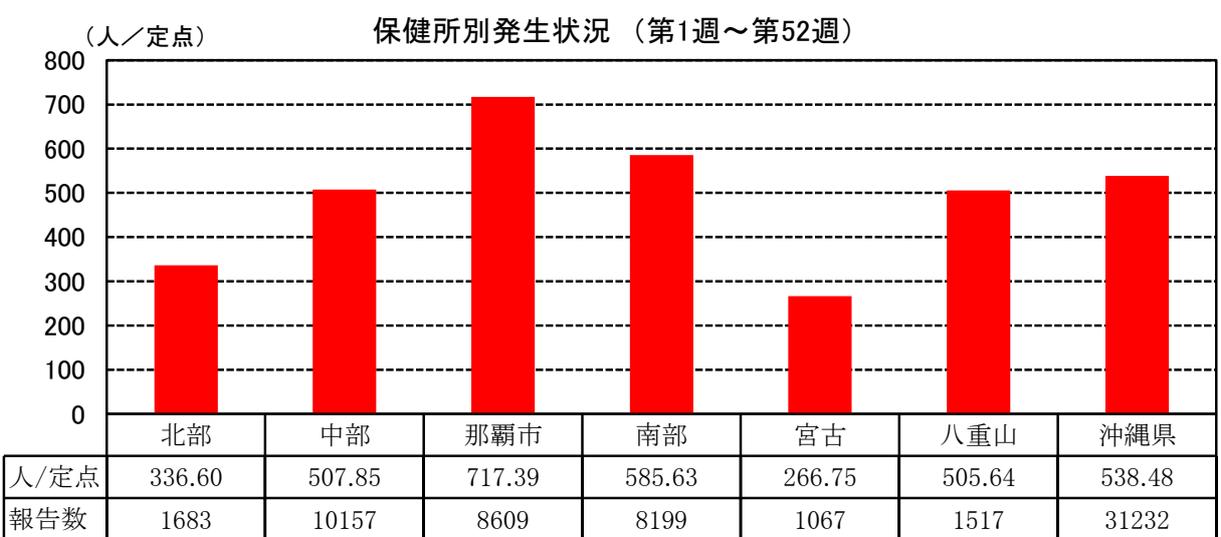
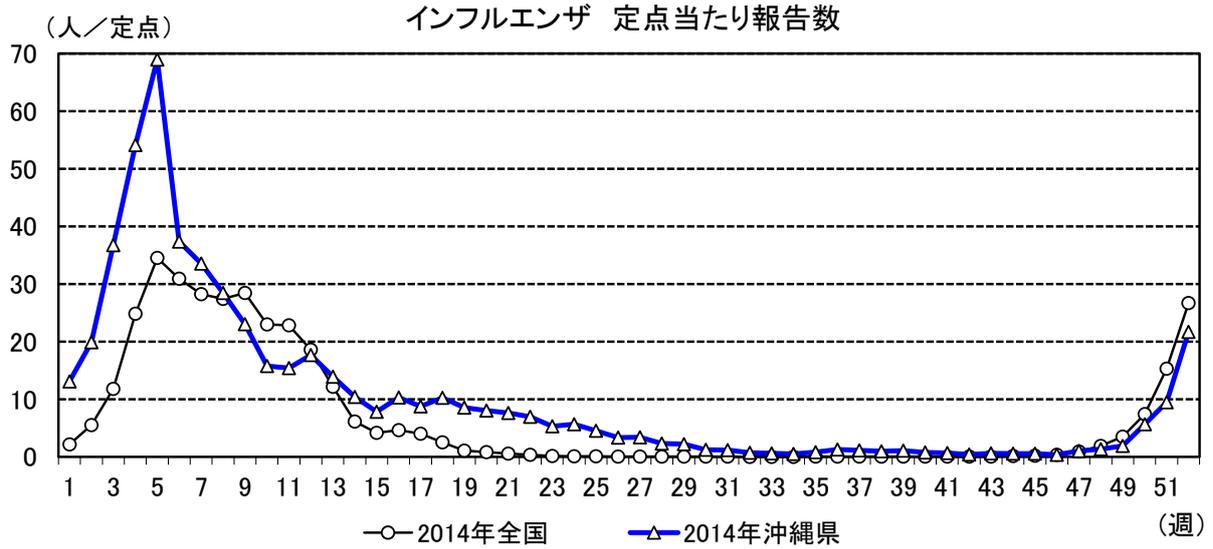
### 週別インフルエンザウイルス分離・検出状況 (n=115) (2013年第36週～2014年第52週)



### シーズン(9月～翌年8月)別の報告数合計: インフルエンザ

平均報告数 (2014/15)を除く	2009/10	2010/11	2011/12	2012/13	2013/14	2014/15*
30,007	37,845	28,157	32,729	21,735	29,570	2,881

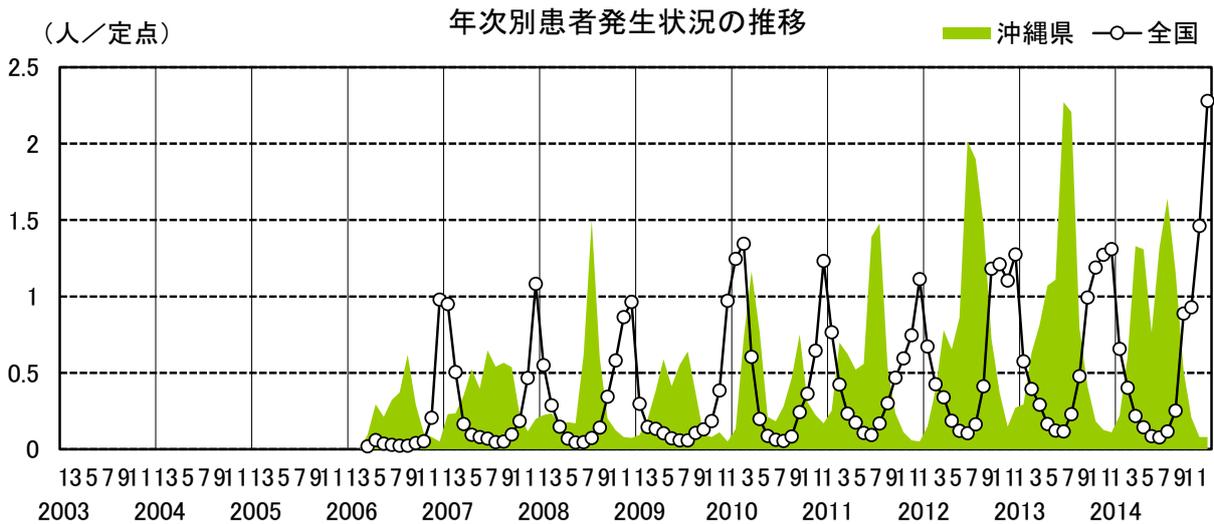
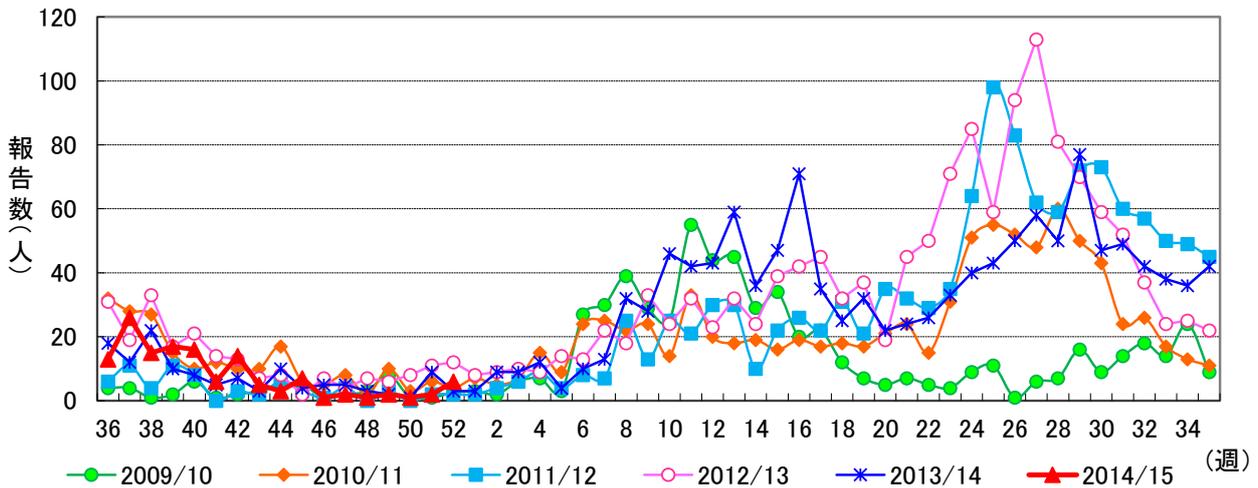
\*2014年9月～12月末(第36週～第52週)



## RSウイルス感染症

RSウイルス感染症は、RSウイルスによる急性呼吸器感染症である。生後1歳までに半数以上が、2歳までにほぼ100%の児がRSウイルスに少なくとも1度は感染するとされている。特に乳児期早期（生後数週間～数カ月間）にRSウイルスに初感染した場合は、重症化しやすいため感染しないよう注意が必要である。

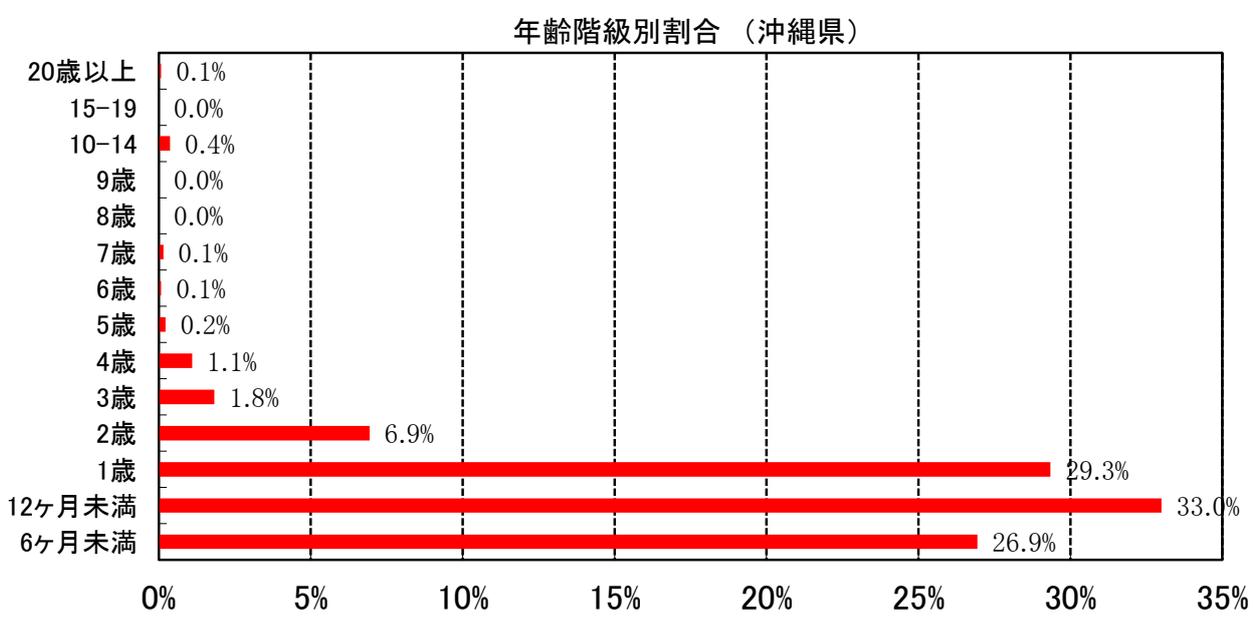
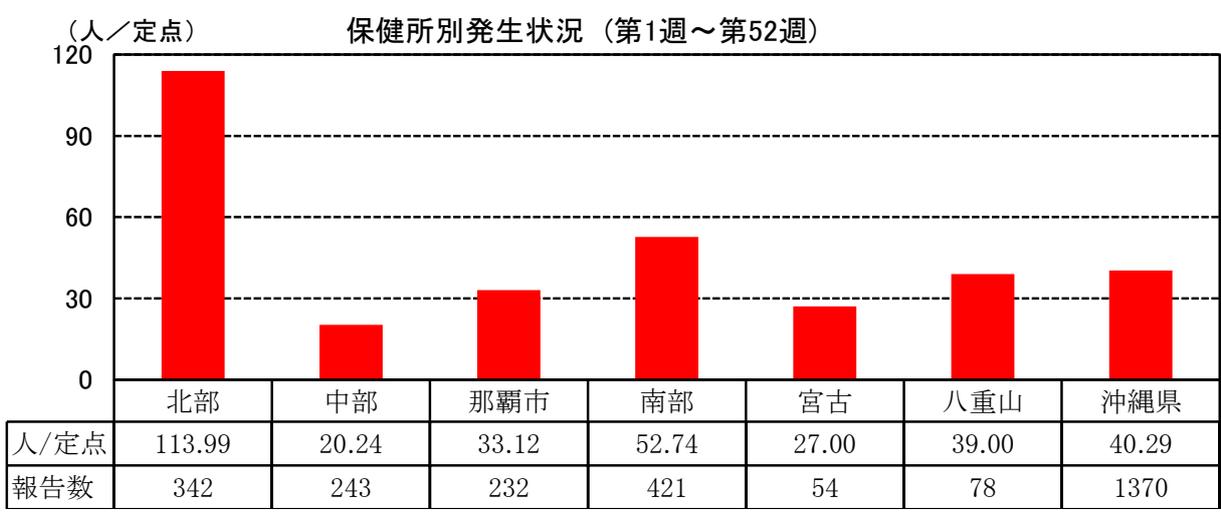
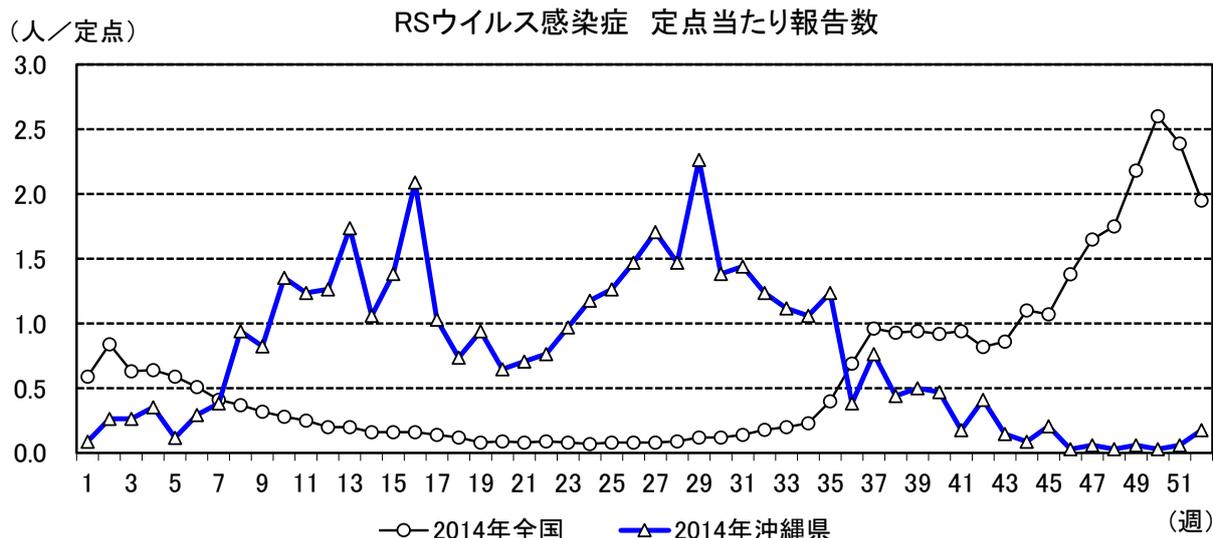
2014年の県内における患者報告数は1,370人、定点当たり40.29人であった。RSウイルス感染症の患者数は年々増加しており、今シーズンは過去5シーズンでもっとも報告数が多かった2012/13シーズンに次いで報告が多かった。全国では冬季に流行のピークが認められたのに対し、本県では春季と夏季に流行が認められた。年齢階級別では6ヶ月以上12ヶ月未満児が最も多く全体の33.0%を占めていた。



シーズン(9月～翌年8月)別の報告数合計：RSウイルス感染症

平均報告数 (2014/15を除く)	2009/10	2010/11	2011/12	2012/13	2013/14	2014/15*
1,193	652	1,075	1,285	1,592	1,360	137

\*2014年9月～12月末（第36週～第52週）



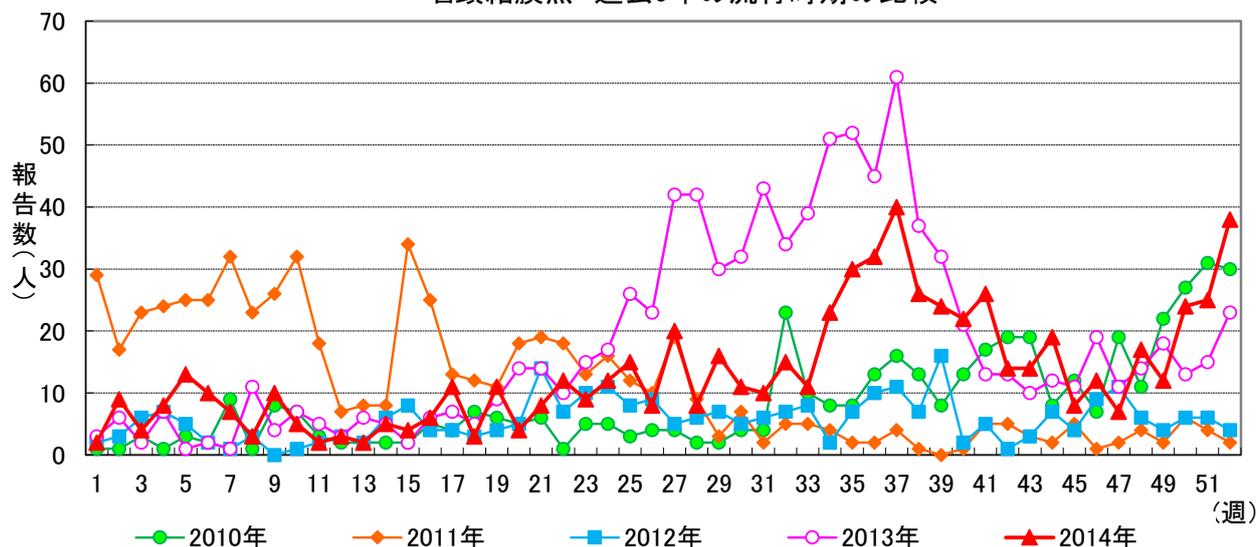
## 咽頭結膜熱（プール熱、PCF）

咽頭結膜熱は、アデノウイルスによる発熱、咽頭炎、眼症状を主とする小児の急性ウイルス感染症であり、プールを介した感染も多く、プール熱とも呼ばれている。

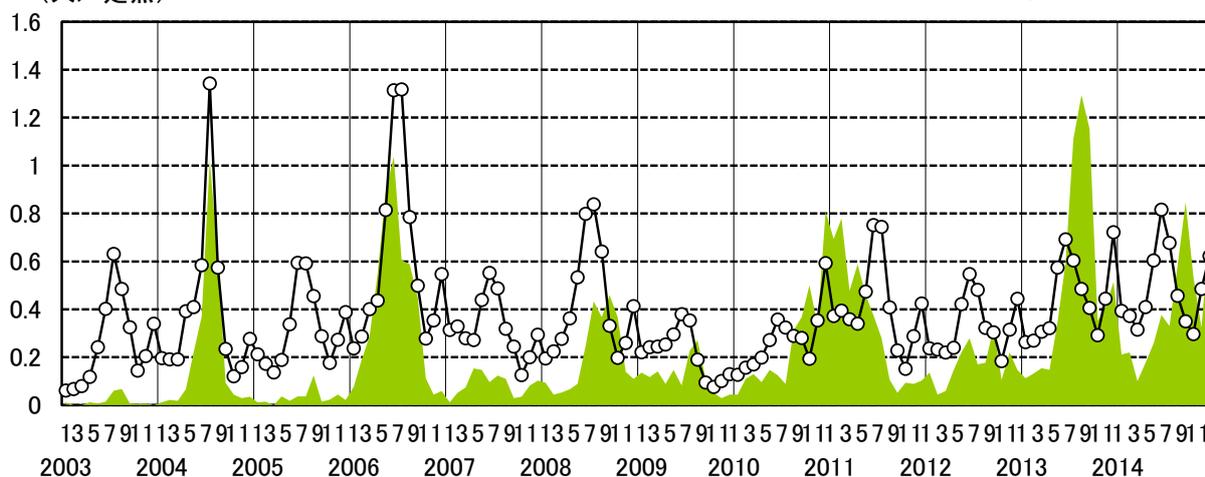
2014年県内の患者報告数は690人、定点当たり20.29人であり、過去5年間で最大の報告数であった昨年に次ぐ件数となった。全国では夏季に多いが、本県では秋季及び年末にかけて多くなった。第50週（12月）から宮古保健所管内、第51週から北部保健所管内で警報レベルに達した。

保健所別では、宮古保健所の患者報告数が39.50人/定点と最も多かった。年齢階級別では、1歳が最も多く全体の30.7%を占めていた。

### 咽頭結膜熱 過去5年の流行時期の比較



### 年次別患者発生状況の推移 (人/定点)

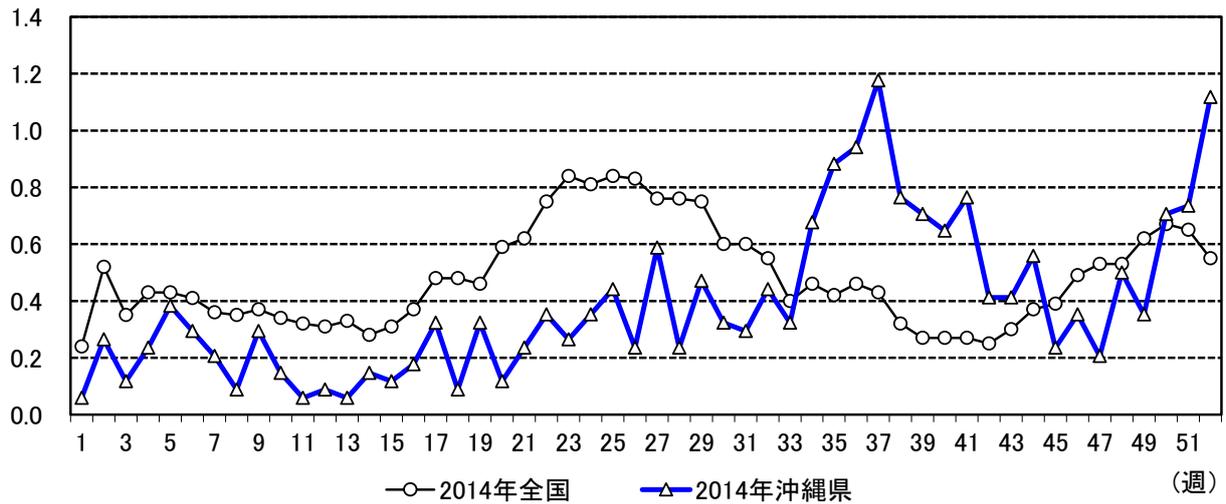


### 年別の報告数合計：咽頭結膜熱

平均報告数	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年
596	448	603	295	944	690

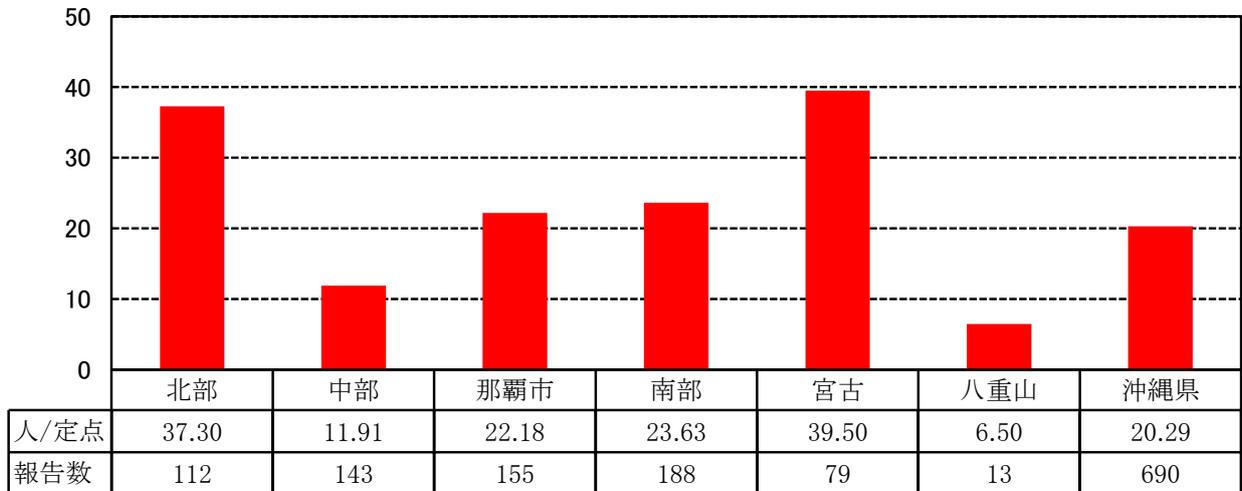
(人/定点)

### 咽頭結膜熱 定点当たり報告数

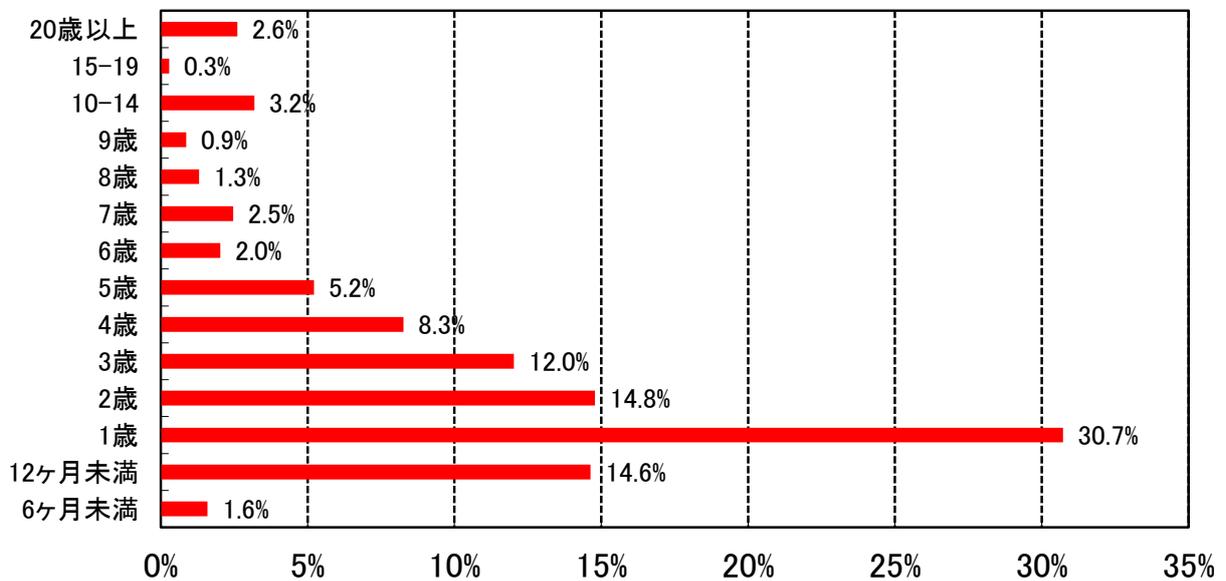


(人/定点)

### 保健所別発生状況 (報告数及び定点あたり報告数)



### 年齢階級別割合 (沖縄県)

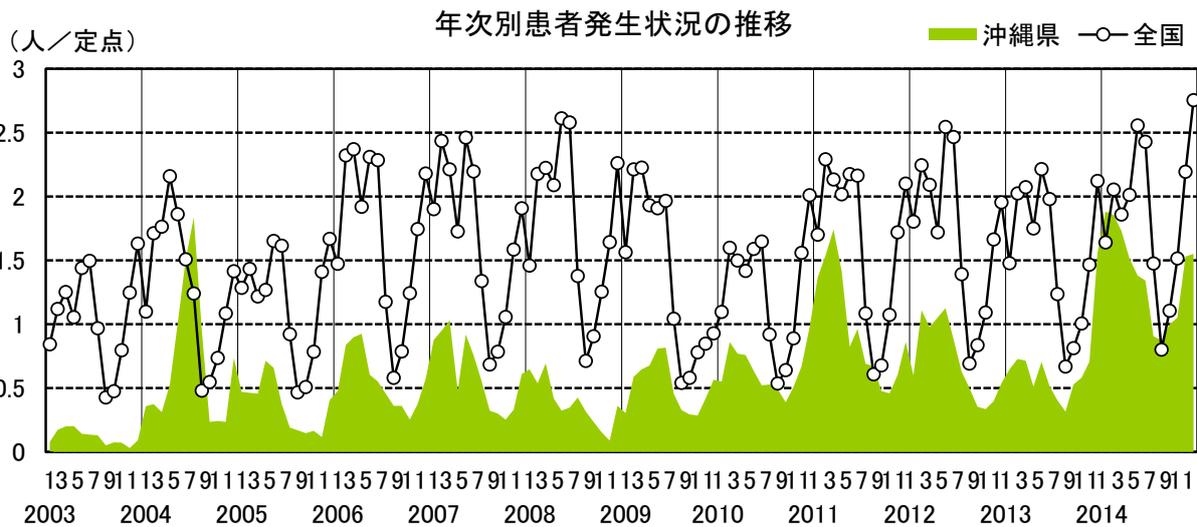
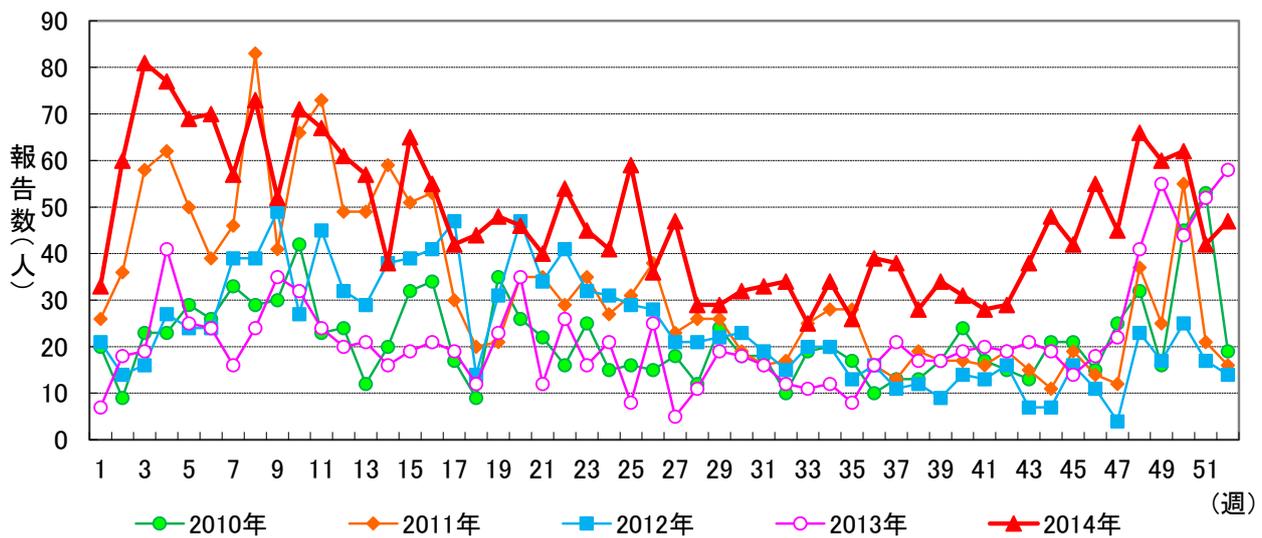


## A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は、いずれの年齢でも起こり得るが、学童期の小児に最も多く認められる。乳幼児では咽頭炎、年長児や成人では扁桃炎が現れ、発赤毒素に免疫のない人は猩紅熱を呈する。発疹を伴うこともあり、リウマチ熱や急性糸球体腎炎などの二次疾患を起こすこともある。

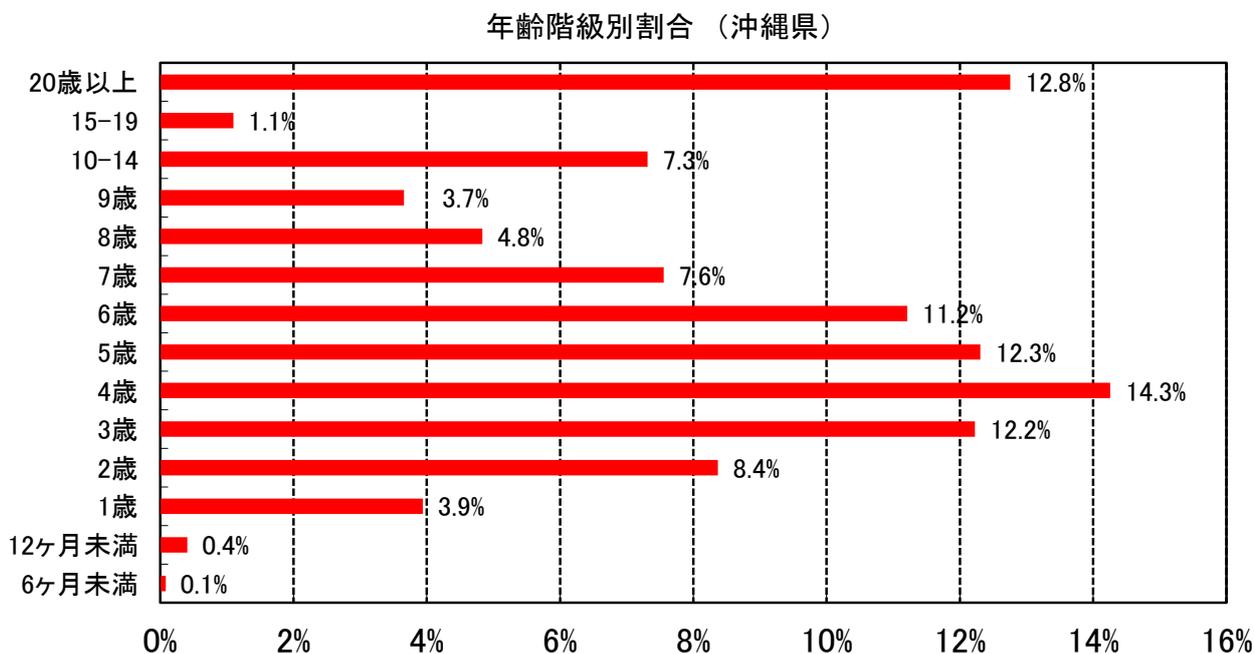
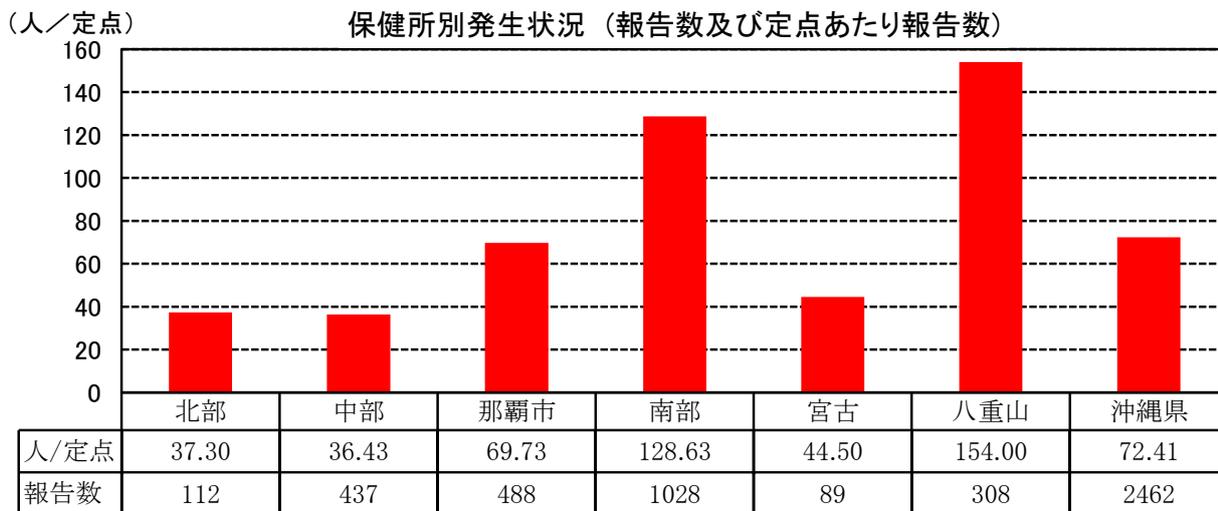
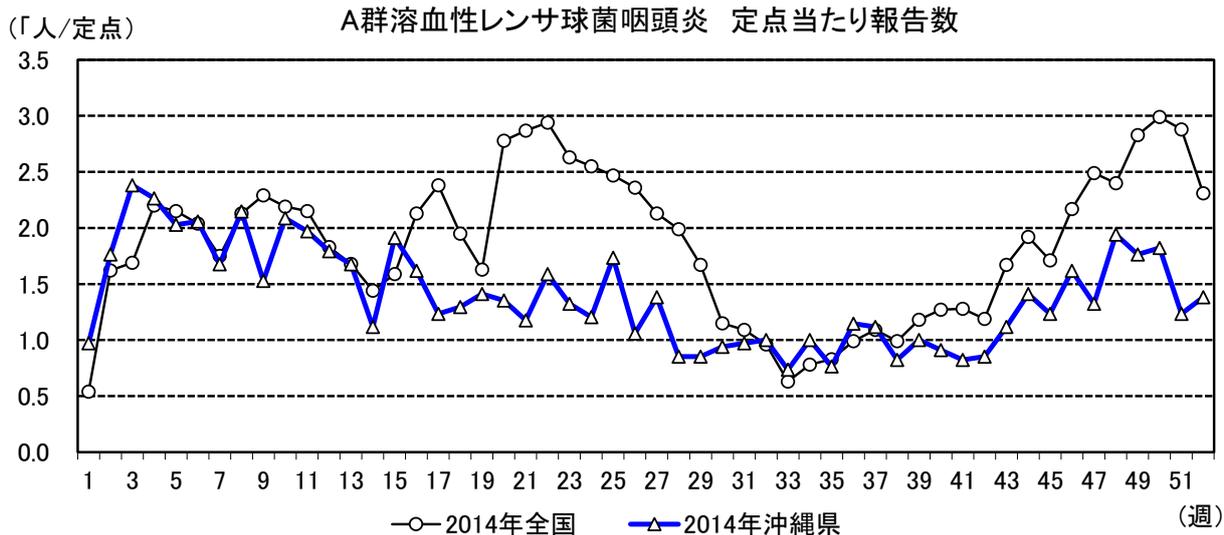
2014年県内の患者報告数は2,462人、定点当たり72.41人であり、前年比2.14と大幅に増加した。全国では夏季及び冬季にピークがみられるが、県内では、冬季に報告が多い。八重山保健所管内では、第44週（10月）から年末まで警報レベルが継続した。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 過去5年の流行時期の比較



シーズン別の報告数合計: A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

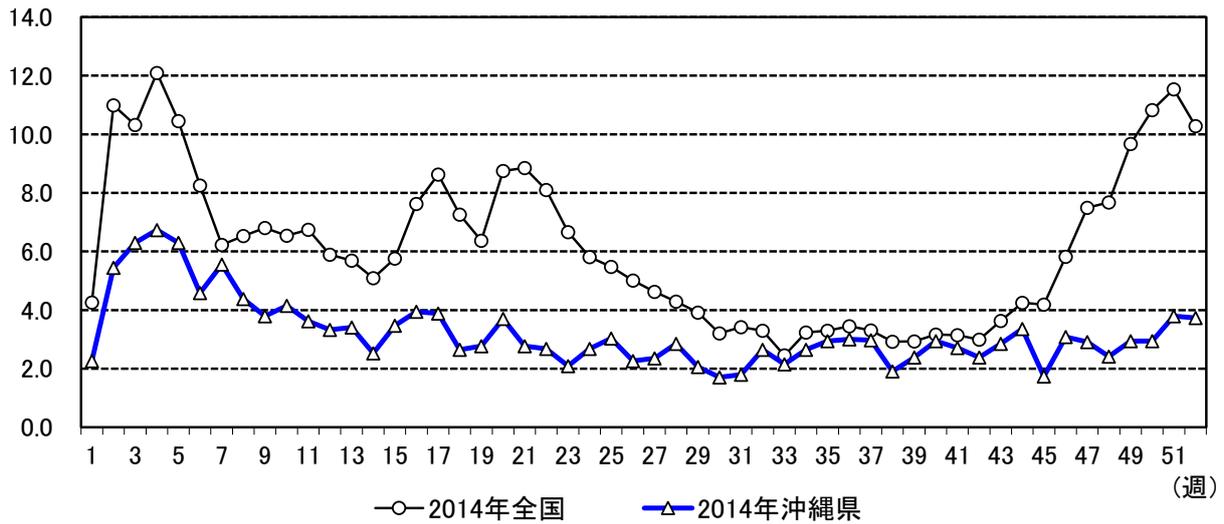
平均報告数	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年
1,535	1,130	1,692	1,245	1,144	2,462





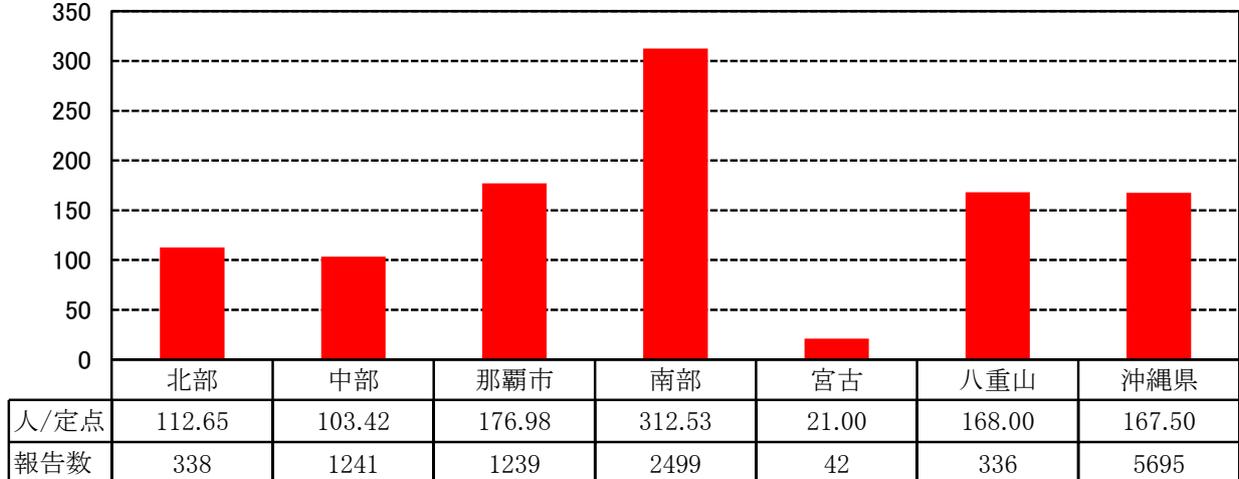
(人/定点)

### 感染性胃腸炎 定点当たり報告数

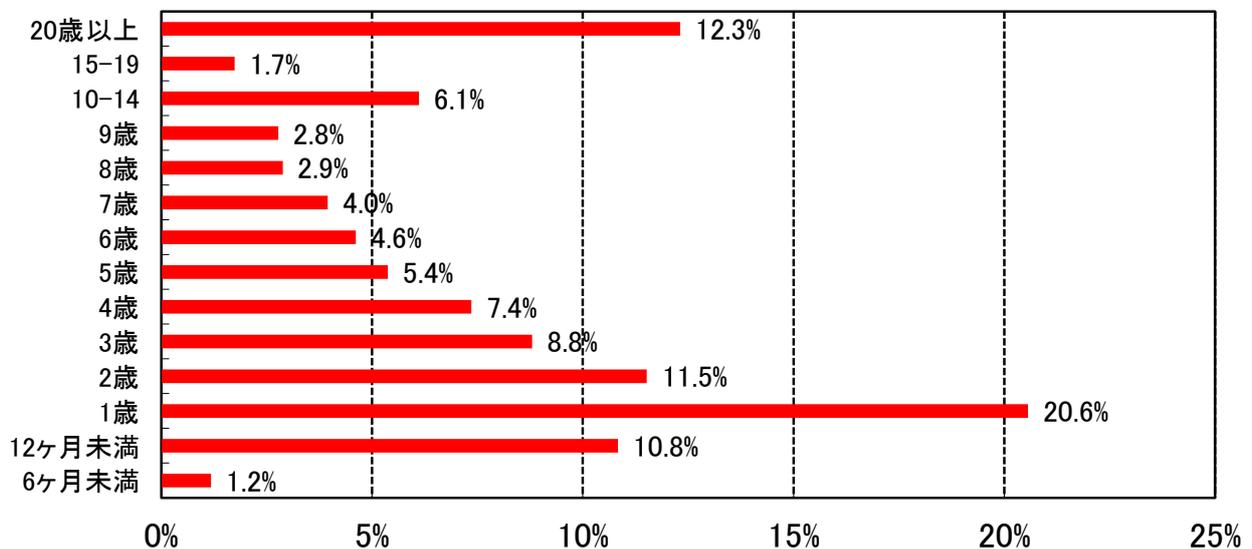


(人/定点)

### 保健所別発生状況 (第1週～第52週)



### 年齢階級別割合 (沖縄県)



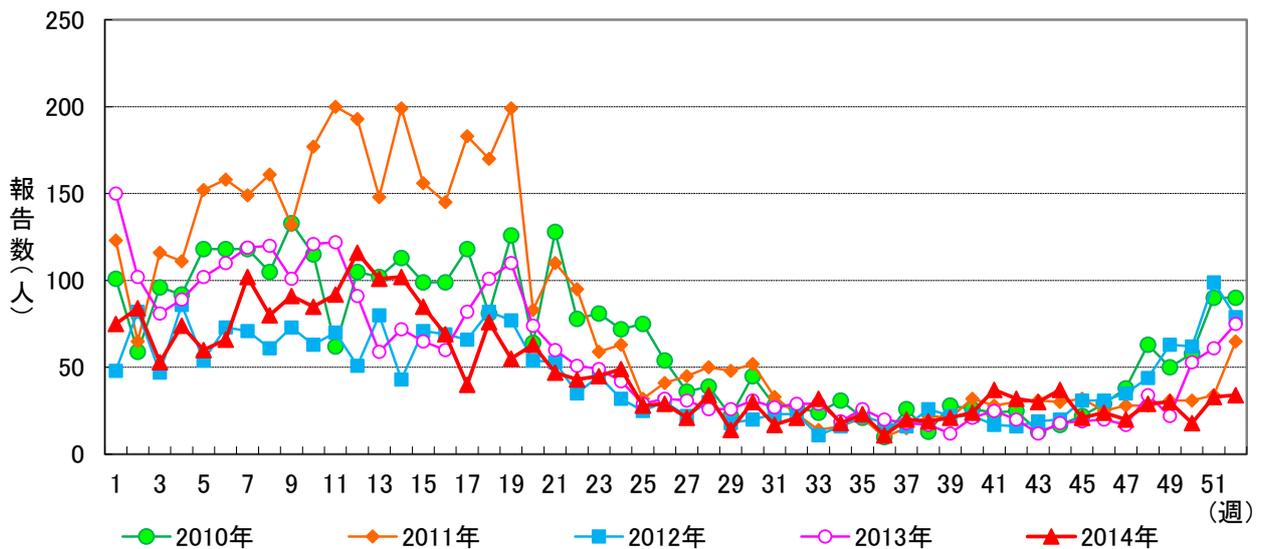
## 水痘

水痘は、水痘帯状疱疹ウイルス（VZV）によって起こる急性の伝染性疾患である。例年12月～7月に患者発生報告が多く、罹患年齢はほとんどが9歳以下であることが知られている。

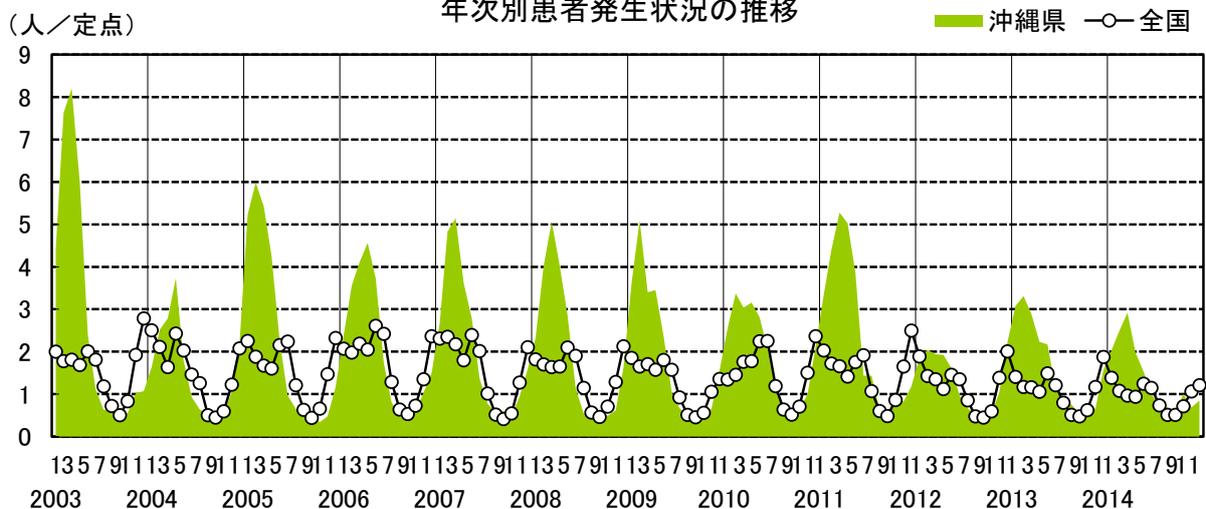
2014年県内の患者報告数は2,460人、定点当たり72.35人であり、前年比0.85と減少した。県内では、例年1月～5月にかけて流行がみられ、2014年は1月から4月にかけて報告が多かった。この時期、各保健所では警報・注意報レベルに達している。最も期間の長かった宮古保健所では、第2週（1月）に注意報レベル、第4週に警報レベルに達した後、第16週（4月）まで継続した。

年齢階級別では、1歳が最も多く全体の22.6%、続いて2歳が全体の21.9%、3歳児17.6%を占めていた。2014年10月から定期予防接種の対象（1歳以降に2回、弱毒生ワクチン）となり、今後の発生動向が注目される。

### 水痘 過去5年の流行時期の比較

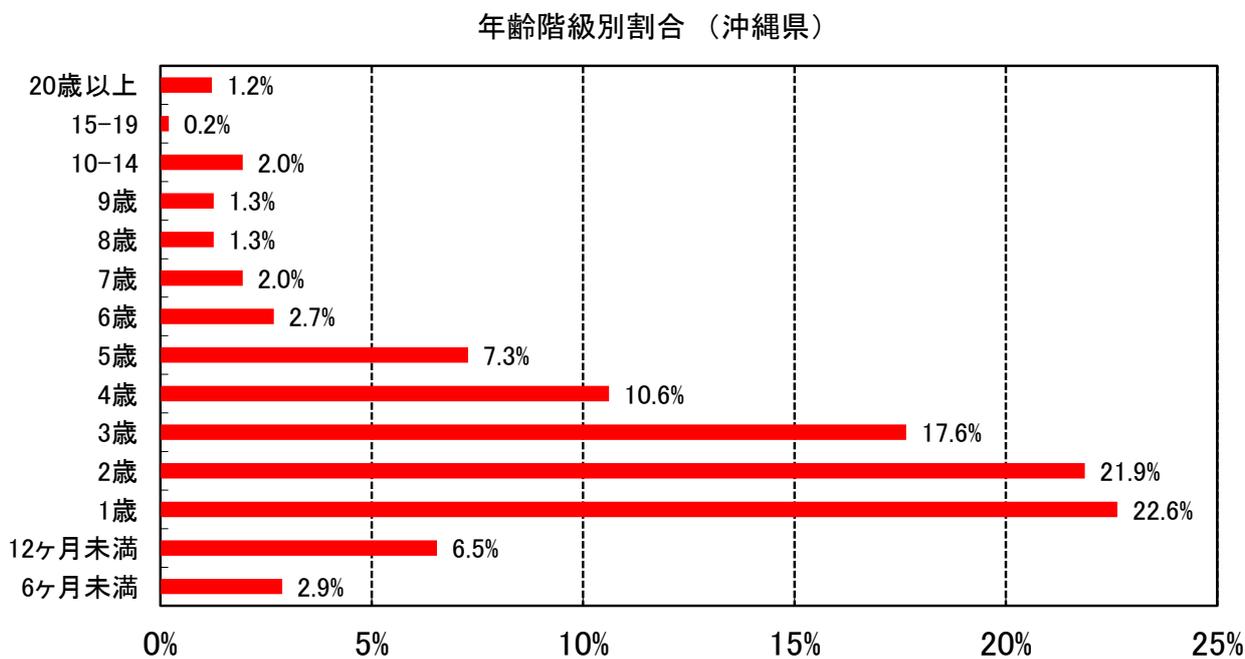
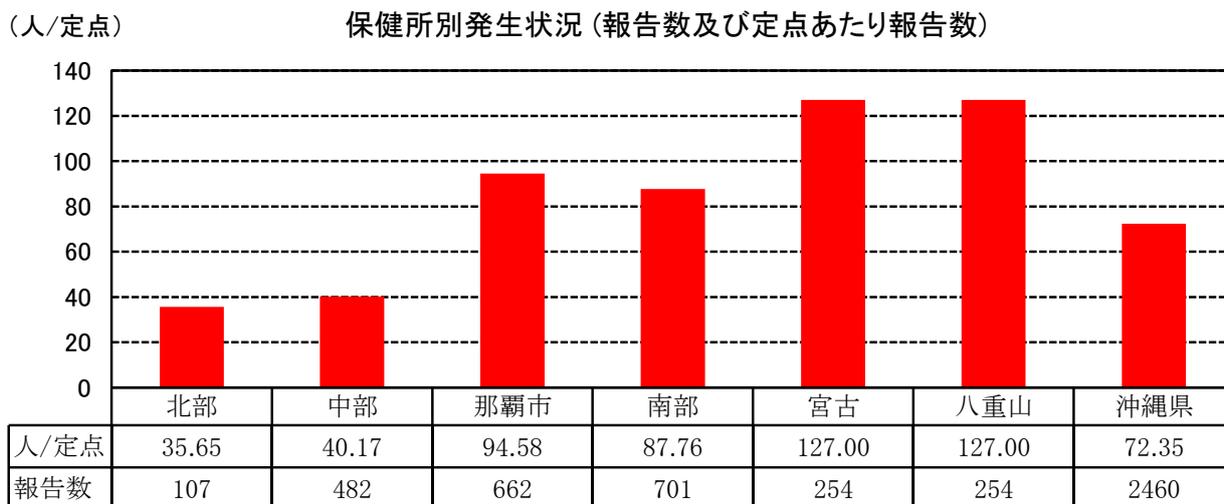
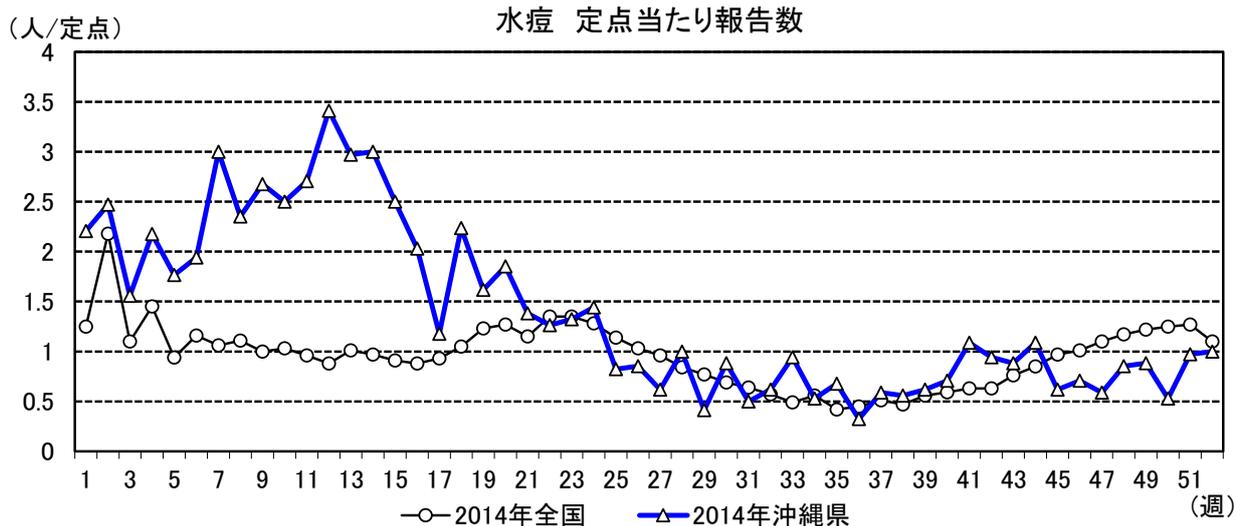


### 年次別患者発生状況の推移



### シーズン別の報告数合計: 水痘

平均報告数	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年
3,066	3,407	4,215	2,346	2,902	2,460

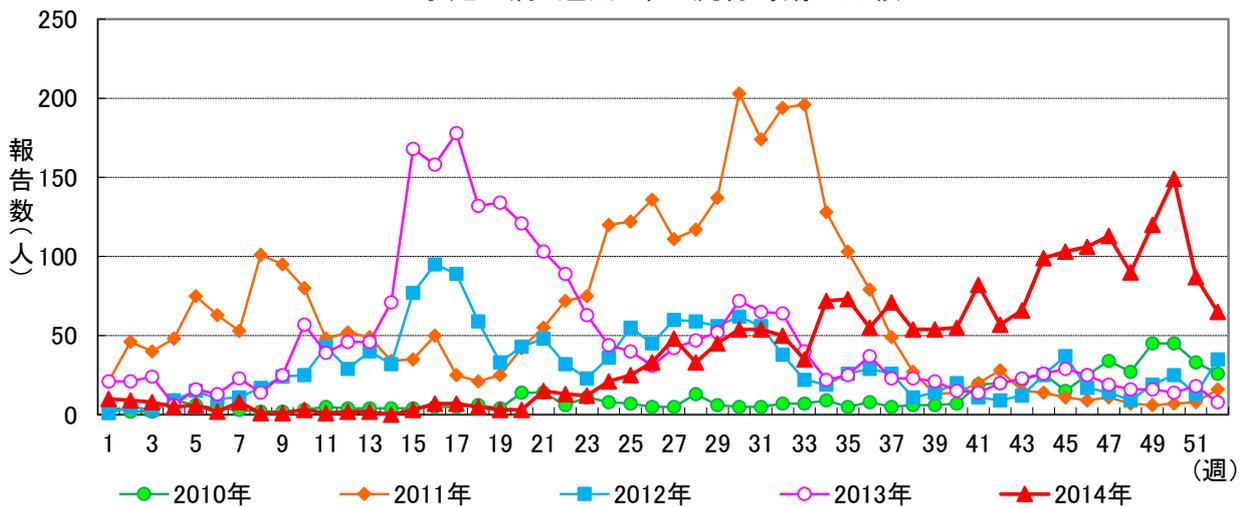


## 手足口病

手足口病は、口腔粘膜および手や足などに現れる水疱性の発疹を主症状とした急性ウイルス感染症で、幼児を中心に夏季に流行が見られる。コクサッキーA16 (CA16)、CA10、CA6、エンテロウイルス71 (EV71) などが起因ウイルスである。EV71は中枢神経系合併症の発生率が他のウイルスより高いことが知られている。

2014年県内の患者報告数は2,095人、定点当たり61.62人であり、前年比0.85と減少した。冬季は全国を上回る報告数であった。警報レベルに達したのは、八重山保健所管内で第34週から第42週（8月から10月）、北部保健所で第39週から第50週（9月から12月）、那覇市保健所・南部保健所管内で第49週から第52週（12月）であった。年齢階級別では、1歳が最も多く、全体の43.8%を占めていた。

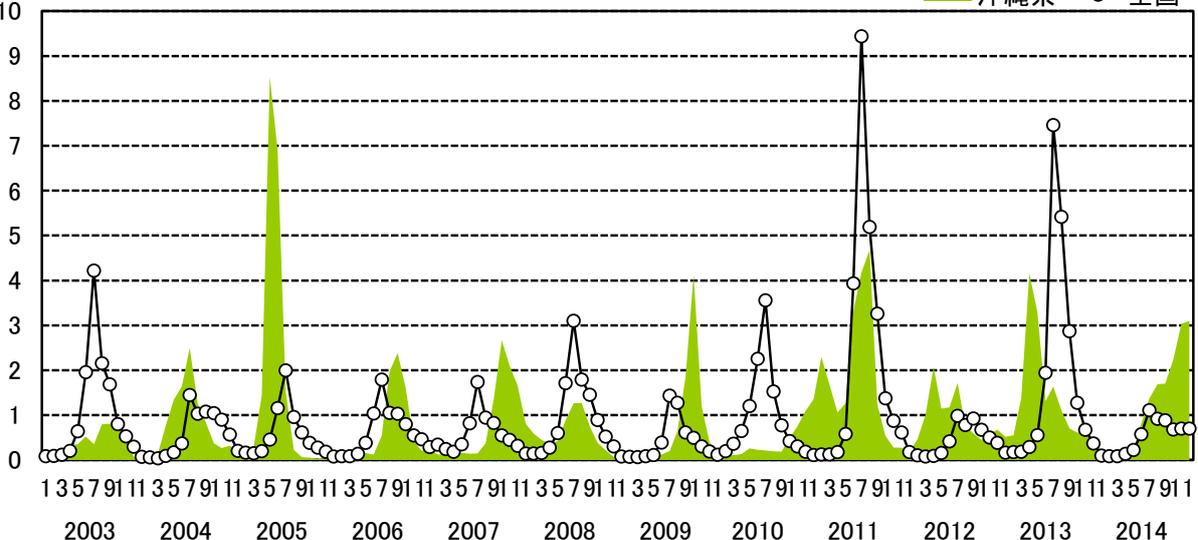
手足口病 過去5年の流行時期の比較



(人/定点)

年次別患者発生状況の推移

■ 沖縄県 ○ 全国

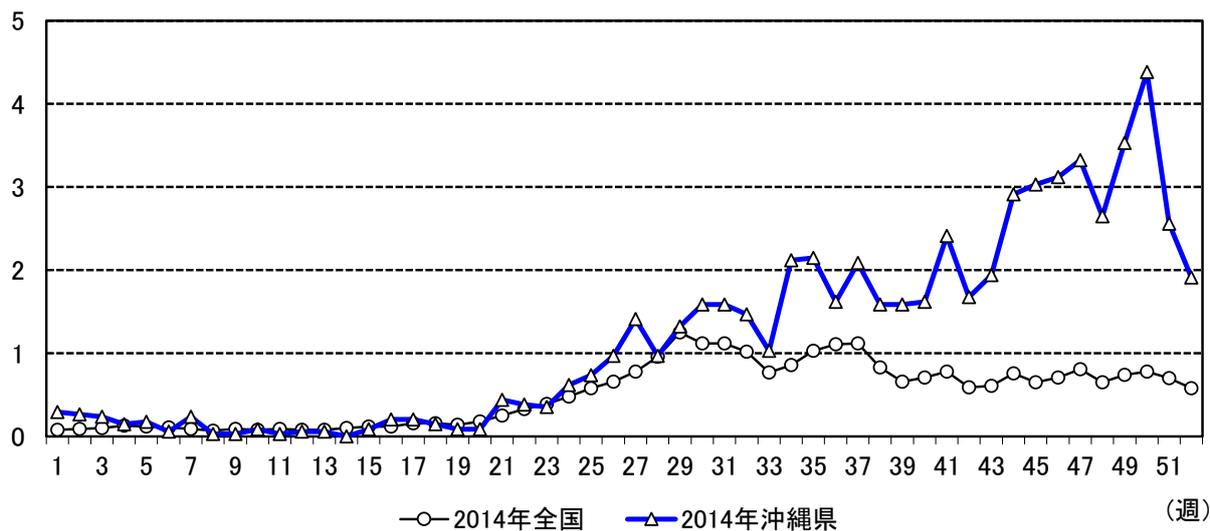


シーズン別の報告数合計：手足口病

平均報告数	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年
	575	3,280	1,623	2,459	2,095

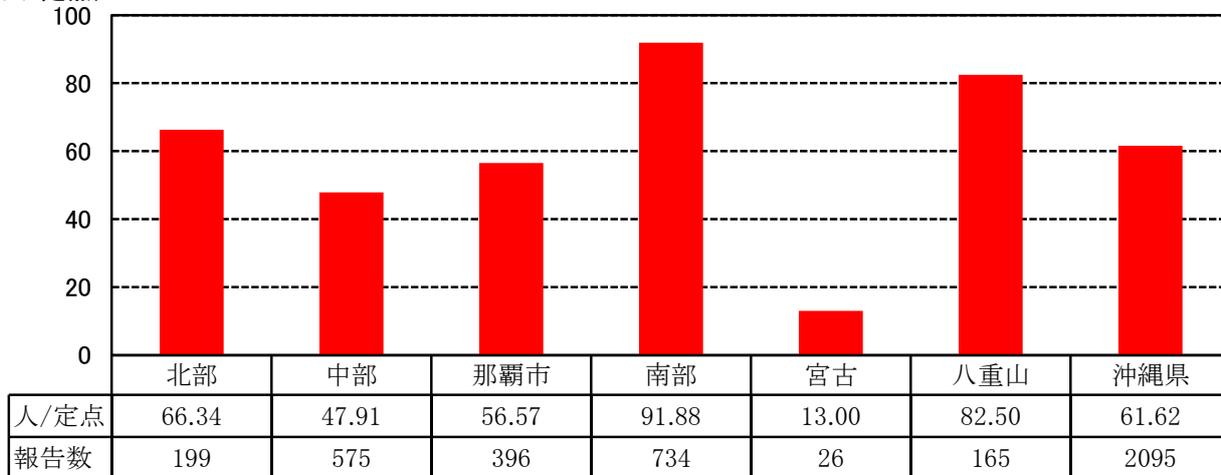
(人/定点)

手足口病 定点あたり報告数

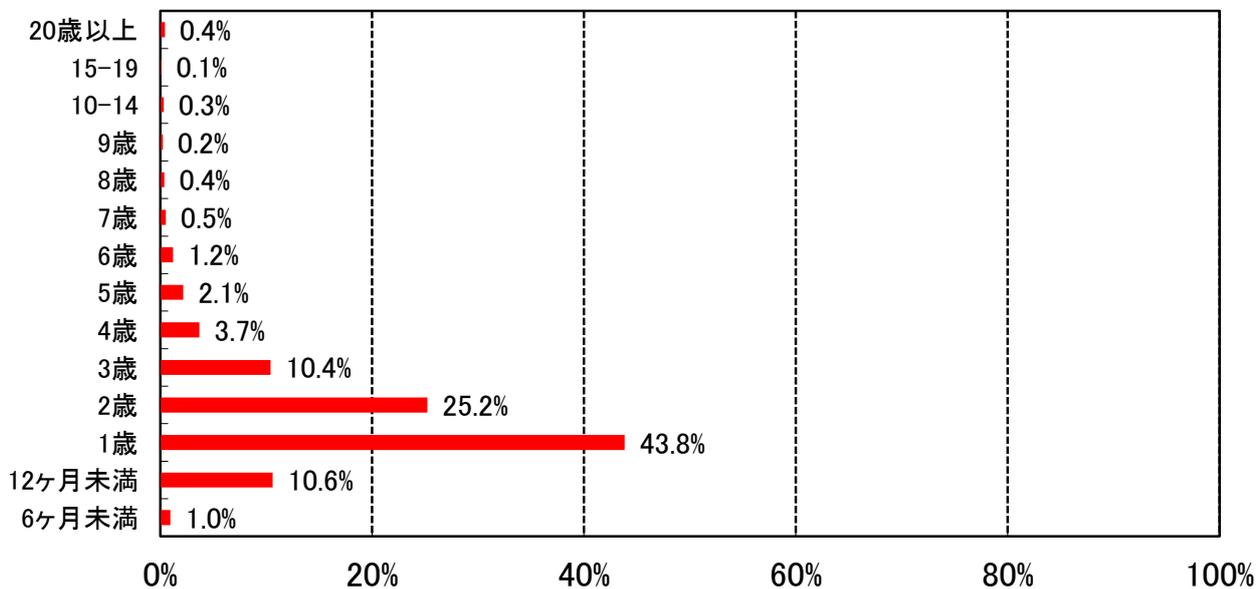


(人/定点)

保健所別発生状況 (報告数及び定点あたり報告数)



年齢階級別割合 (沖縄県)

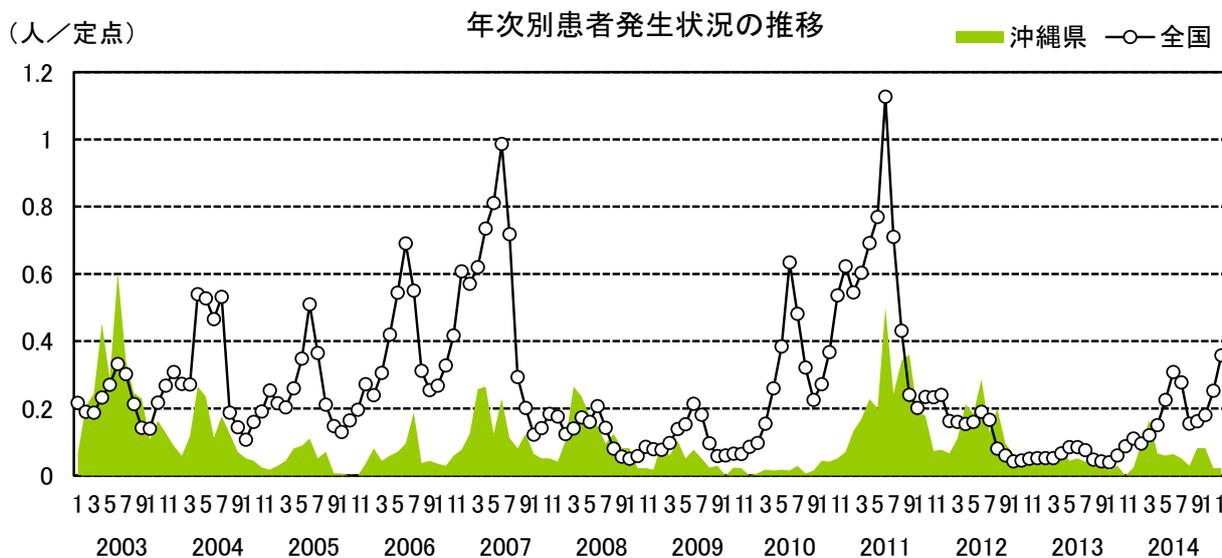
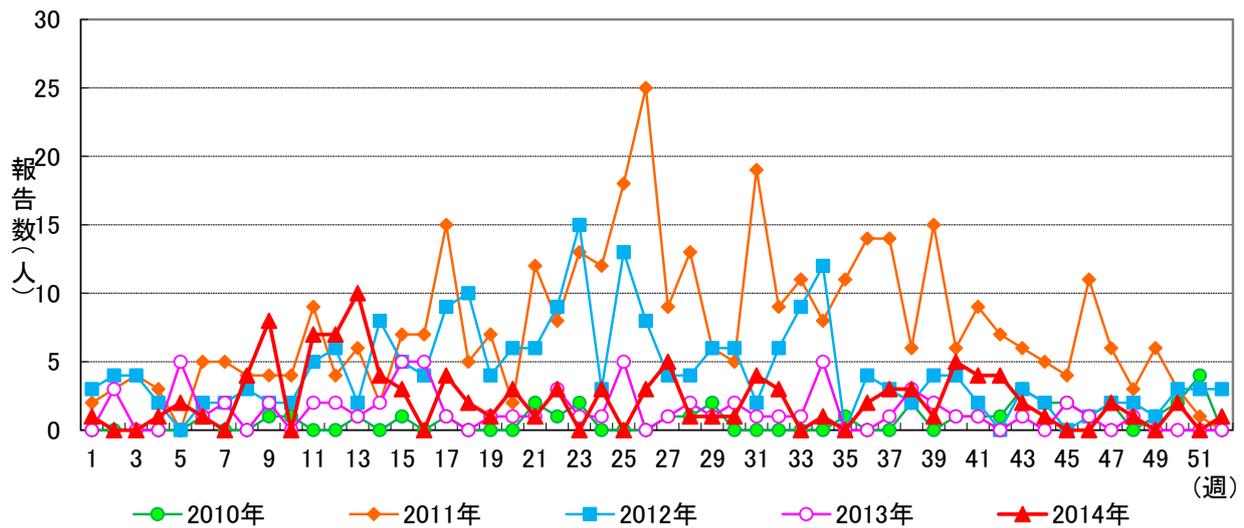


## 伝染性紅斑

伝染性紅斑は、頬に出現する蝶翼状の紅斑を特徴とし、小児を中心としてみられる流行性発疹性疾患である。両頬がリンゴのように赤くなることから、「リンゴ病」と呼ばれることもある。1月から7月にかけて報告数が増加し、9月頃最も少なくなるという流行パターンを呈する。

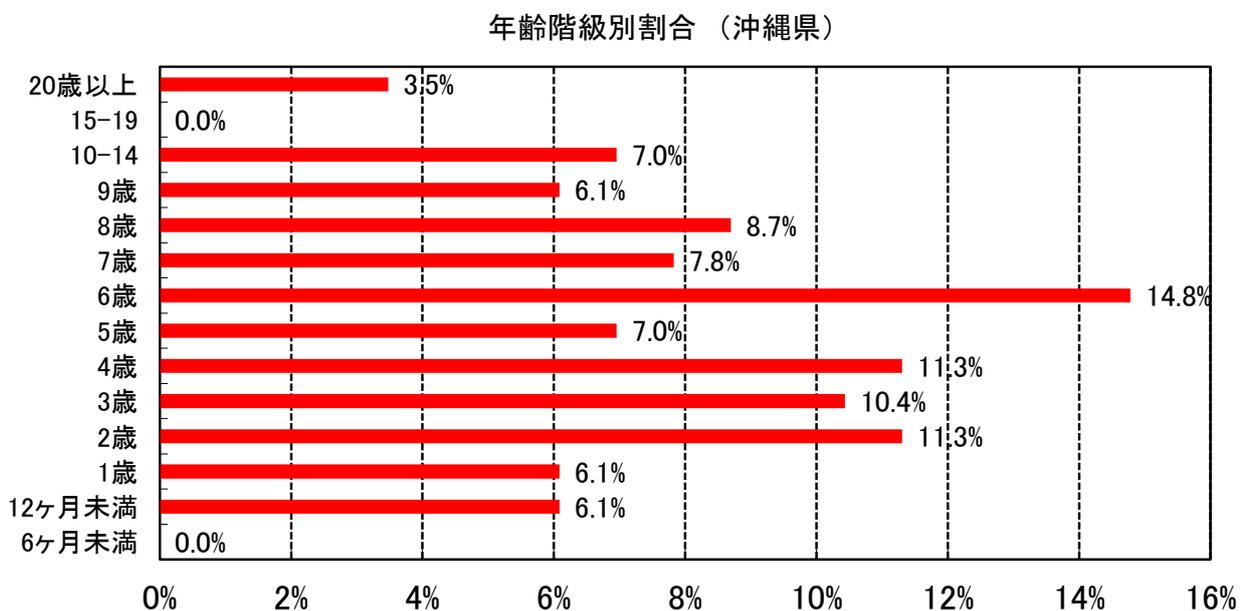
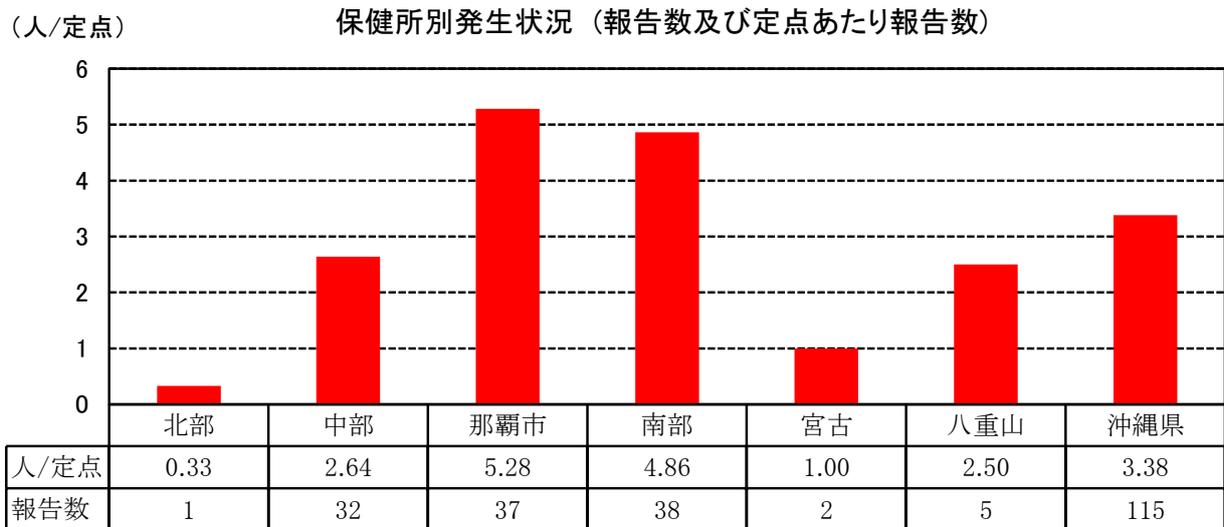
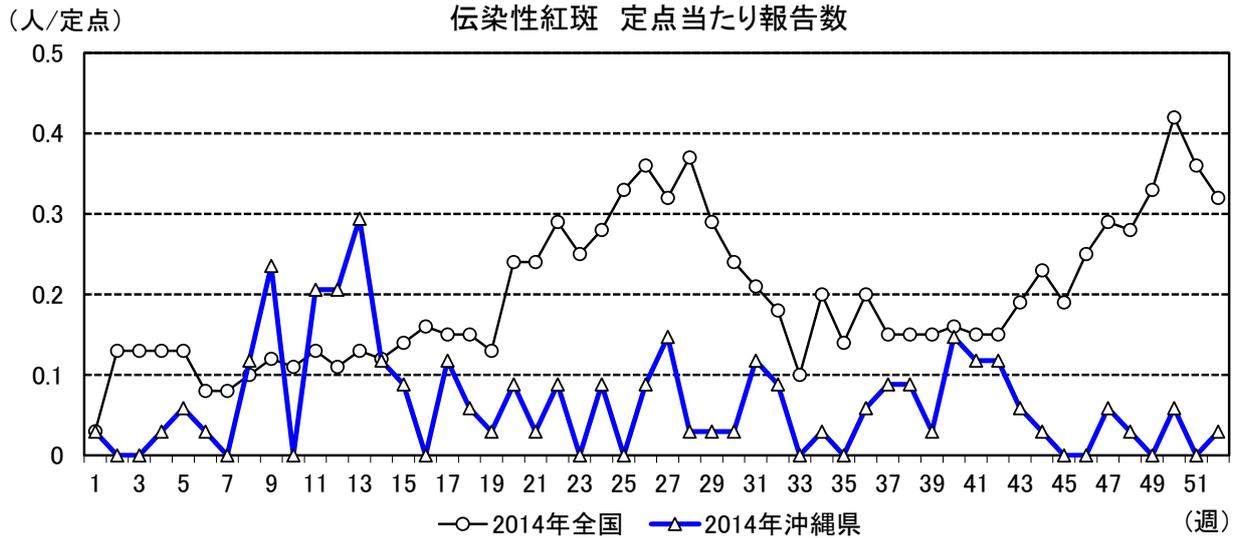
2014年県内の患者報告数は115人、定点当たり3.38人であり、前年比1.62と増加した。年間を通して警報レベルには達しなかった。年齢階級別では、0歳から成人まで幅広く分布していた。

伝染性紅斑 過去5年の流行時期の比較



シーズン別の報告数合計：伝染性紅斑

平均報告数	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年
168	38	393	225	71	115

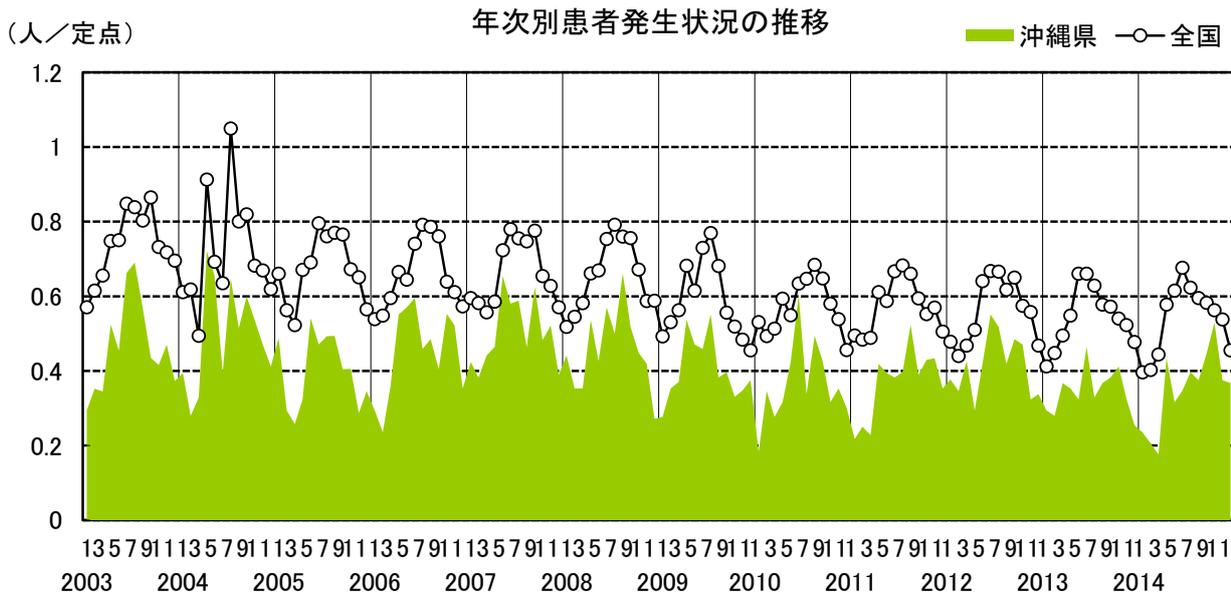
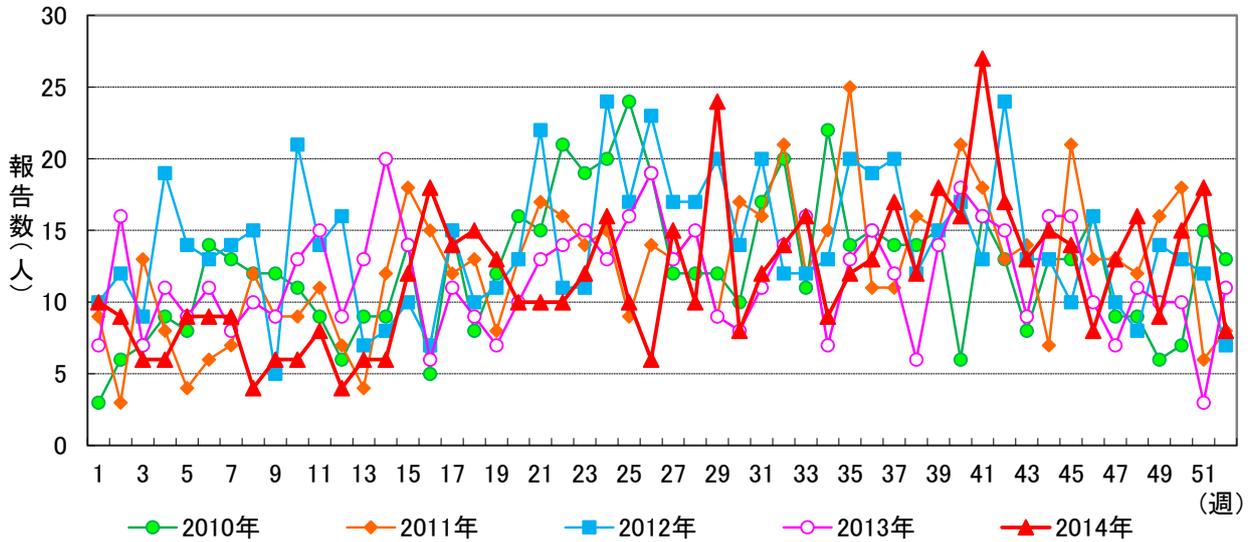


## 突発性発疹

突発性発疹は、乳児期に罹患することが多く、突然の高熱と解熱前後の発疹を特徴とするウイルス感染症で、予後は一般に良好である。原因ウイルスは、ヒトヘルペスウイルス6あるいは7であることが多い。

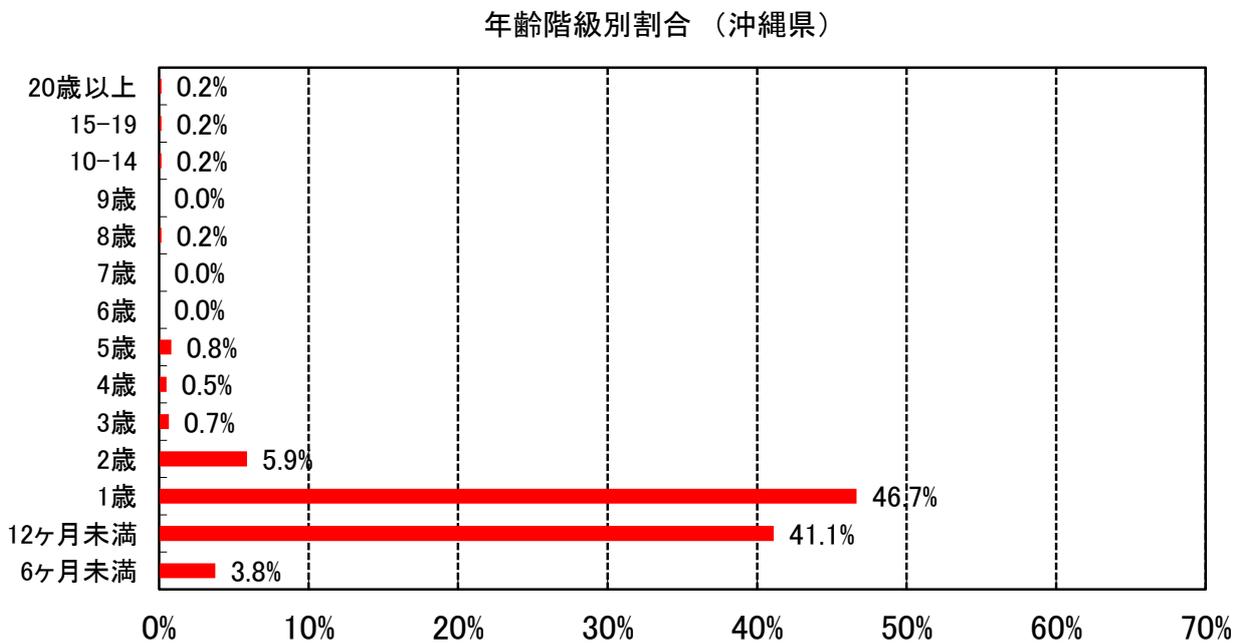
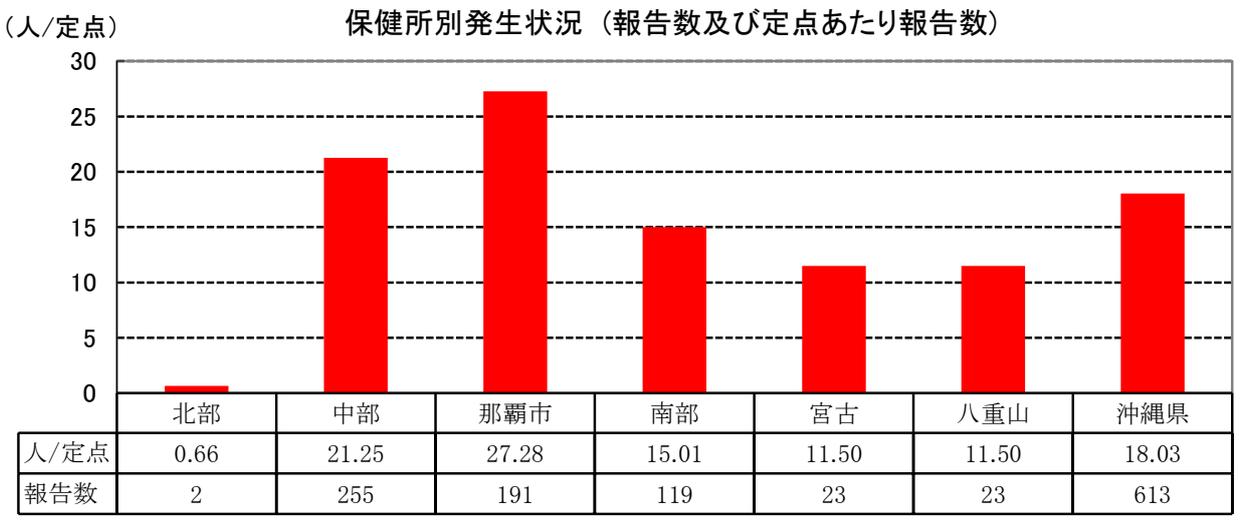
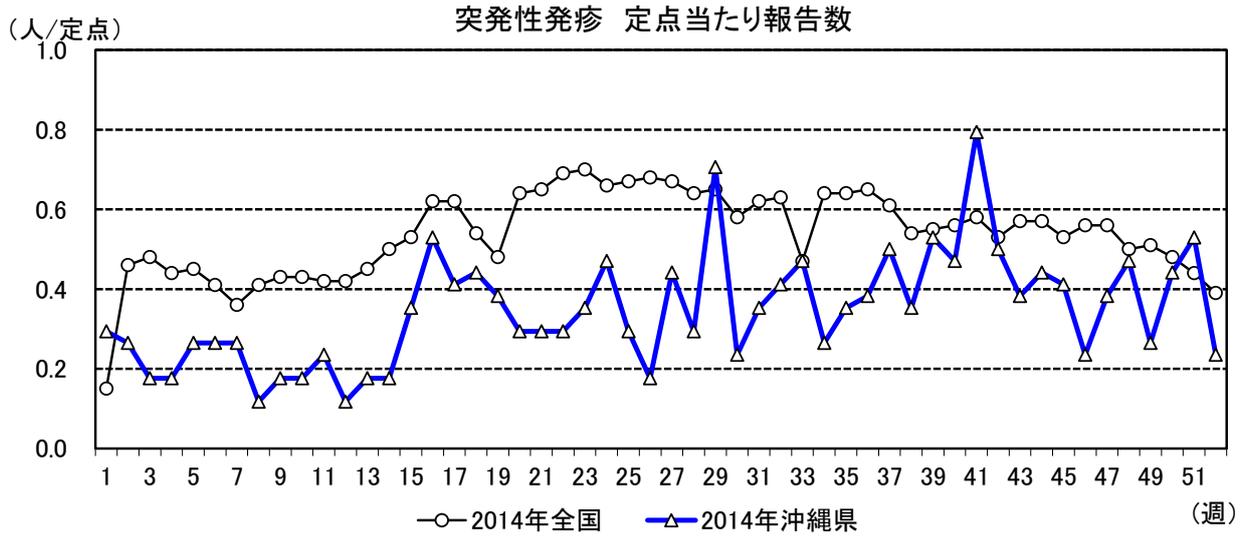
2014年県内の患者報告数は613人、定点当たり18.03人であり、前年とほぼ同じであった。年齢階級別の患者報告数は、6ヶ月から1歳代で全体の約90%を占めていた。

### 突発性発疹 過去5年の流行時期の比較



### シーズン別の報告数合計：突発性発疹

平均報告数	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年
651	648	654	732	610	613



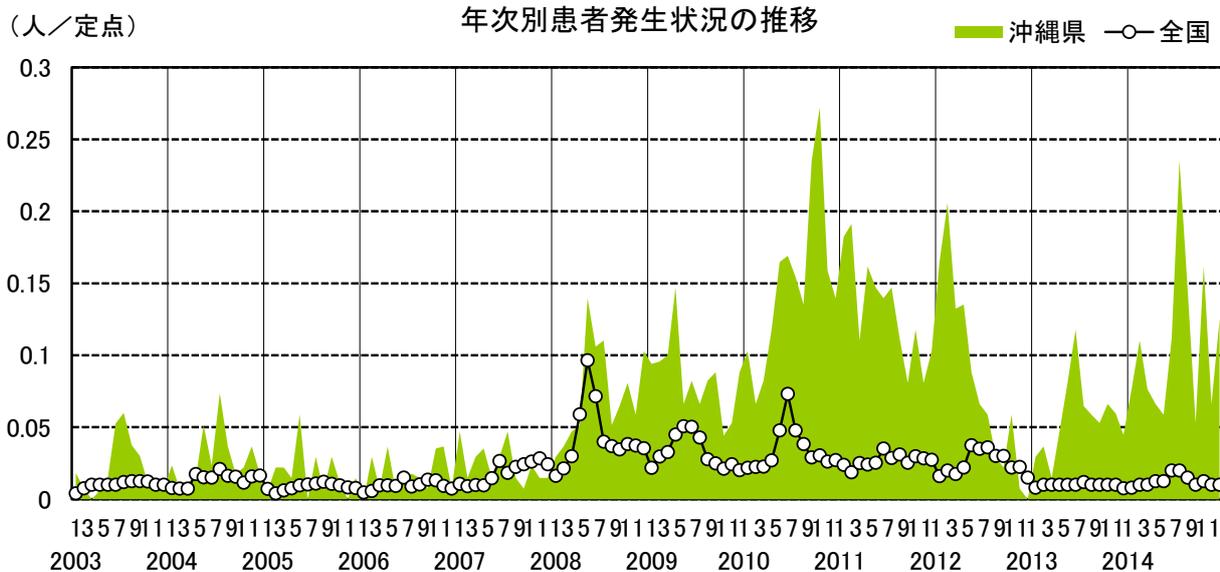
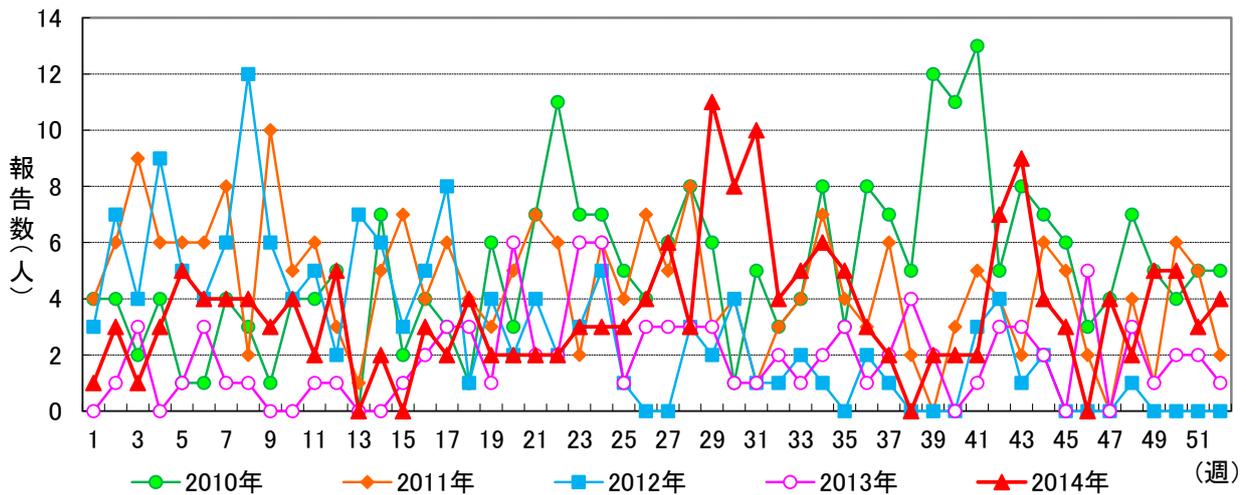
## 百日咳

百日咳は、特有のけいれん性の咳発作を特徴とする急性気道感染症である。母親からの免疫（経胎盤移行抗体）が期待できないため、乳児期早期から罹患し、1歳以下の乳児、ことに生後6カ月以下では死に至る危険性も高い。百日せきワクチンによる免疫効果は5～10年程度であるため、ワクチン既接種の成人も感染する。成人が感染した場合、症状が軽いため本人が気づかないうちに乳幼児への感染源となることがあり、注意が必要である。

2014年県内での患者報告数は186人、定点当たり5.47人であり、前年比1.88と倍増した。年間を通して、報告数が全国より多い。

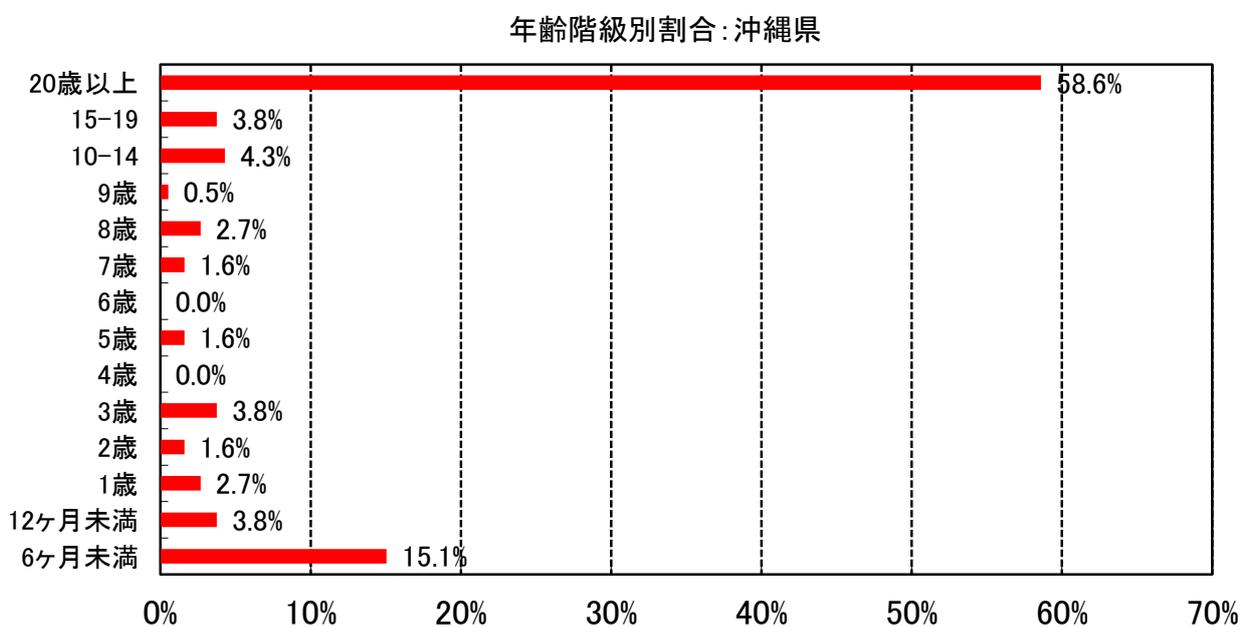
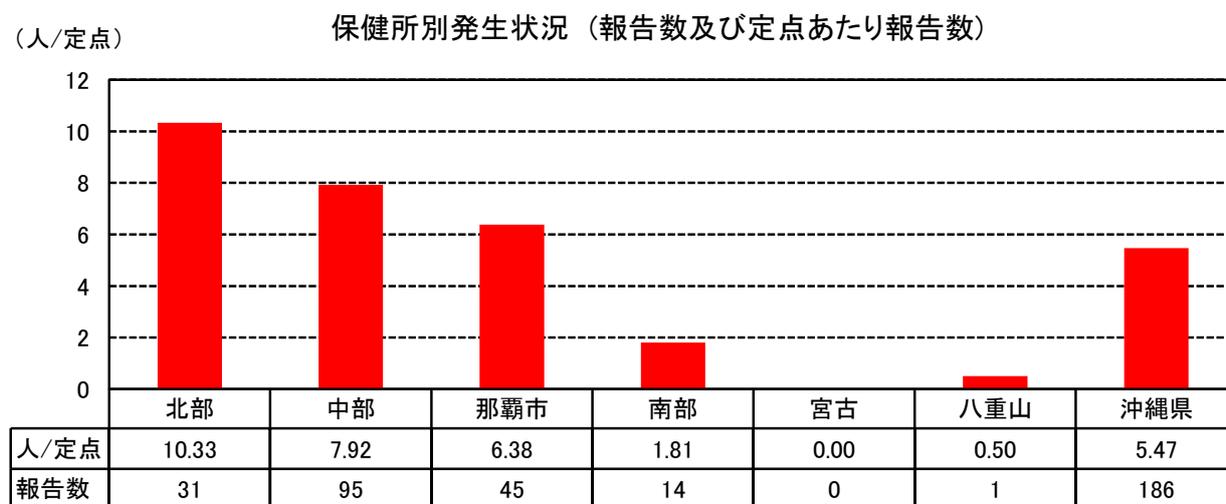
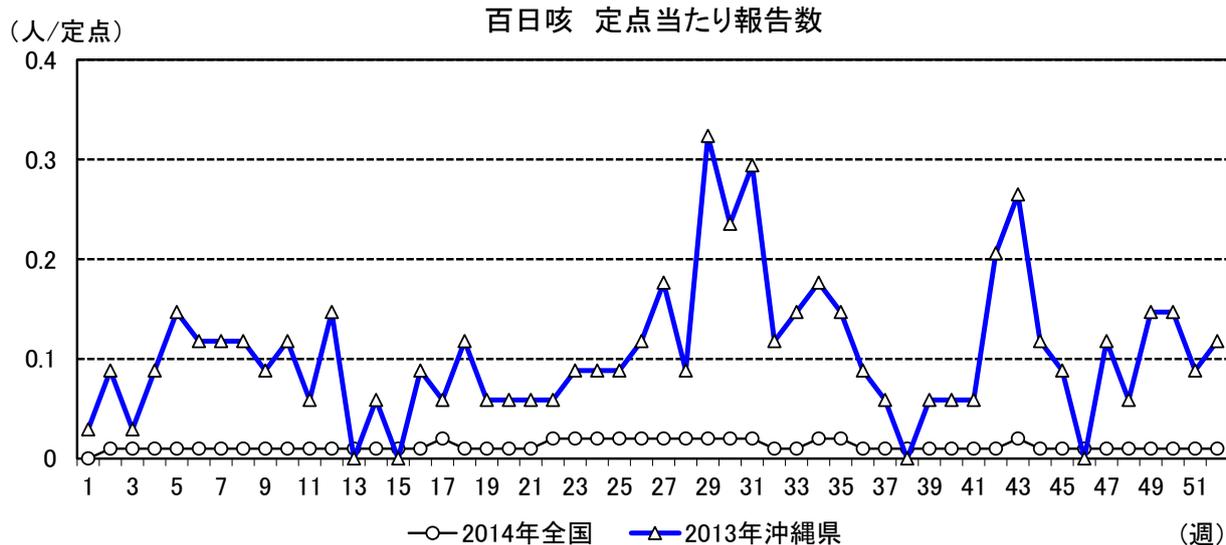
北部保健所管内で第29週から31週（7月）と第42週から第43週（10月）で警報レベルに達した。全国では、20歳以上（22.6%）と10-14歳（20.4%）で報告が多いが、県内では20歳以上が58.6%、6ヶ月未満児が15.1%を占めている。

百日咳 過去5年の流行時期の比較



シーズン別の報告数合計：百日咳

平均報告数	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年
185	263	233	146	99	186

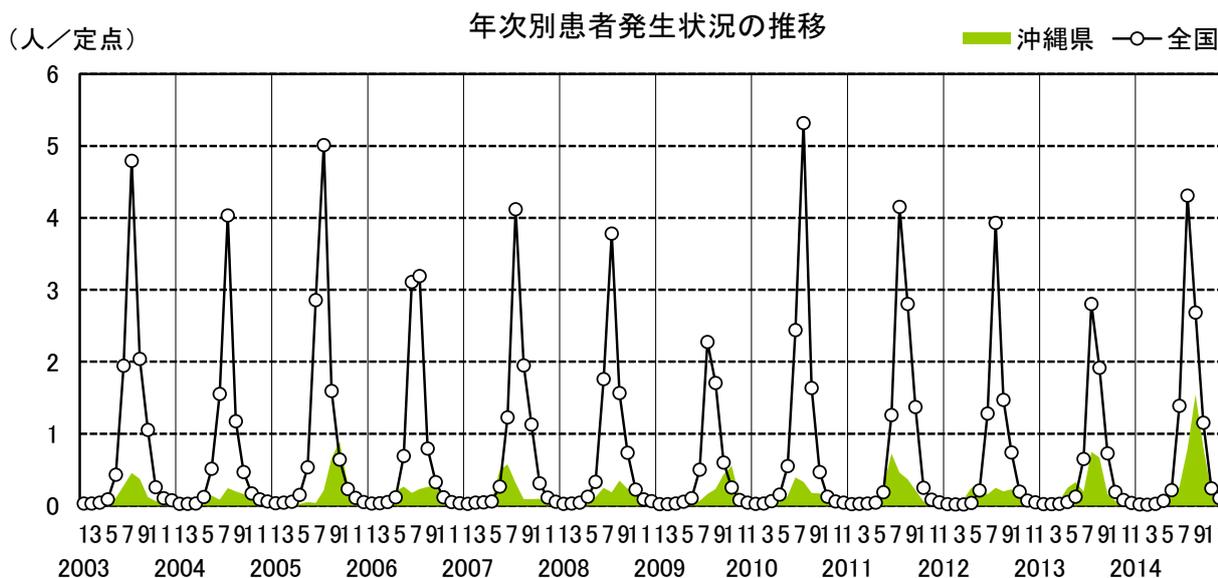
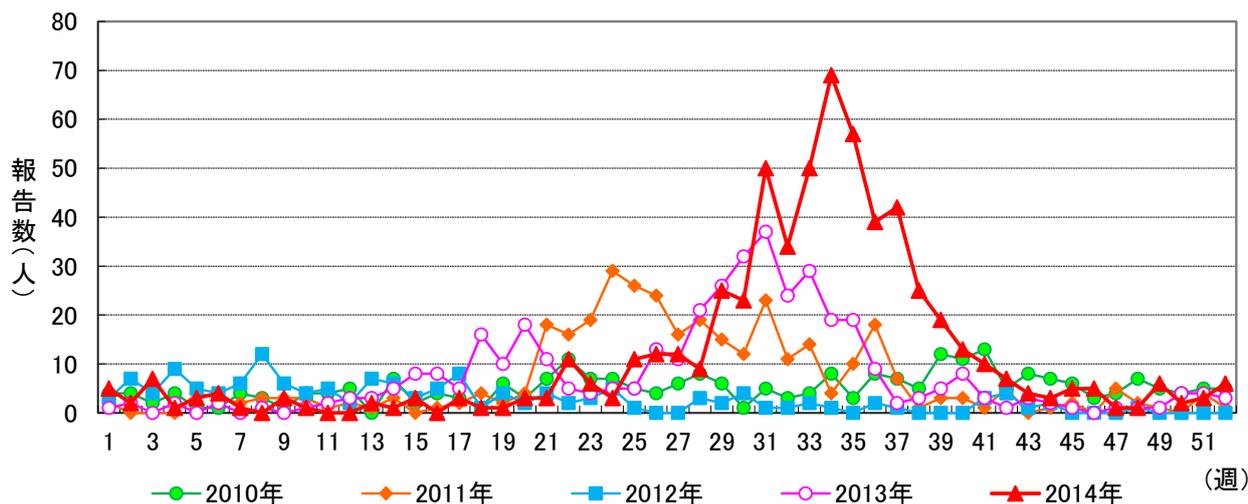


## ヘルパンギーナ

ヘルパンギーナは、エンテロウイルス属、特にA群コクサッキーウイルスを主要原因とする感染症である。発熱と口腔粘膜の水疱性発疹を特徴とし、夏期に流行する夏かぜの代表的疾患である。

2014年県内の患者報告数は607人、定点当たり17.85人であり、前年比1.52と増加した。八重山保健所管内で、第34週（8月）に14.50人／定点と最も高い報告数となった後、第41週（10月）まで警報レベルが継続した。年齢階級別では、1歳の患者報告数が最も多く全体の35.9%を占めていた。

ヘルパンギーナ 過去5年の流行時期の比較

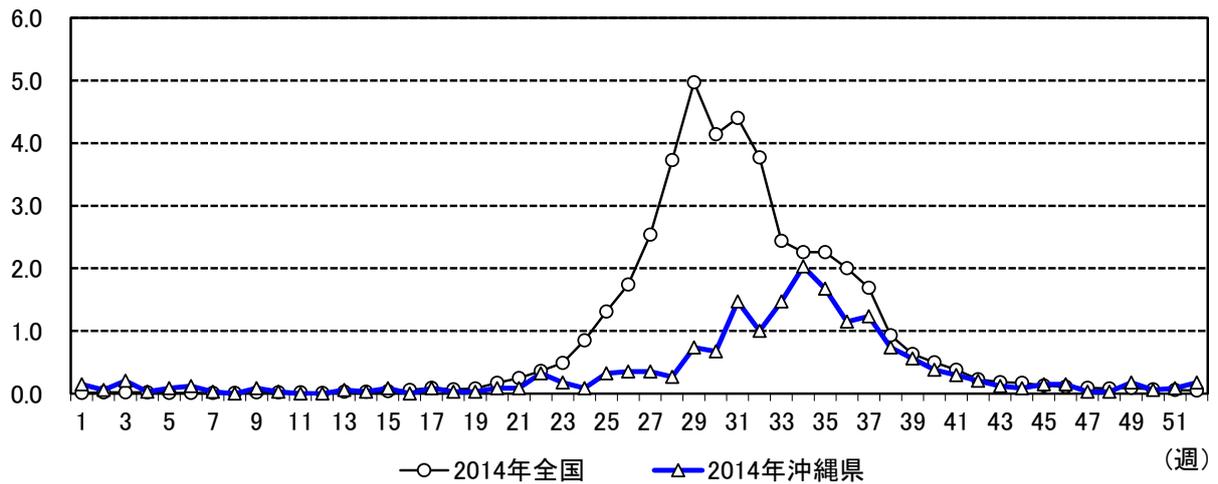


シーズン別の報告数合計：ヘルパンギーナ

平均報告数	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年
371	224	350	275	399	607

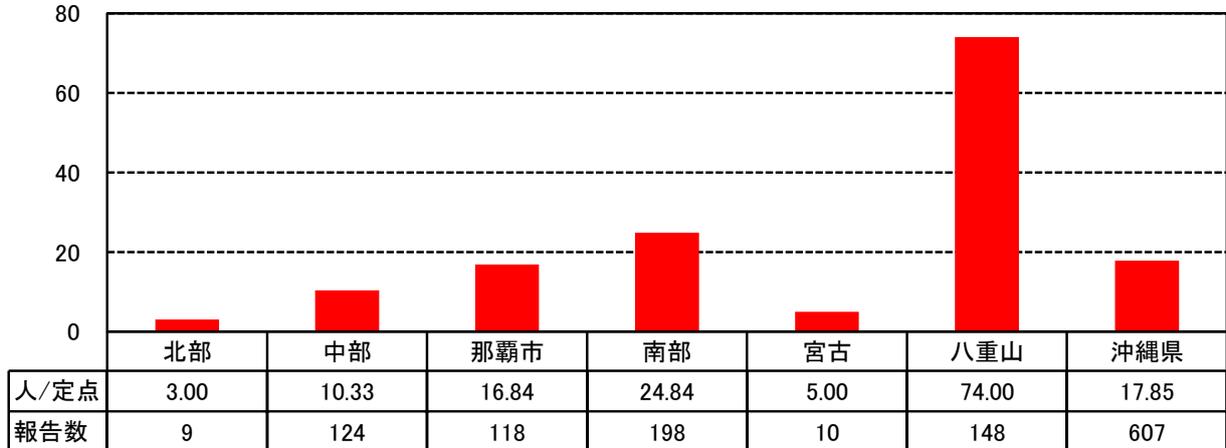
(人/定点)

ヘルパンギーナ 定点当たり報告数

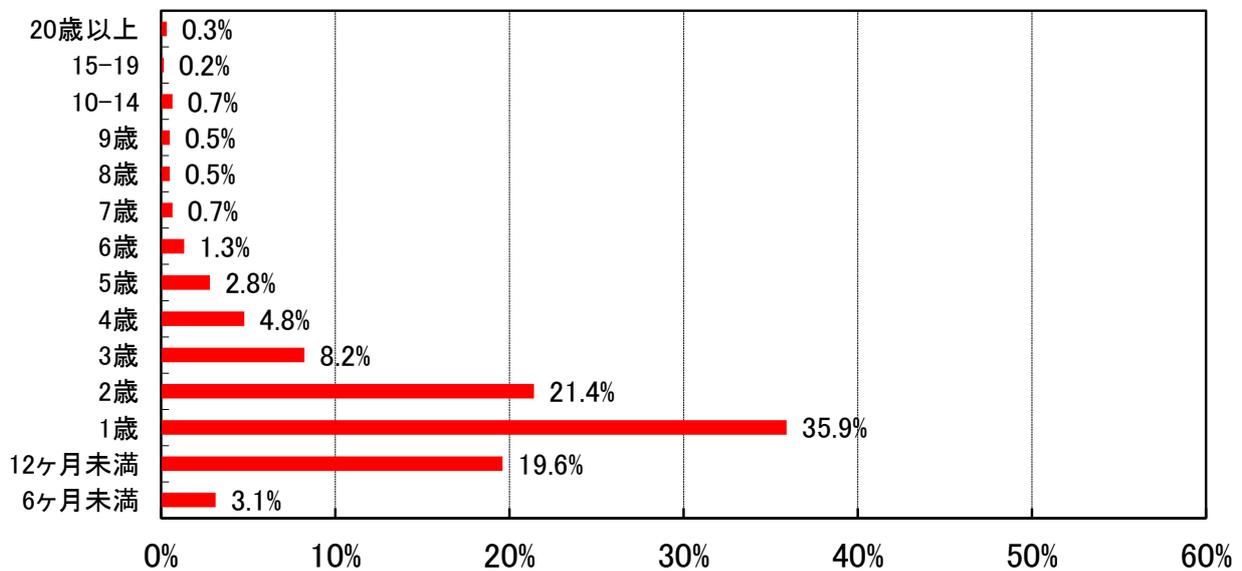


(人/定点)

保健所別発生状況 (報告数及び定点あたり報告数)



年齢階級別割合 (沖縄県)

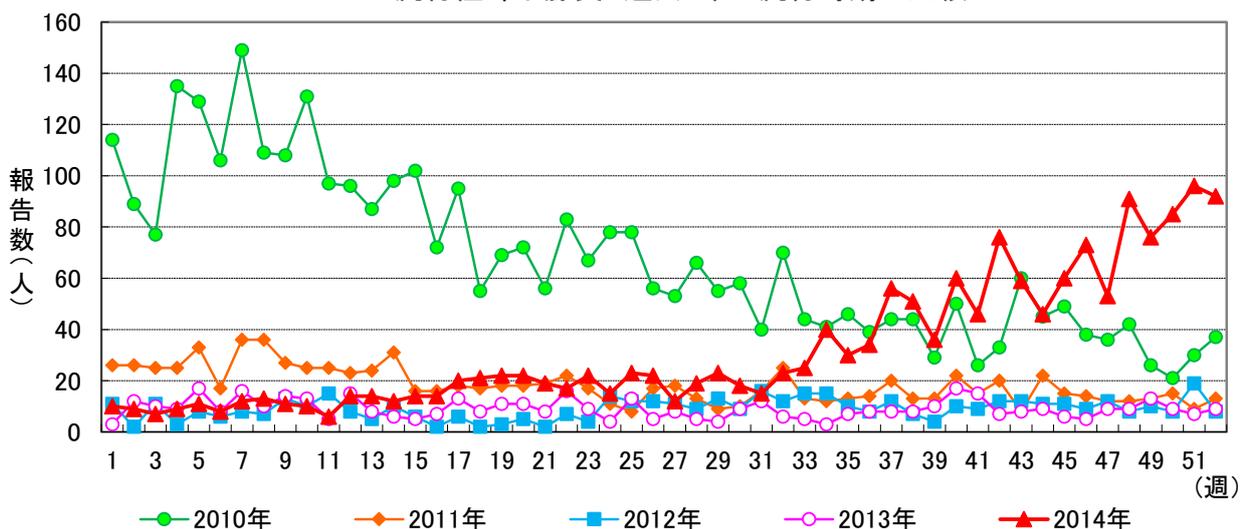


## 流行性耳下腺炎

流行性耳下腺炎は、片側あるいは両側の唾液腺の腫脹を特徴とするムンプスウイルスによる感染症である。本疾患は全国でも毎年、3～4年周期での患者増加がみられており、本県でも概ね4年周期で増加が認められている。前回の増加期は2009年（2,295人）、2010年（3,530人）であった。

2014年県内の患者報告数は1,672人、定点当たり49.18人であり、前年比3.54と大幅に増加した。また、秋から冬にかけて患者が増加傾向にあった。警報レベルに達した保健所管内はなかったが、八重山保健所管内で第25週（6月）、中部保健所管内で第42週（10月）、第45週から46週（11月）、第48週（11月）以降に注意報レベルに達した。3歳代から5歳代で49.5%を占めている。

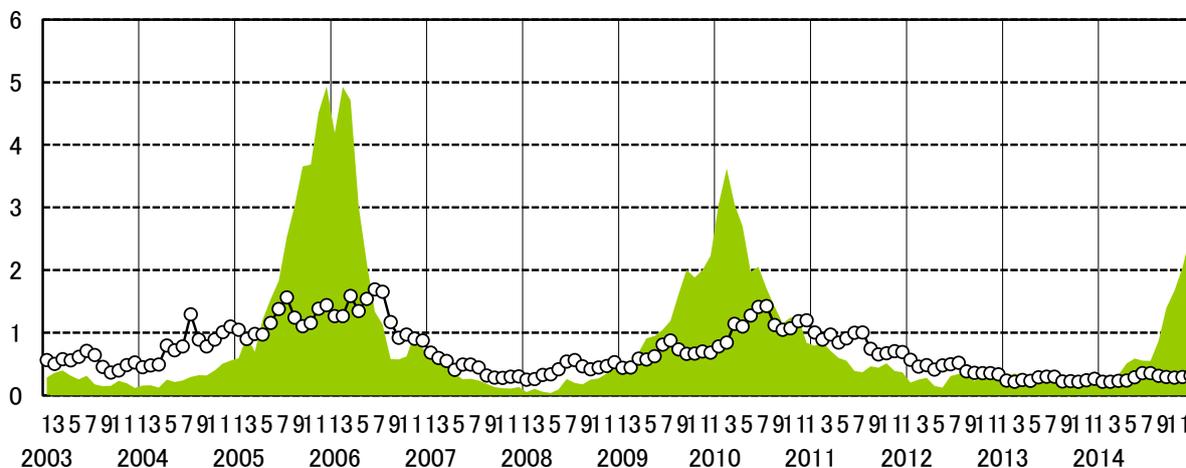
流行性耳下腺炎 過去5年の流行時期の比較



(人/定点)

年次別患者発生状況の推移

■ 沖縄県 ○ 全国

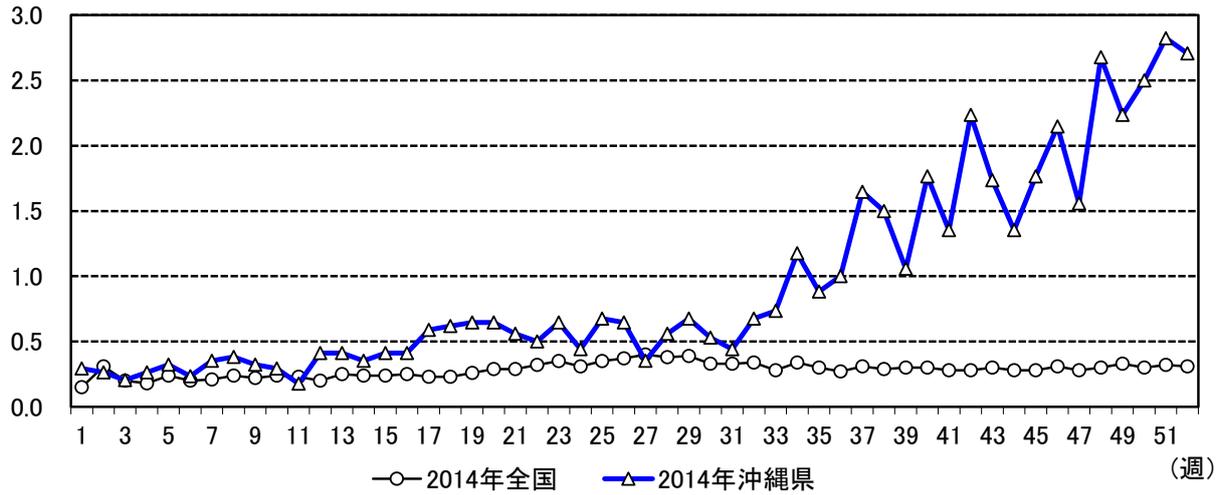


シーズン別の報告数合計：流行性耳下腺炎

平均報告数	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年
1,420	3,530	955	472	472	1,672

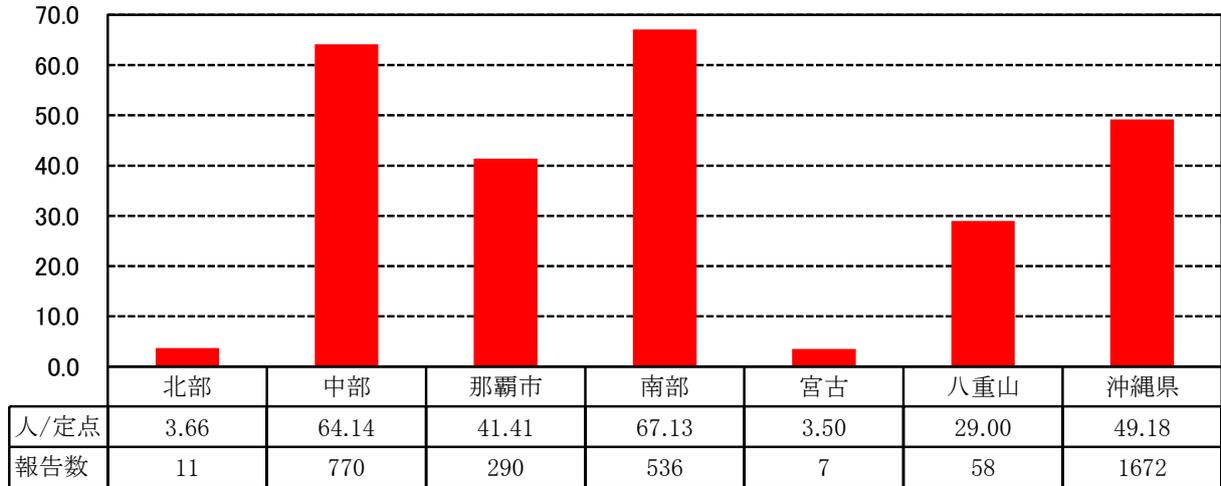
(人/定点)

流行性耳下腺炎 定点当たり報告数

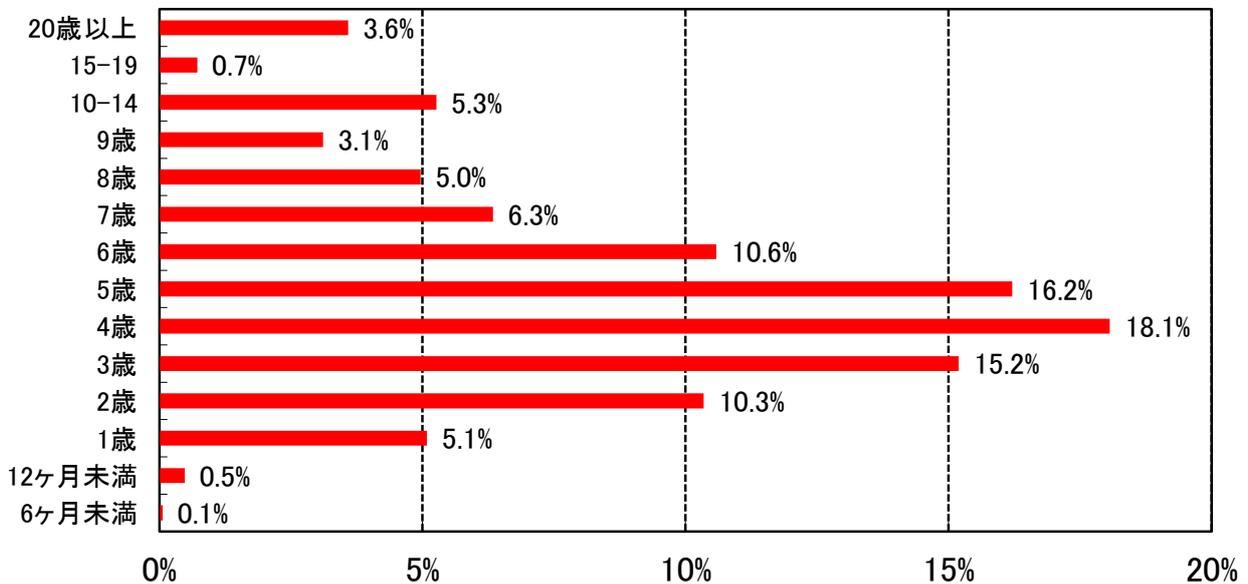


(人/定点)

保健所別発生状況（報告数及び定点あたり報告数）



年齢階級別割合（沖縄県）



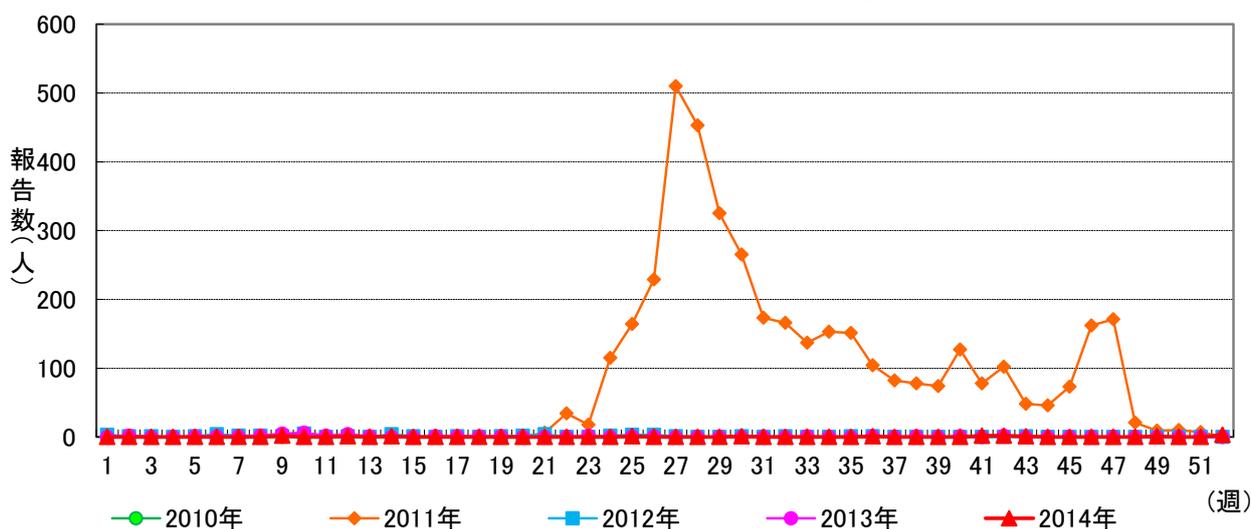
(眼科定点)

急性出血性結膜炎

急性出血性結膜炎（AHC）は、エンテロウイルス70型（EV70）とコクサッキーウイルスA24変異型（CA24v）を主要原因とする激しい出血症状を伴う結膜炎である。県内では2011年夏に大きく流行した。

2014年県内の患者報告数は16人、定点当たり1.60人であり、前年比0.41と半減した。八重山保健所管内で散発的に警報レベルに達したが、継続しなかった（第12週、14週、41週、49週、52週）。

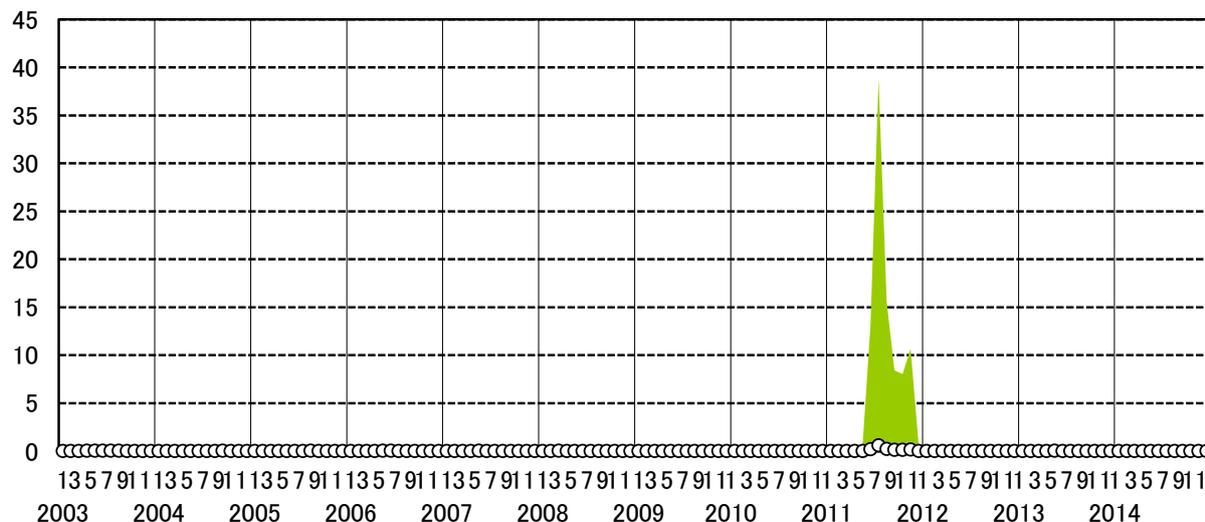
急性出血性結膜炎 過去5年の流行時期の比較



(人/定点)

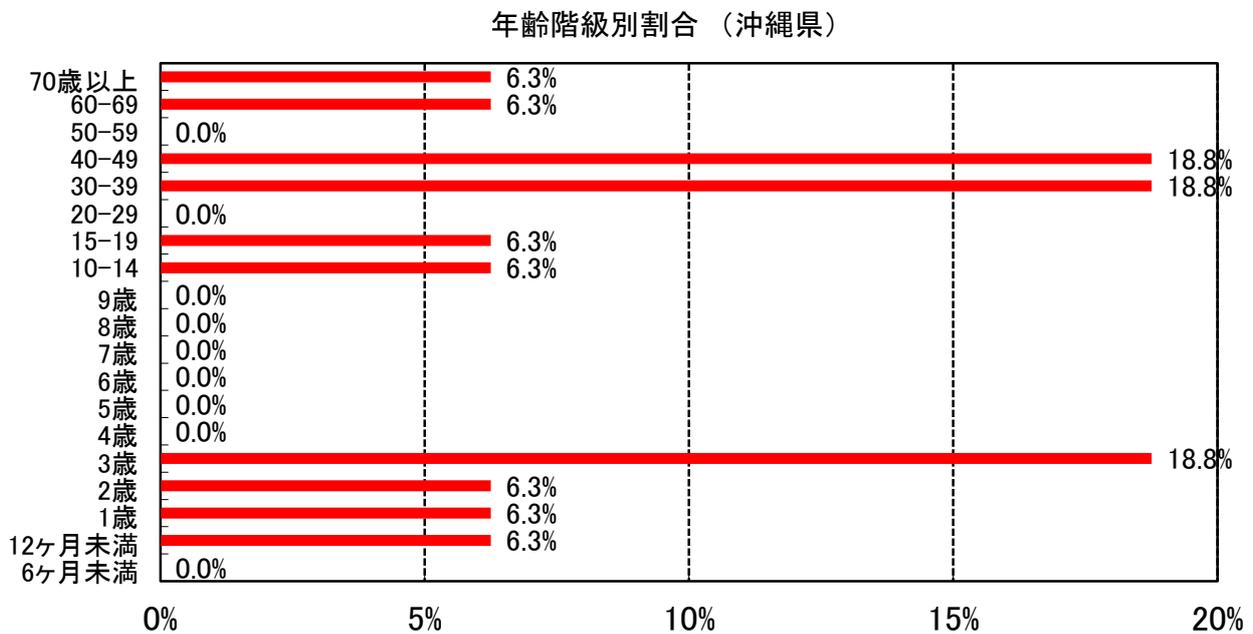
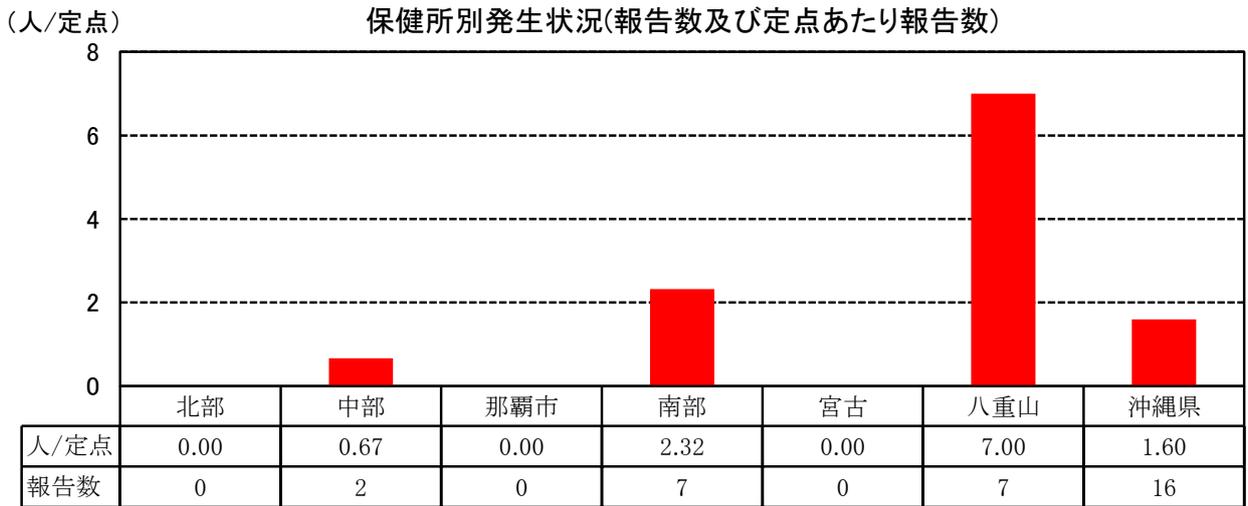
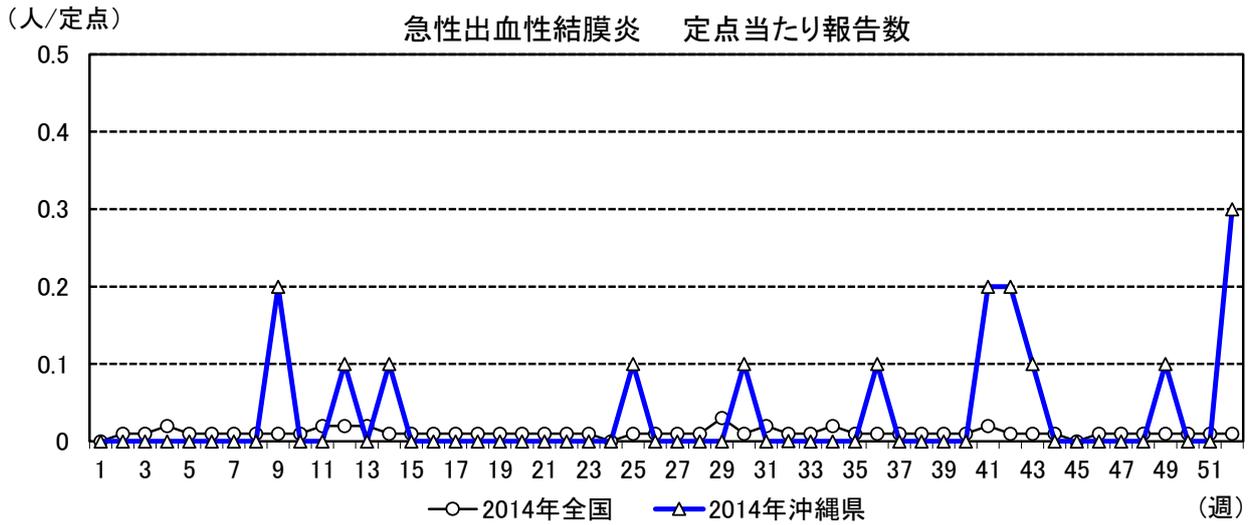
年次別患者発生状況の推移

■ 沖縄県 ○ 全国



シーズン別の報告数合計：急性出血性結膜炎

平均報告数	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年
841	6	4094	48	39	16

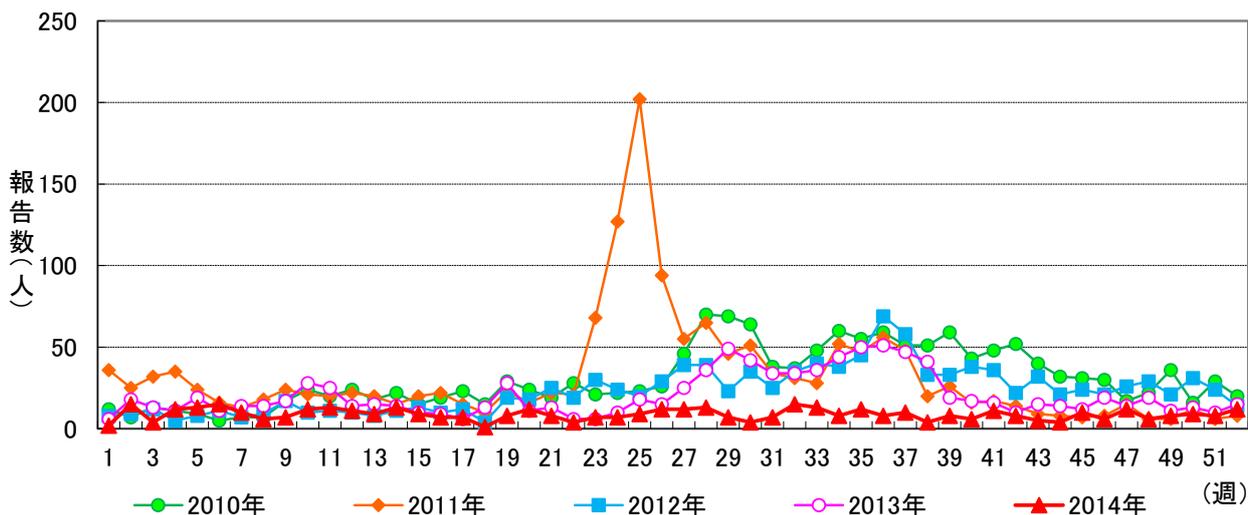


## 流行性角結膜炎

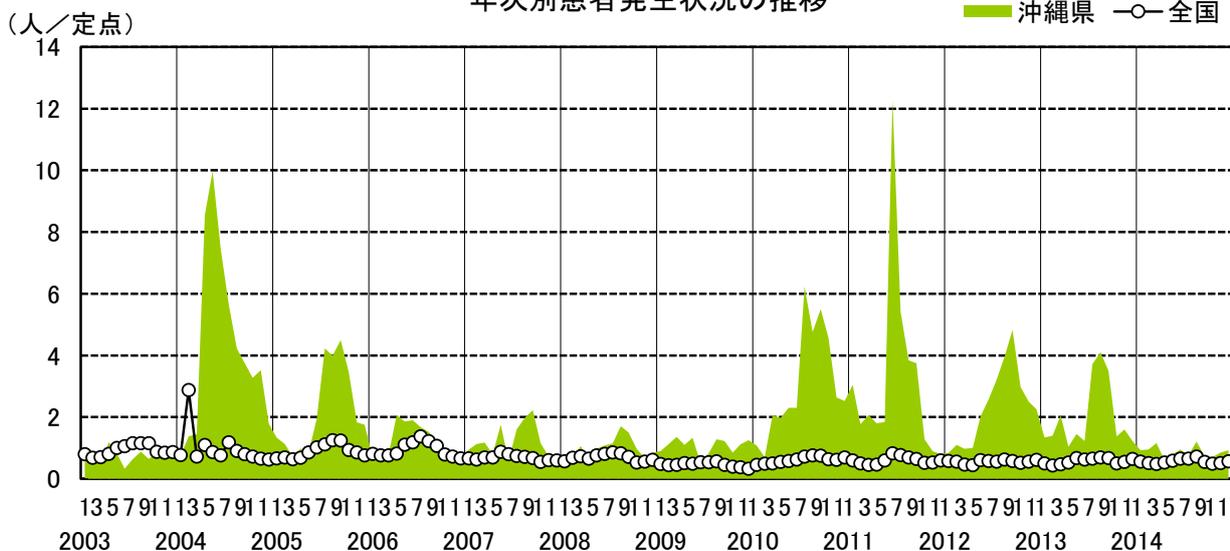
流行性角結膜炎（EKF）は、D群のアデノウイルス8、19、37型等を原因ウイルスとし、流涙（なみだ目）・充血・眼脂（めやに）を主症状とする。家庭内、職場、病院などの人が濃密に接触する場所で流行しやすいとされている。

2014年県内の患者報告数は459人、定点当たり45.90人であり、前年比0.43と半減したが、年間を通して全国よりも多い傾向にあった。八重山保健所管内で第14週（3月）に警報レベルとなった他は、全ての保健所管内で警報レベルには達しなかった。年齢階級別では、乳児から高齢者まで幅広く報告され、そのうち30代が最も多く全体の25.7%を占めていた。

流行性角結膜炎 過去5年の流行時期の比較



年次別患者発生状況の推移

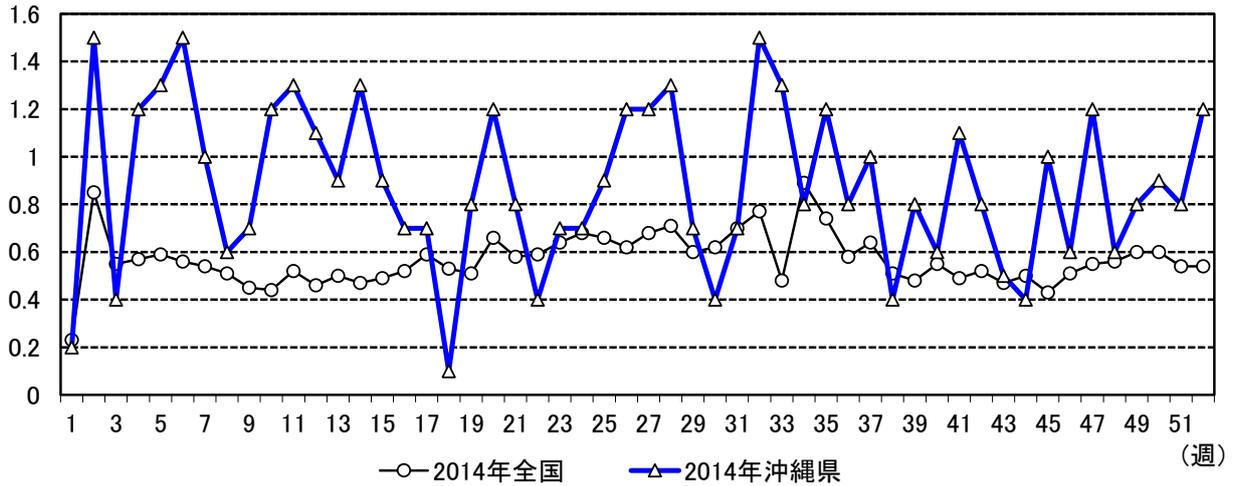


シーズン別の報告数合計：流行性角結膜炎

平均報告数	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年
1,192	1583	1652	1210	1057	459

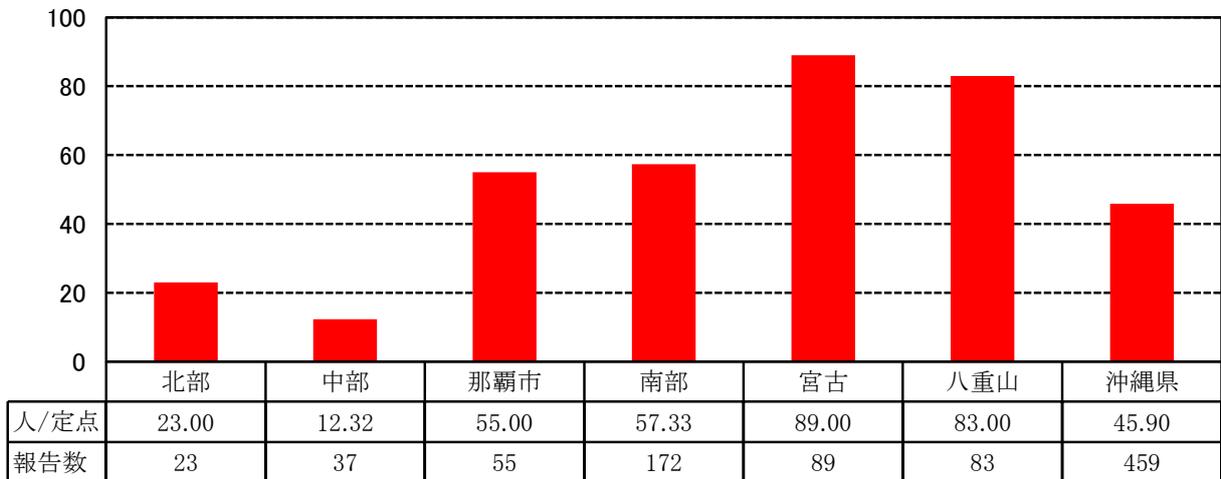
(人/定点)

流行性角結膜炎 定点当たり報告数

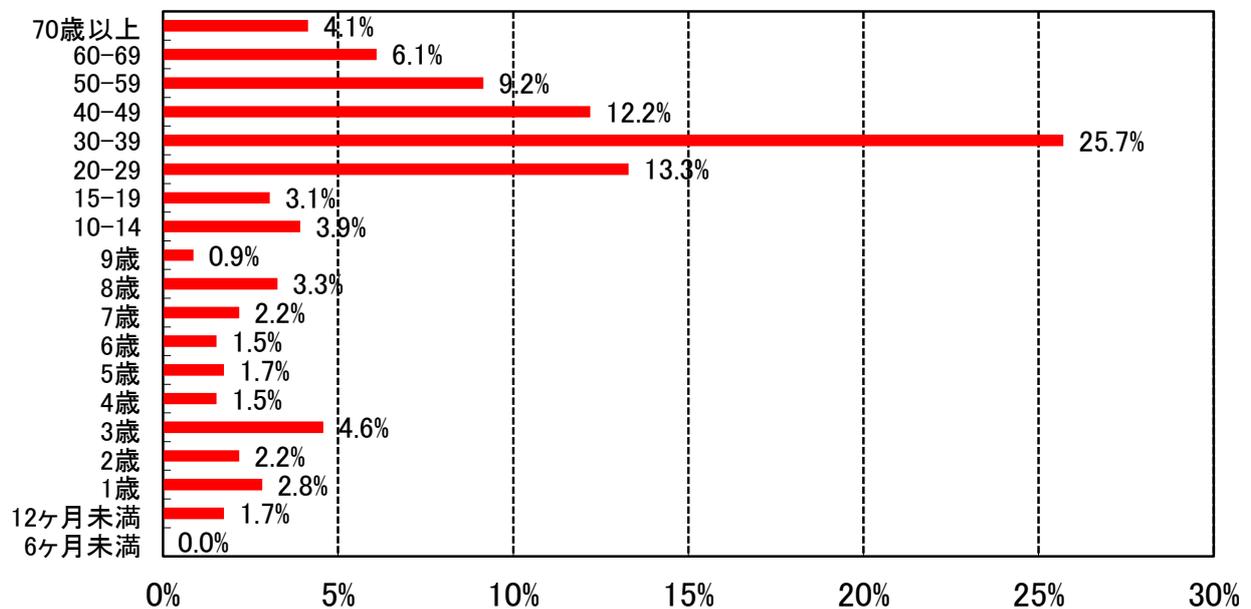


(人/定点)

保健所別発生状況(報告数及び定点あたり報告数)



年齢階級別割合(沖縄県)



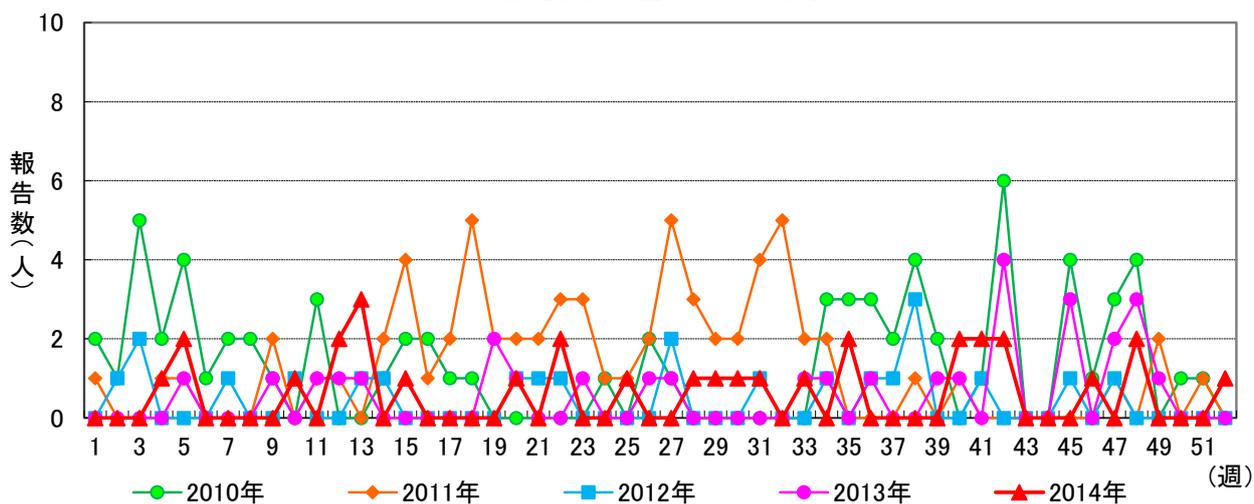
(基幹定点)

細菌性髄膜炎

細菌性髄膜炎は、種々の細菌感染による髄膜炎の総称であり、多くは発熱、頭痛、嘔吐を主症状とし、進行すると意識障害や痙攣がみられる。季節性はなく、原因菌はインフルエンザ菌、肺炎球菌が多い。

2014年県内の患者報告数は31人、定点当たり4.43人であった。年齢階級別には、0歳代と70歳以上に多かった。

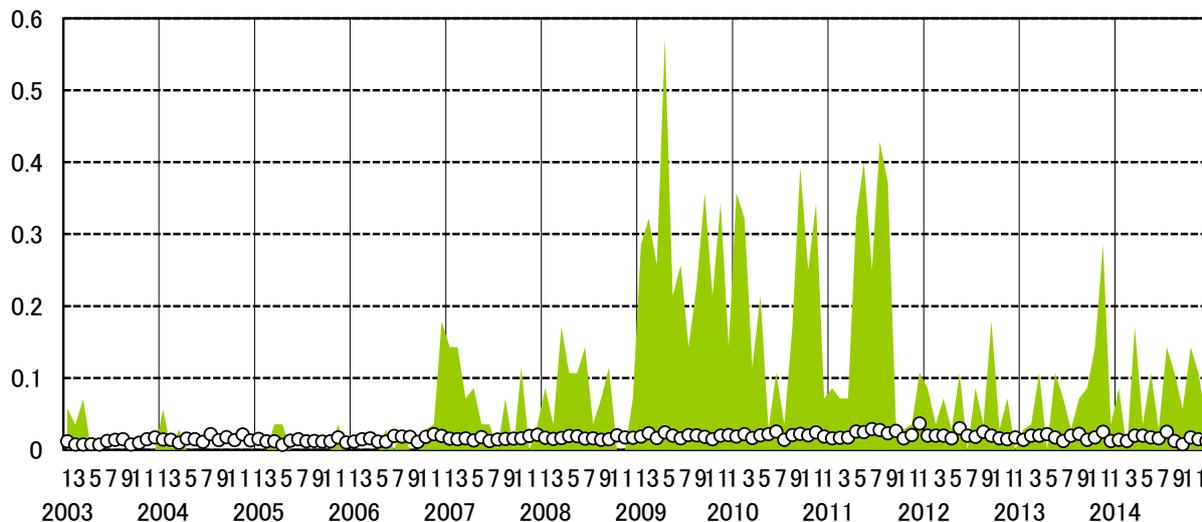
細菌性髄膜炎 過去5年の流行時期の比較



(人/定点)

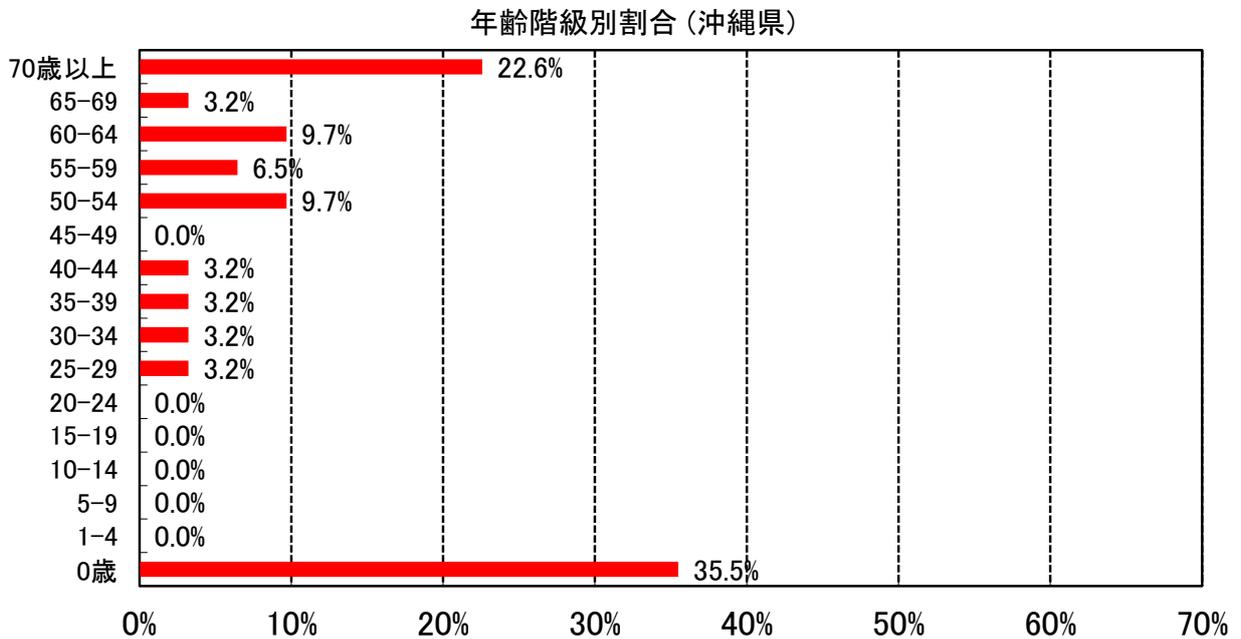
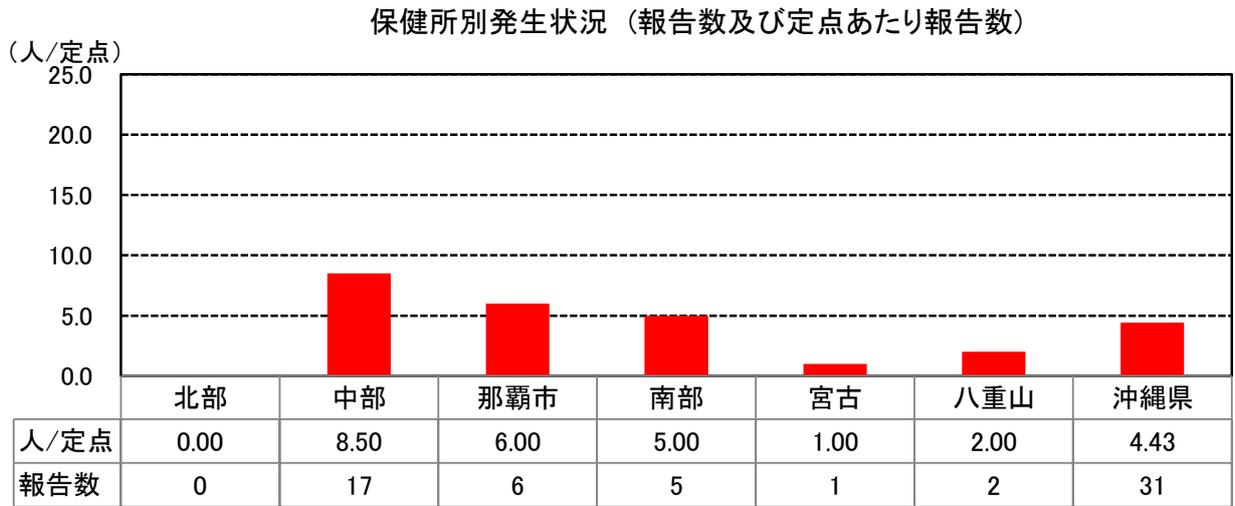
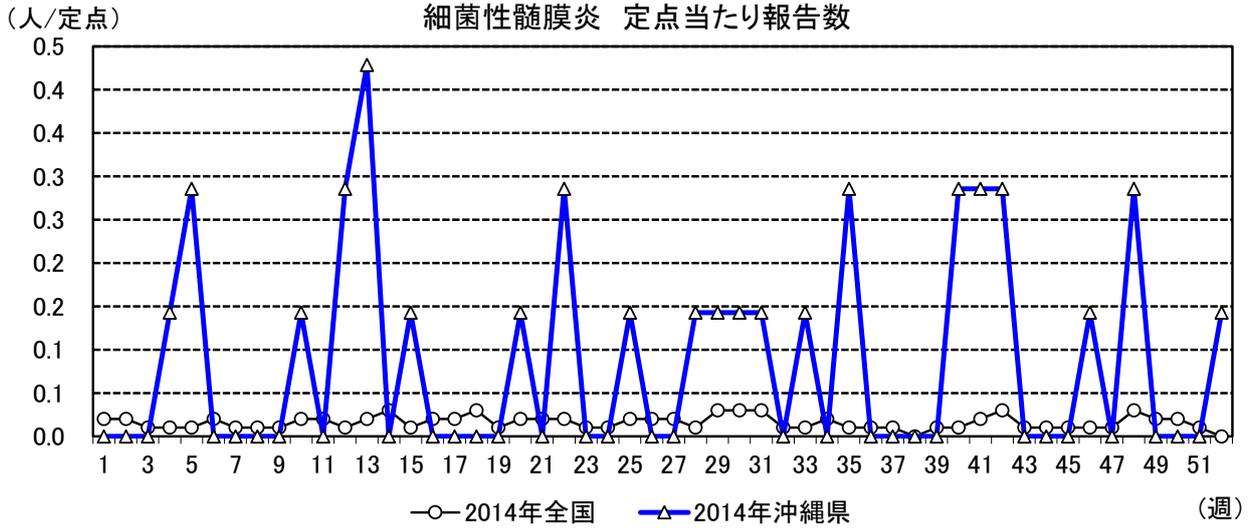
年次別患者発生状況の推移

■ 沖縄県 ○ 全国



シーズン別の報告数合計: 細菌性髄膜炎

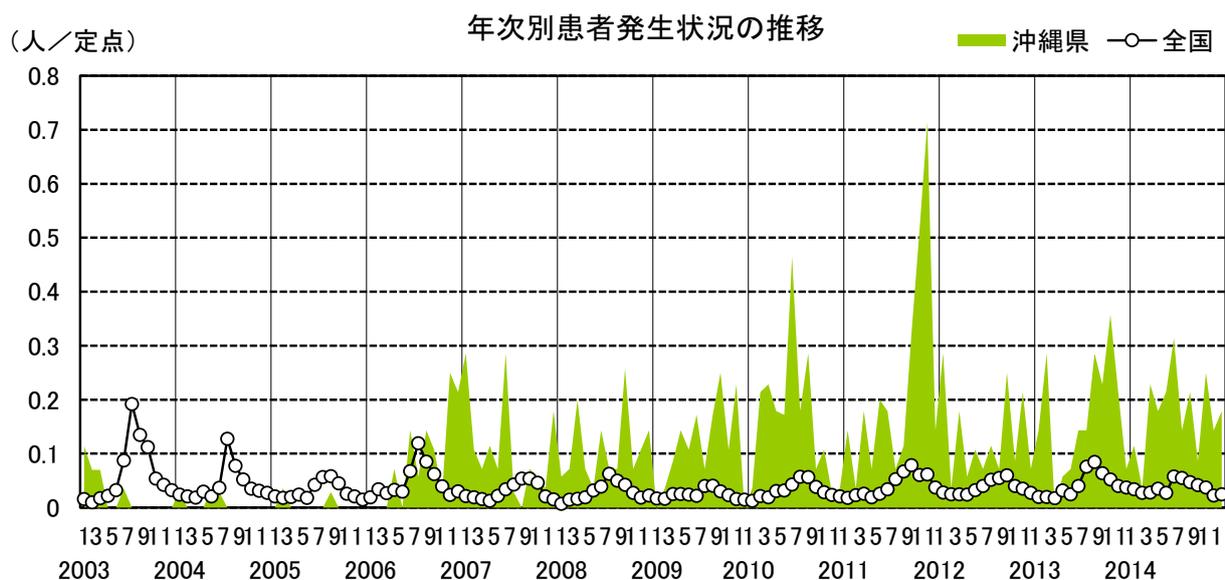
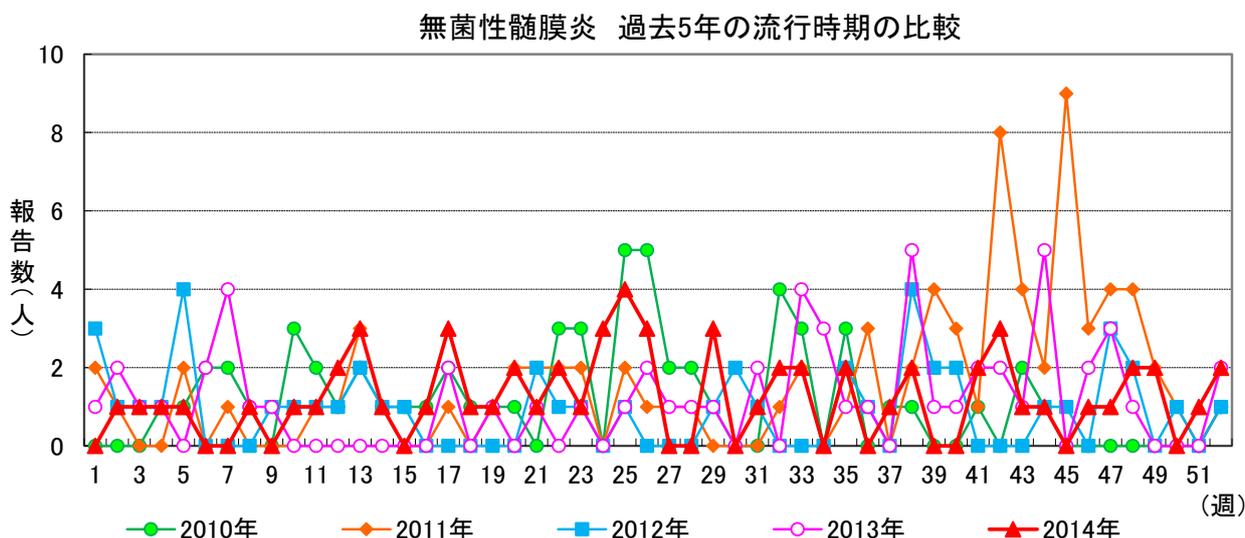
平均報告数	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年
44	72	68	22	29	31



## 無菌性髄膜炎

無菌性髄膜炎は、多種多様な起因病原体があるが、全体の85%がエンテロウイルスによるものである。通常、発熱、嘔吐、頭痛を主症状とする。

2014年県内の患者報告数は64人、定点あたり9.14人であった。年齢階級別の患者報告数は0歳が最も多く、全体の34.4%を占めていた。

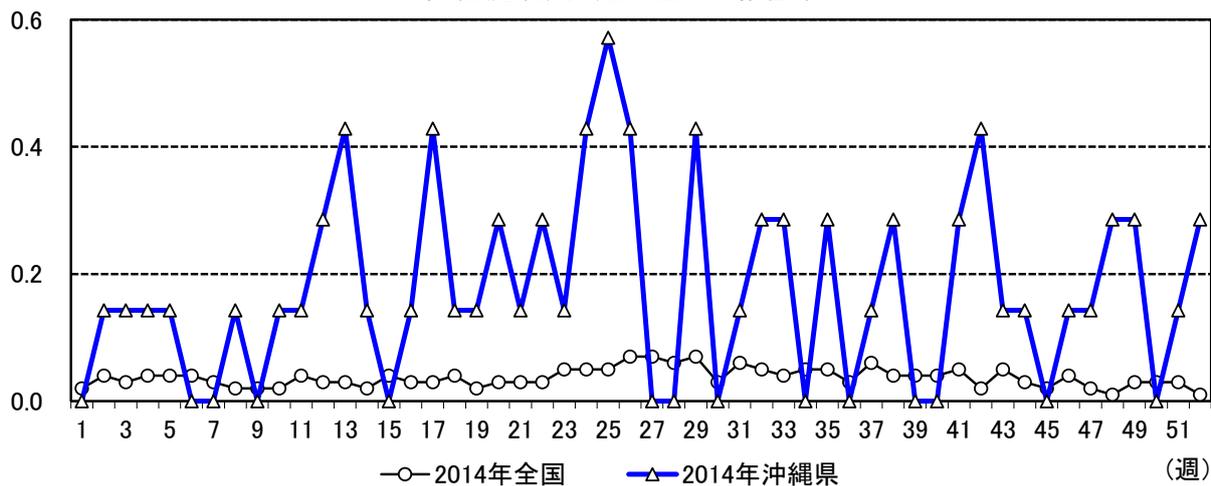


シーズン別の報告数合計：無菌性髄膜炎

平均報告数	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年
63	61	82	47	60	64

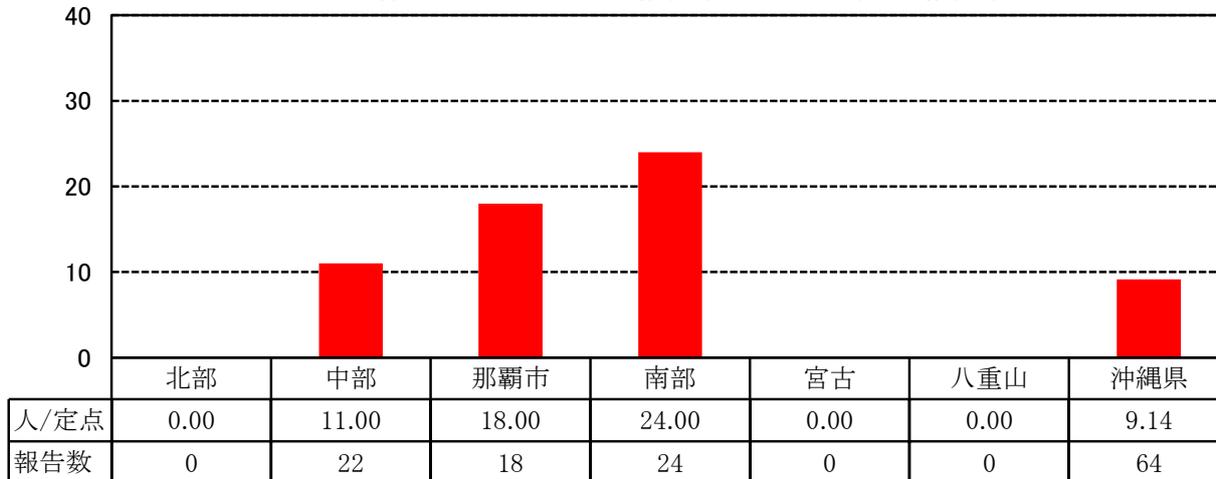
(人/定点)

### 無菌性髄膜炎 定点当たり報告数

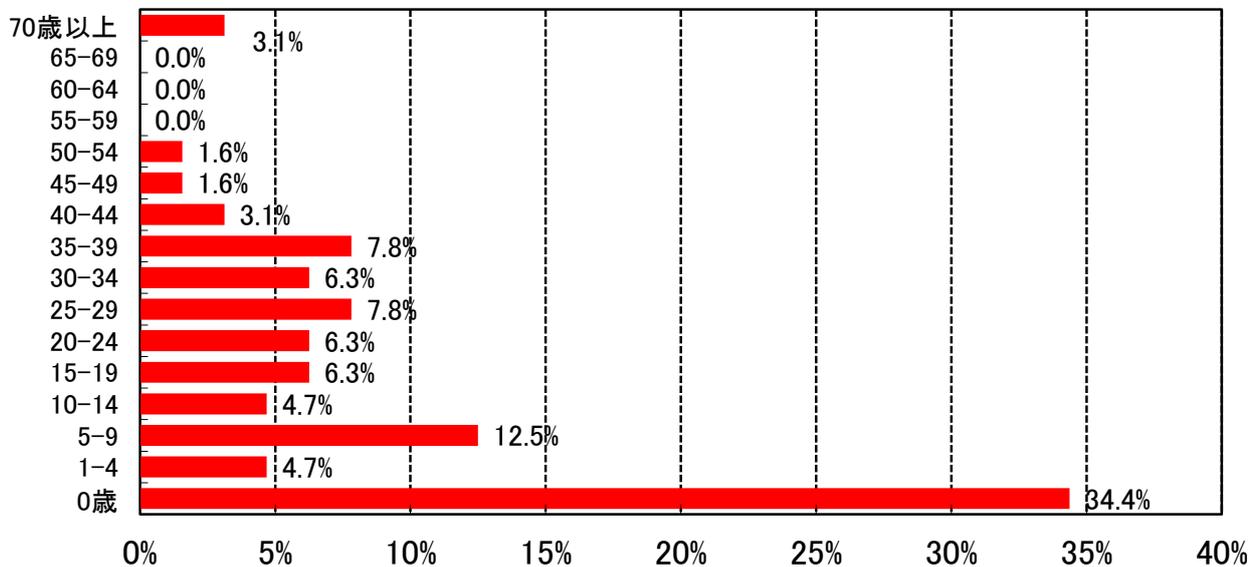


(人/定点)

### 保健所別発生状況 (報告数及び定点あたり報告数)



### 年齢階級別割合 (沖縄県)

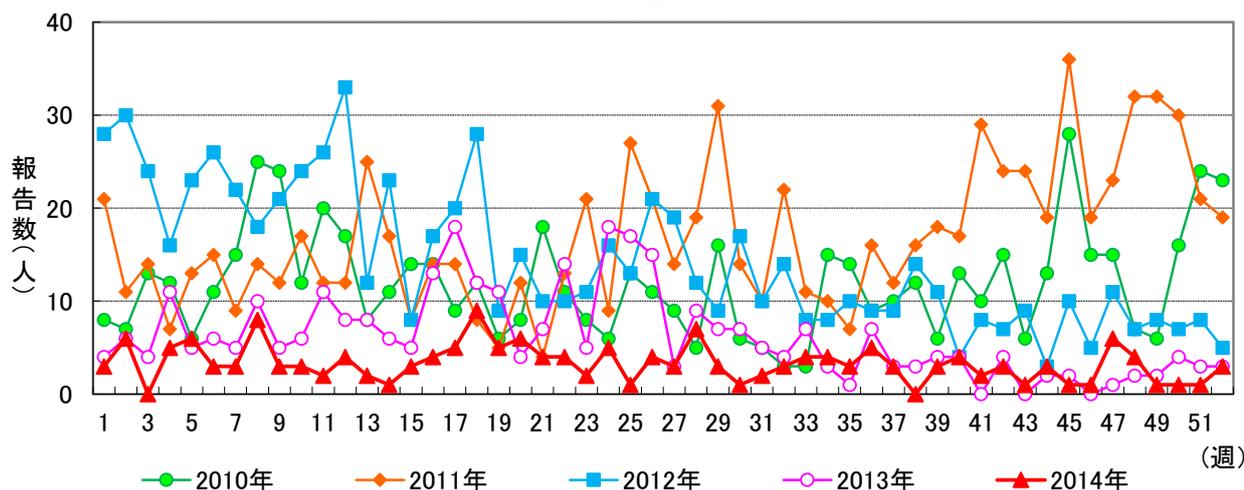


## マイコプラズマ肺炎

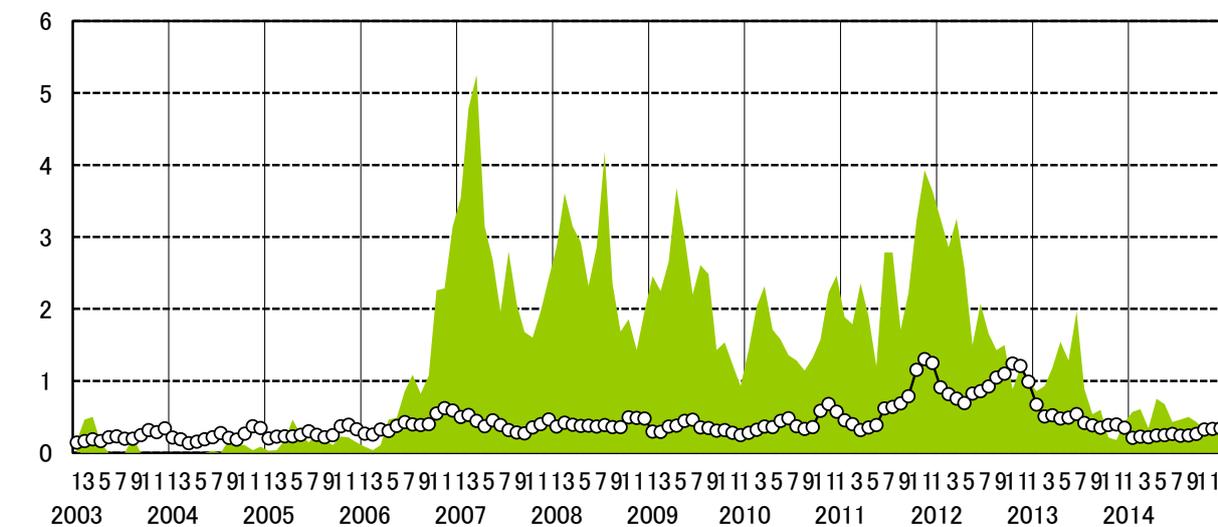
マイコプラズマ肺炎は、肺炎マイコプラズマによる呼吸器感染症である。晩秋から早春にかけて報告数が多くなり、罹患年齢は幼児期、学童期、青年期が中心である。感染の拡大は通常閉鎖集団などではみられるが、学校などでの短時間での暴露による感染拡大の可能性は高くなく、友人間での濃厚接触によるものとされている。

2014年県内の患者報告数は173人、定点当たり24.71人であり、前年比0.53と減少した。年齢階級別の患者報告数は1-4歳が29.5%、5-9歳が20.9%の順が多かった。

### マイコプラズマ肺炎 過去5年の流行時期の比較

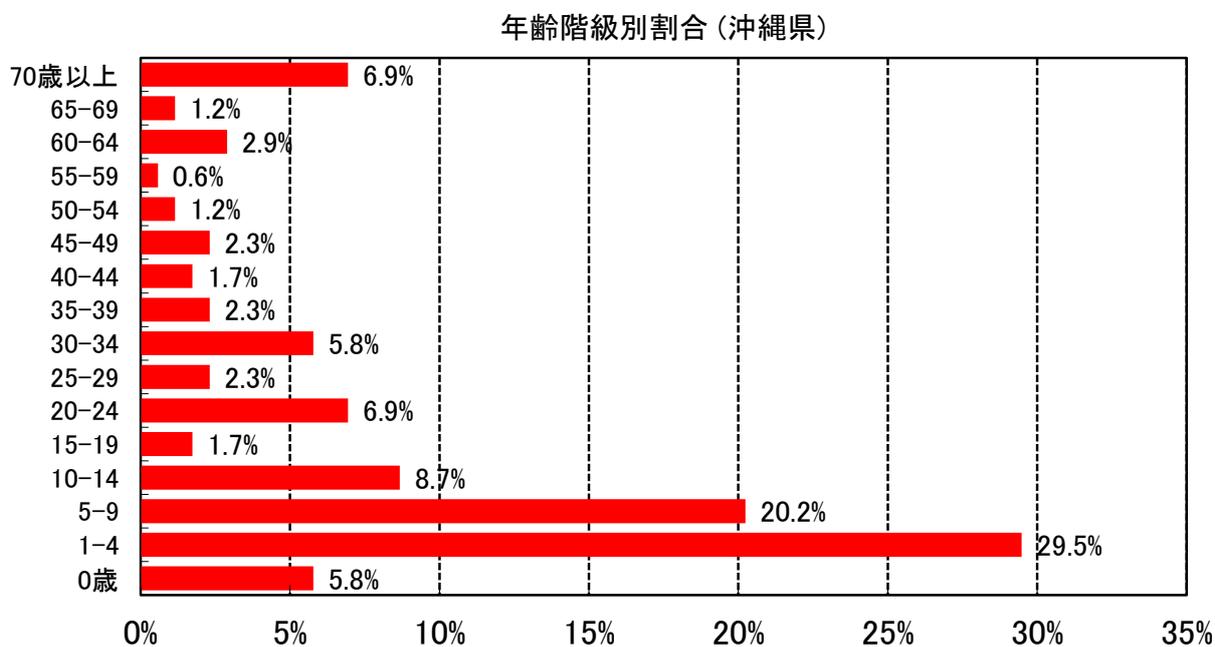
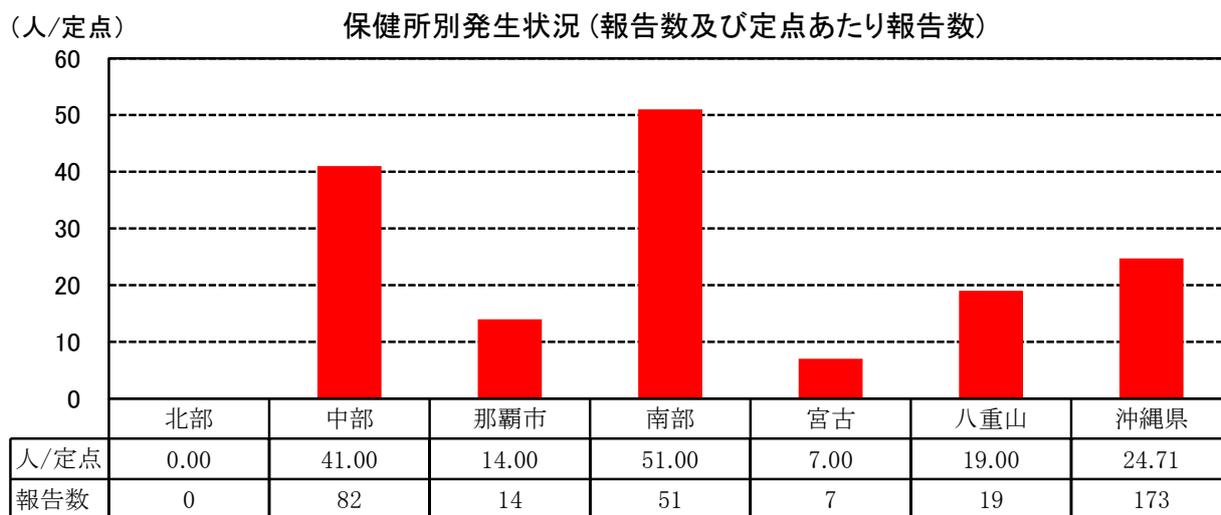
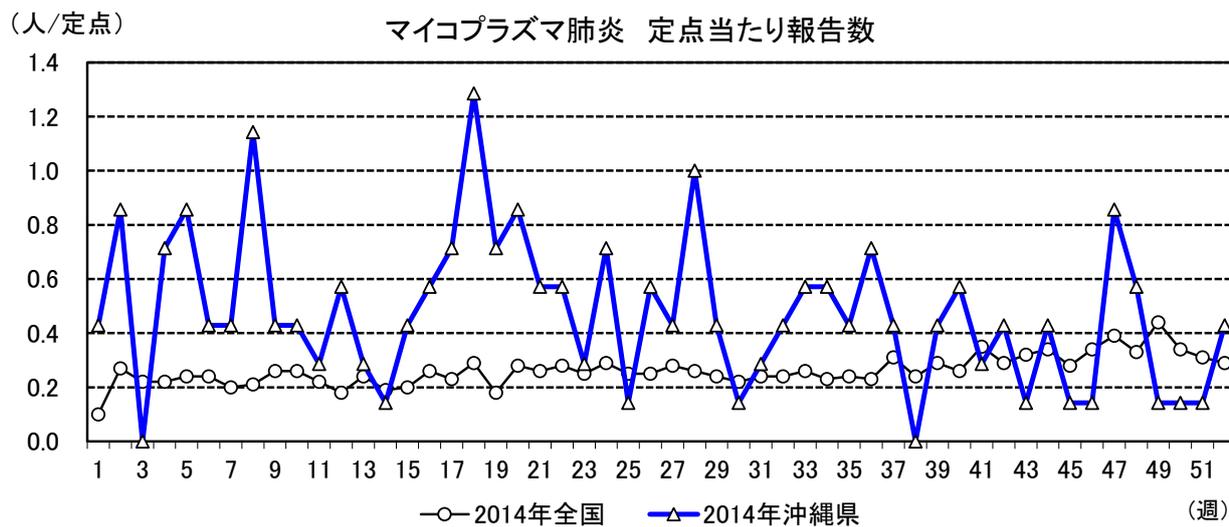


### 年次別患者発生状況の推移 (人/定点)



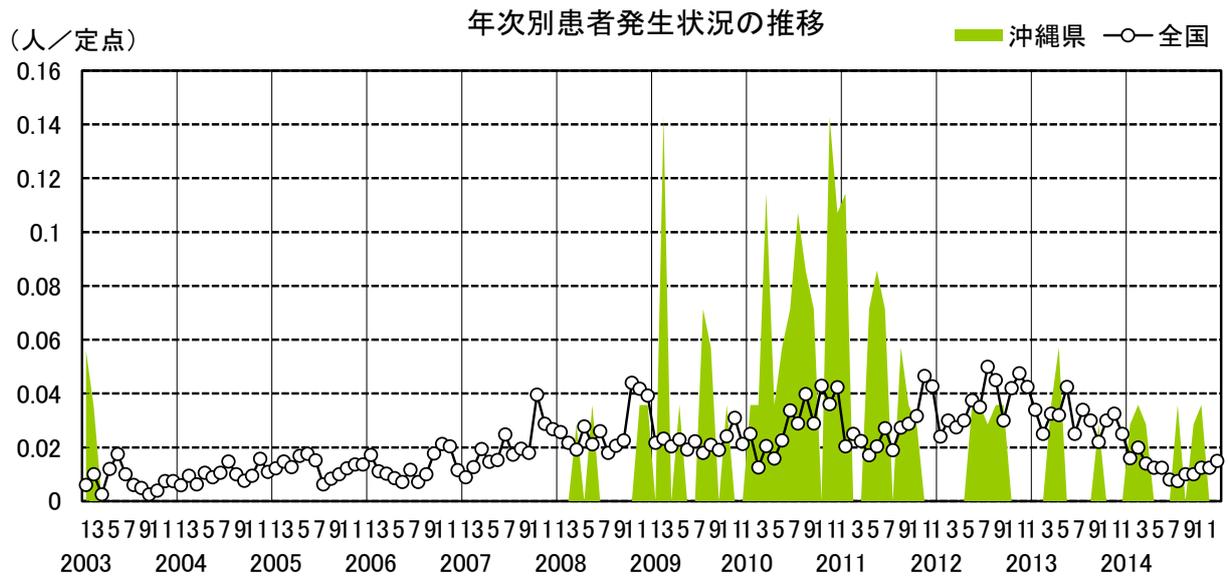
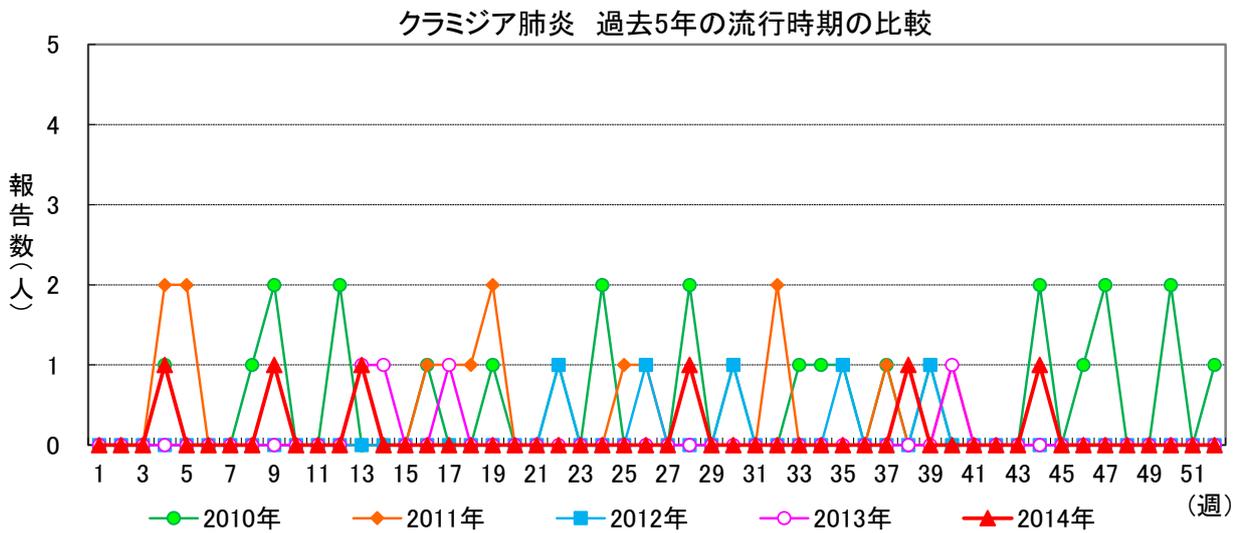
### シーズン別の報告数合計: マイコプラズマ肺炎

平均報告数	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年
549	623	880	746	324	173



## クラミジア肺炎

クラミジア肺炎は、肺炎クラミジア、トラコーマ・クラミジアによる肺炎である。  
2014年県内の患者報告数は6人、定点当たり0.86人であり、70歳以上が半分を占めていた。

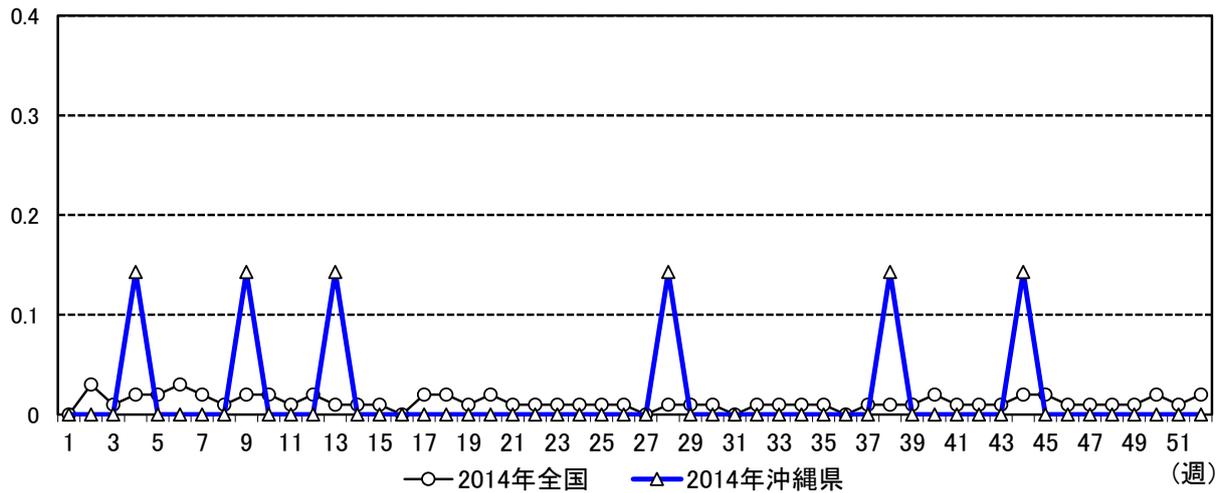


### シーズン別の報告数合計: クラミジア肺炎

平均報告数	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年
11	27	15	5	4	6

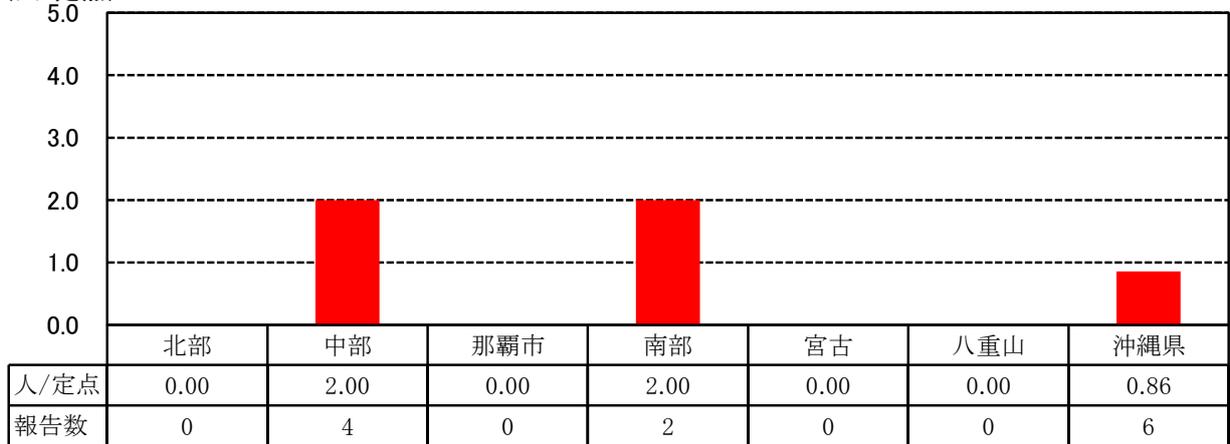
(人/定点)

### クラミジア肺炎 定点あたり報告数

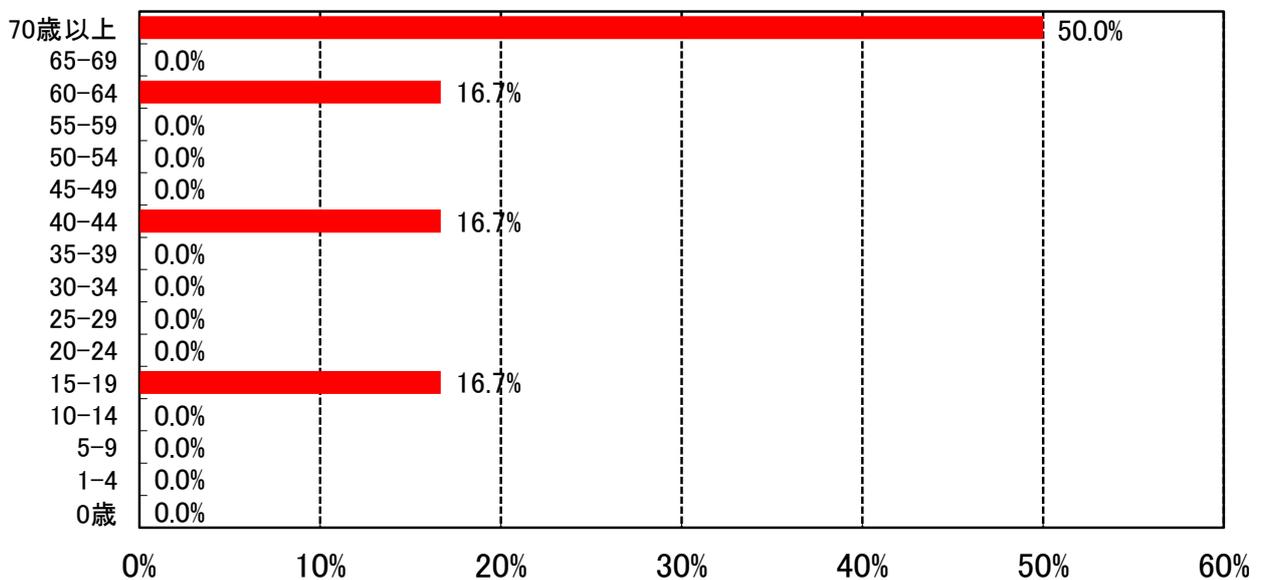


(人/定点)

### 保健所別発生状況 (報告数及び定点あたり報告数)



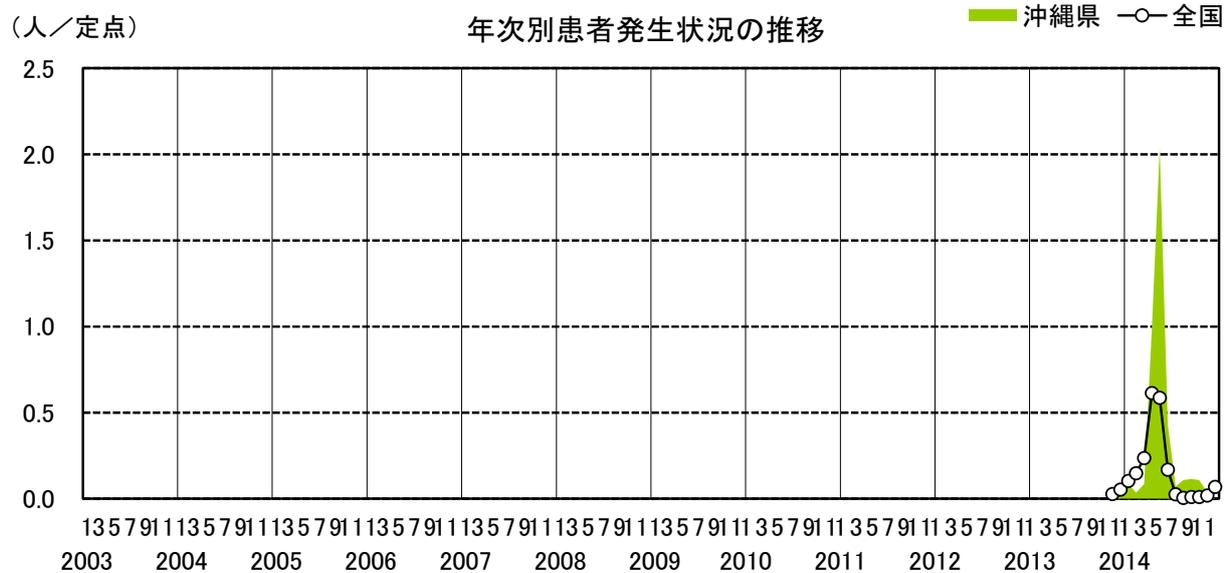
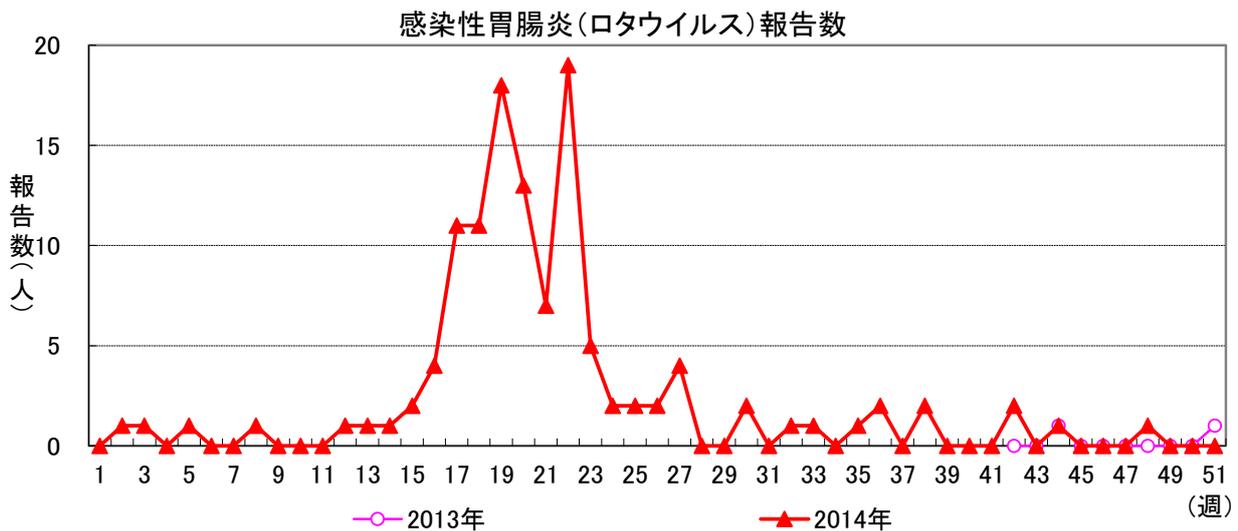
### 年齢階級別割合 (沖縄県)



## 感染性胃腸炎（ロタウイルス）

平成25年10月14日から、ロタウイルスによる感染性胃腸炎が基幹定点の対象疾患に追加された。この改正により、感染性胃腸炎について、現行の小児科定点における届出に加え、基幹定点における迅速診断キットを用いたロタウイルスによる感染性胃腸炎と診断された症例を届出の対象とすることにより、重症例を中心にロタウイルス胃腸炎の発生動向をより正確に把握することとなった。

2014年県内の患者報告数は120人、定点当たり17.14人であった。4月から6月にかけてピークがみられた。年齢階級別では、4歳までで全体の87.5%を占めている。



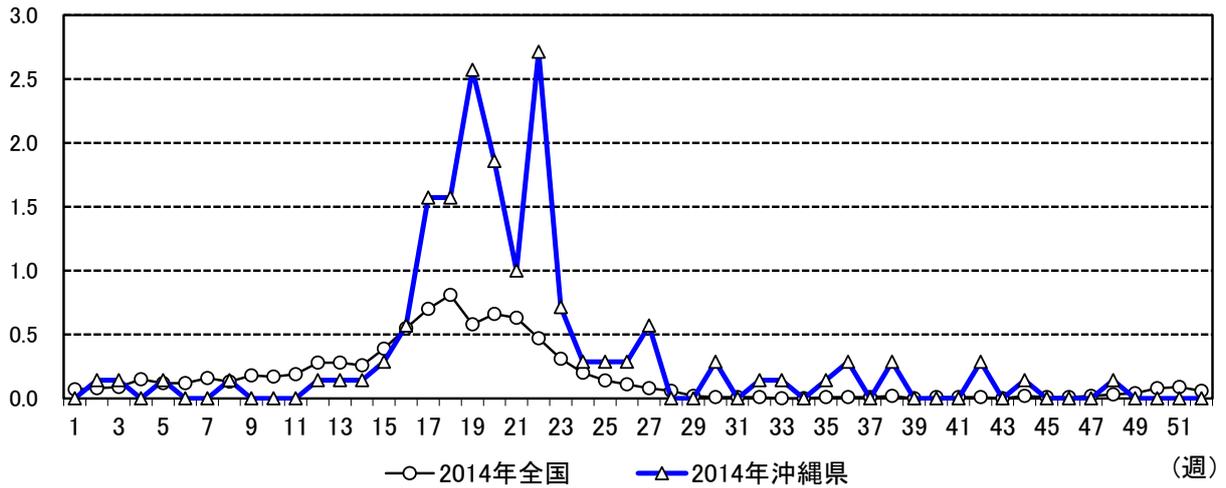
### シーズン別の報告数合計：感染性胃腸炎(ロタウイルス)

平均報告数	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年
-	-	-	-	2	120

※平成25年(2013年)10月14日から5類基幹定点把握対象となった。

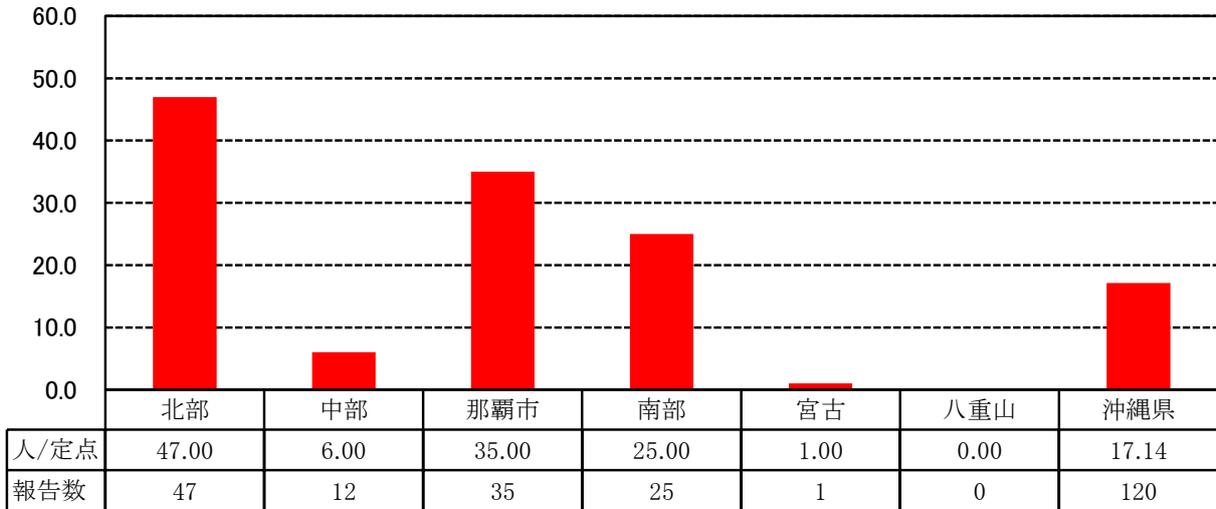
(人/定点)

### 感染性胃腸炎(ロタウイルス) 定点当たり報告数

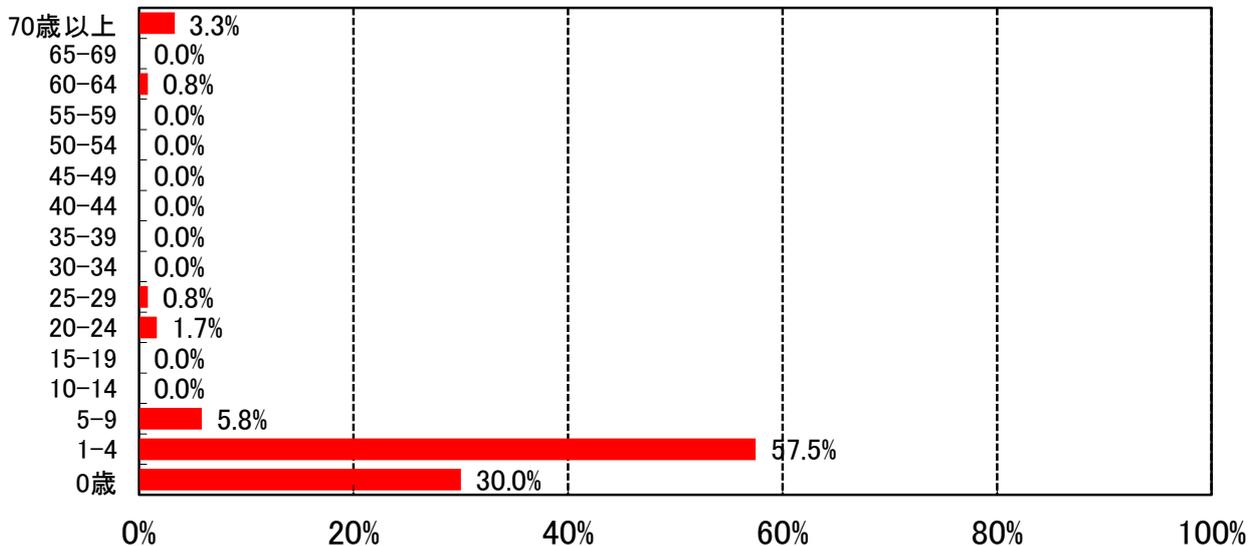


(人/定点)

### 保健所別発生状況 (報告数及び定点あたり報告数)



### 年齢階級別割合 (沖縄県)



## 2 月報

### (性感染症 (STD) 定点)

本県の性感染症 (STD) は 2010 年以降の 5 年間の年次推移をみると、2010 年は 406 人、2011 年は 444 人、2012 年は 367 人、2013 年は 351 人、2014 年は 208 人(男性 : 59 人、女性 149 人) と減少している。各疾患の報告数も前年より減少した。

2014 年の STD の内訳は、性器クラミジア感染症 128 人 (61.5 %)、性器ヘルペスウイルス感染症 38 人 (18.3 %)、尖圭コンジローマ 25 人 (12.0 %)、淋菌感染症 17 人 (8.2 %) あった。いずれの疾患についても、男性より女性の割合が高かった。男女比 (男 : 女) は、性器クラミジア感染症 (1 : 4.1)、性器ヘルペスウイルス感染症 (1 : 1.7)、尖圭コンジローマ (1 : 2.1)、淋菌感染症 (1 : 0.4) であった。

(宮古、八重山は人口規模が小さいため、性感染症の定点医療機関は設置されていない。)

#### 性器クラミジア感染症

本県の性器クラミジア感染症は、男性が 25 人、女性が 103 人で本県の性感染症の 61.5% を占めていた。2014 年の報告数は 128 人、定点当たり 10.89 人で、前年比 0.69 と減少した。性別では、男女とも 10 代後半～ 30 代を中心に報告数が多い。

#### 性器ヘルペスウイルス感染症

本県の性器ヘルペスウイルス感染症は、男性が 14 人、女性が 24 人で女性の報告数が多かった。2014 年の報告数は 38 人、定点当たり 3.24 人で、前年比 0.62 と減少した。

#### 尖圭コンジローマ感染症

本県の尖圭コンジローマ感染症は、男性が 8 人、女性が 17 人で女性の報告数が多かった。2014 年の報告数は 25 人、定点当たり 2.16 人で前年比 0.83 であった。

#### 淋菌感染症

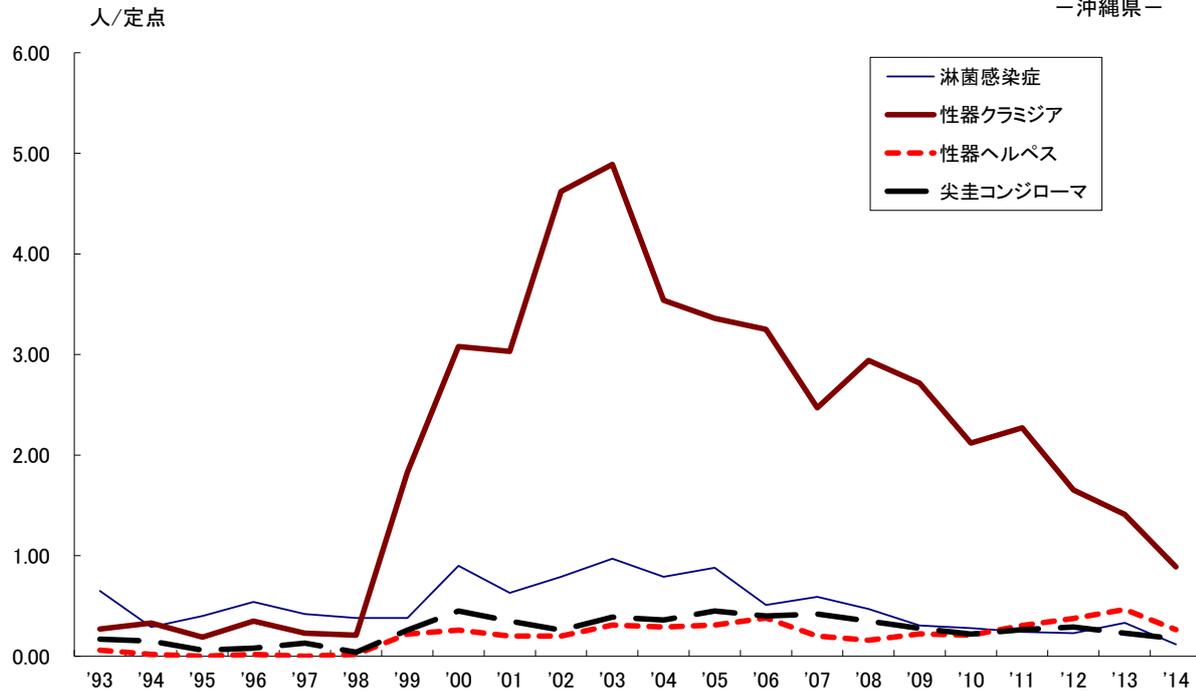
本県の淋菌感染症は、男性が 12 人、女性が 5 人で男性の報告数が多かった。2014 年の報告数は 17 人、定点当たり 1.45 人であり、前年比 0.39 と減少した。

(性感染症定点)

### 疾患別患者報告数の年次推移

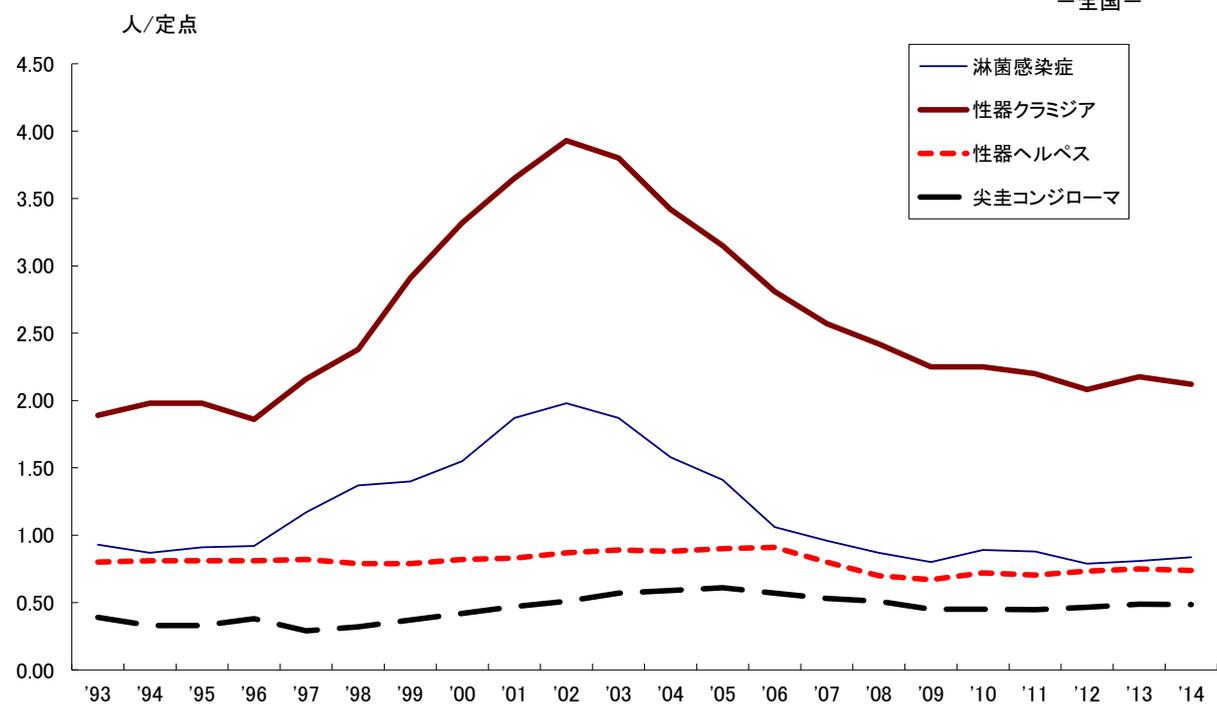
2014年12月末現在

性感染症の定点あたり報告数(月平均:沖縄県)



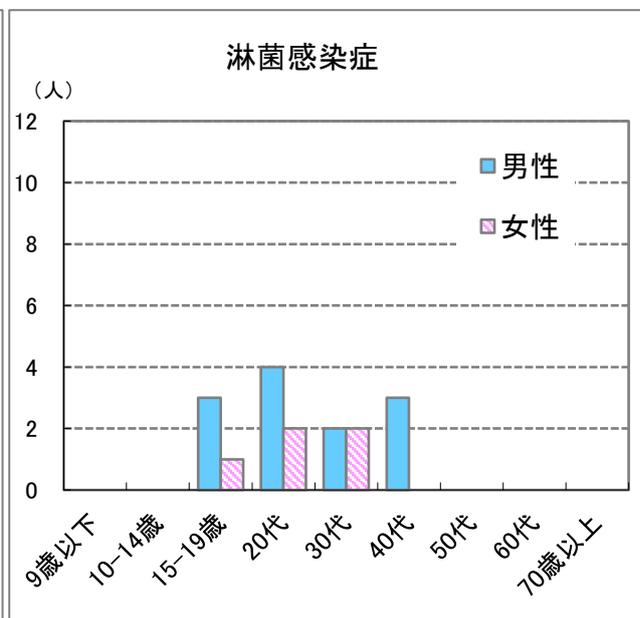
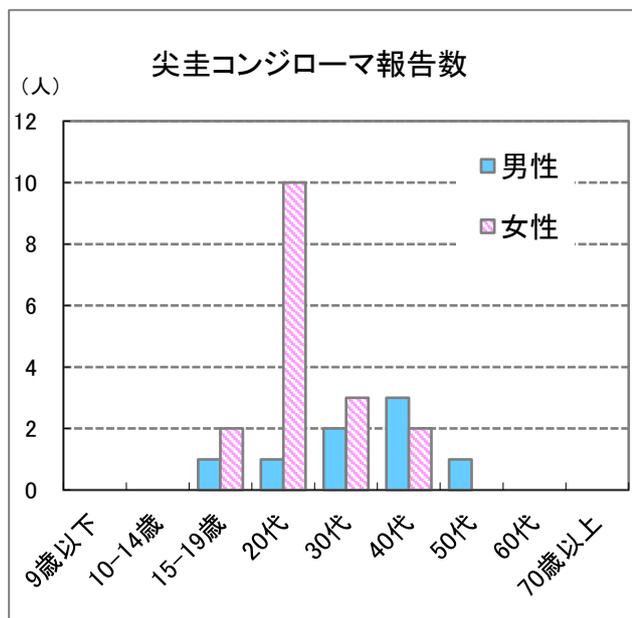
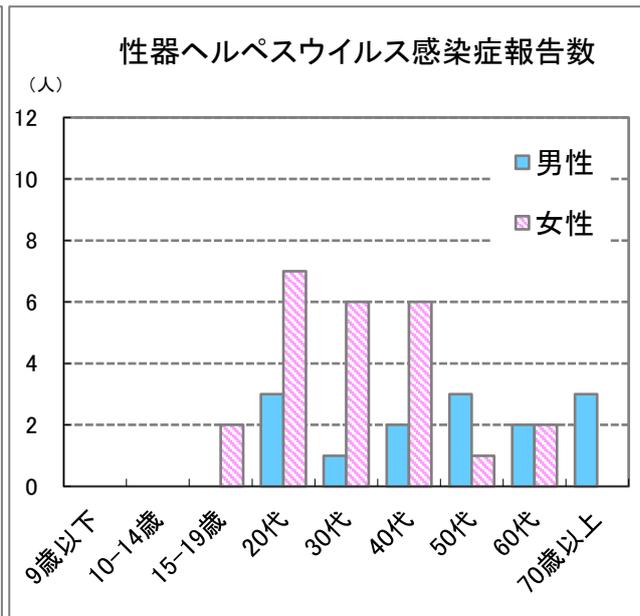
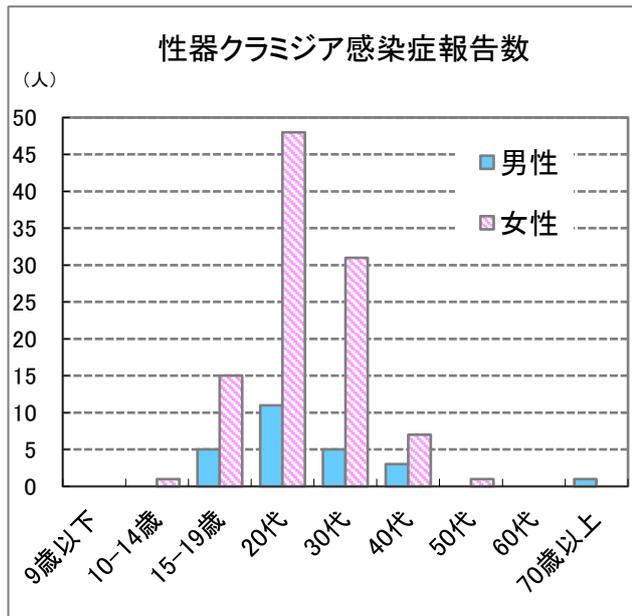
2014年12月末現在

性感染症の定点あたり報告数(月平均:全国)



(性感染症定点)

性別・年齢別患者報告数(沖縄県 2014年)



		9歳以下	10-14歳	15-19歳	20代	30代	40代	50代	60代	70歳以上	計
性器クラミジア感染症	男性	0	0	5	11	5	3	0	0	1	25
	女性	0	1	15	48	31	7	1	0	0	103
性器ヘルペスウイルス感染症	男性	0	0	0	3	1	2	3	2	3	14
	女性	0	0	2	7	6	6	1	2	0	24
尖圭コンジローマ	男性	0	0	1	1	2	3	1	0	0	8
	女性	0	0	2	10	3	2	0	0	0	17
淋菌感染症	男性	0	0	3	4	2	3	0	0	0	12
	女性	0	0	1	2	2	0	0	0	0	5

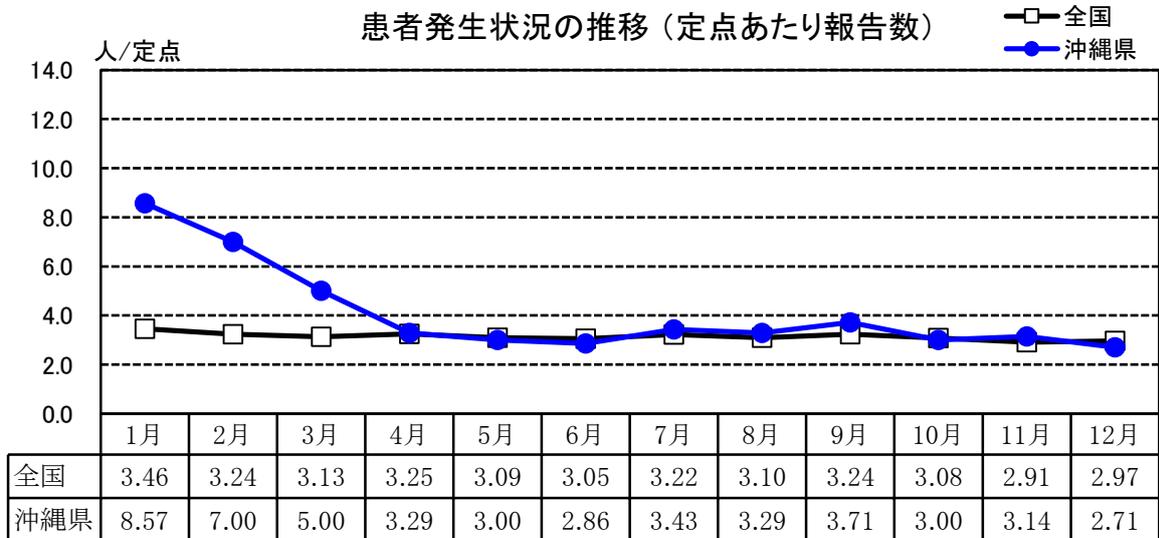
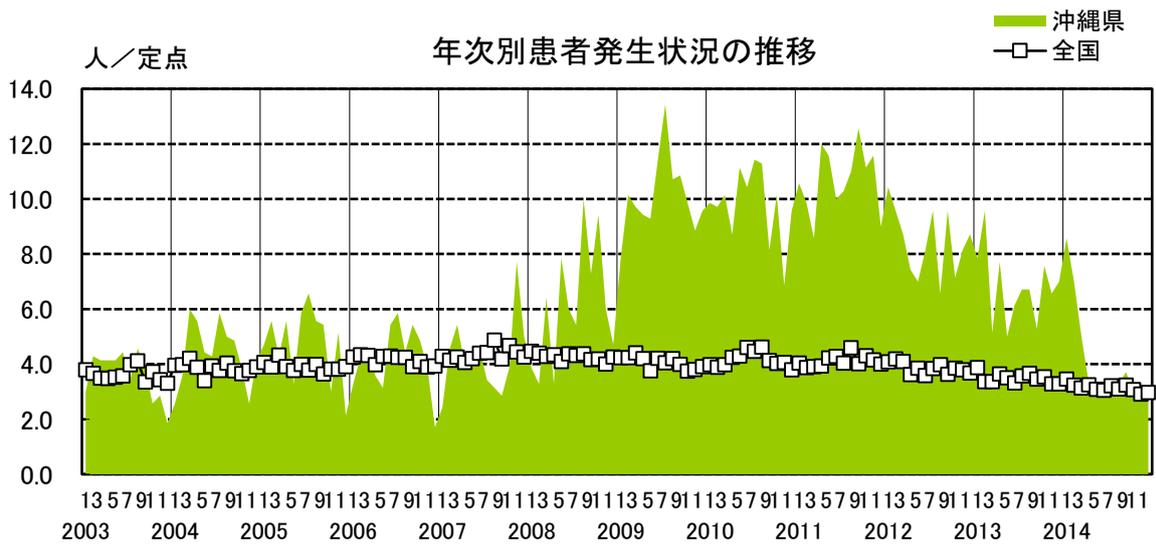


(基幹定点(薬剤耐性菌))

メチシリン耐性黄色ブドウ球菌 (MRSA) 感染症

メチシリン耐性黄色ブドウ球菌 (MRSA) 感染症は、メチシリンなどのペニシリン剤をはじめとして、β-ラクタム剤、アミノ配糖体、マクロライド剤など多くの薬剤に対し耐性を示すMRSAによる感染症である。

2014年県内での患者報告数は343人、定点あたり48.99人であり、前年比0.60と大きく減少した。保健所別では宮古保健所の報告数が111.00人/定点と最も多かった。年齢階級別の患者報告数は70歳以上が最も多く、全体の48%を占めていた。



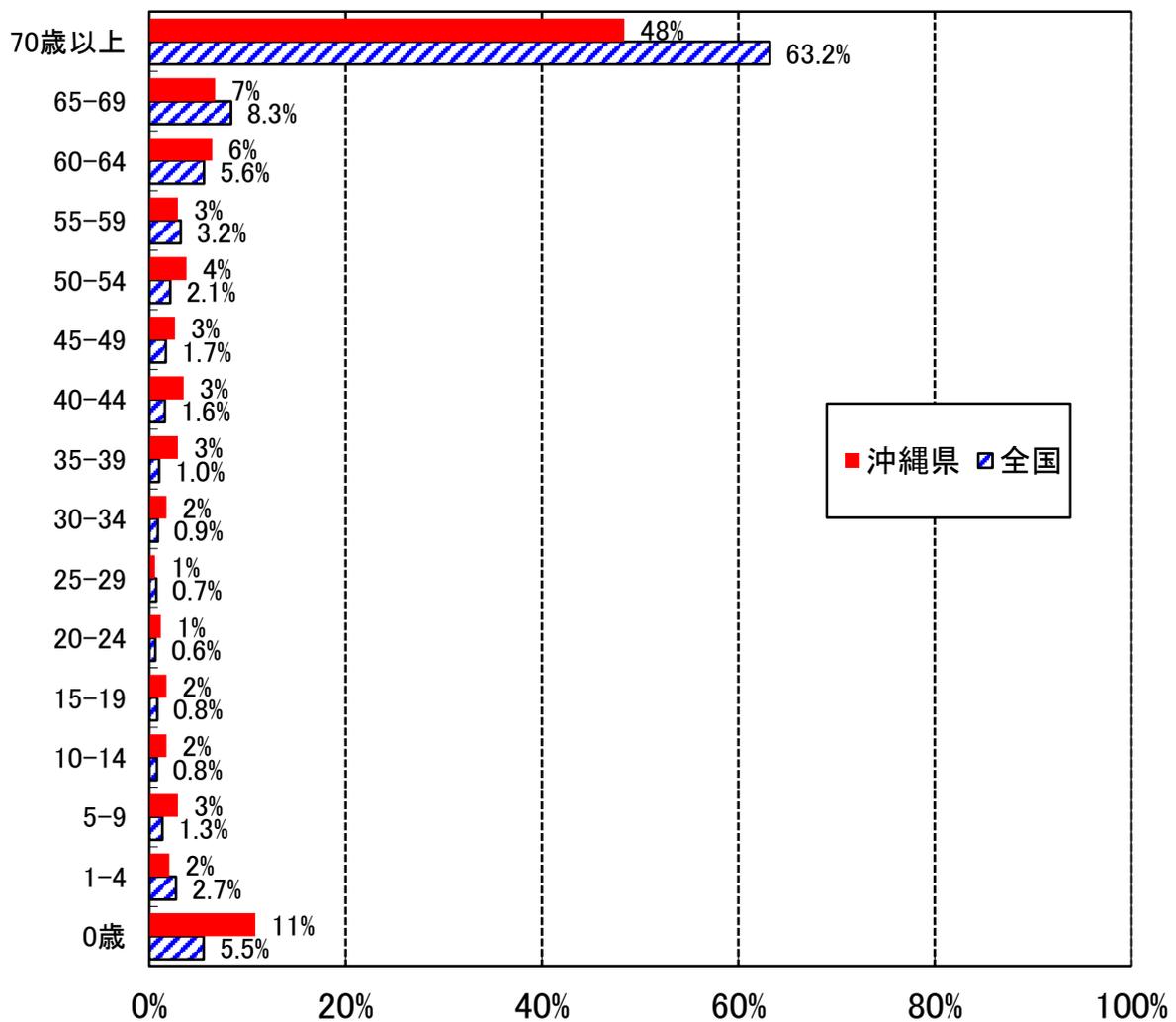
シーズン別の報告数合計: メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症

平均報告数	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年
668	822	897	707	569	343

### メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症 保健所別発生状況



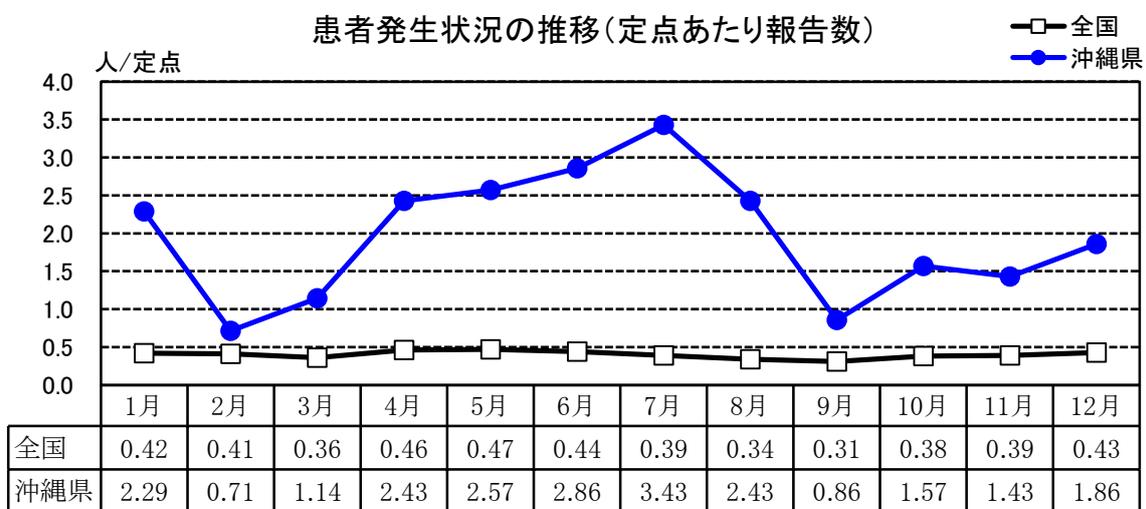
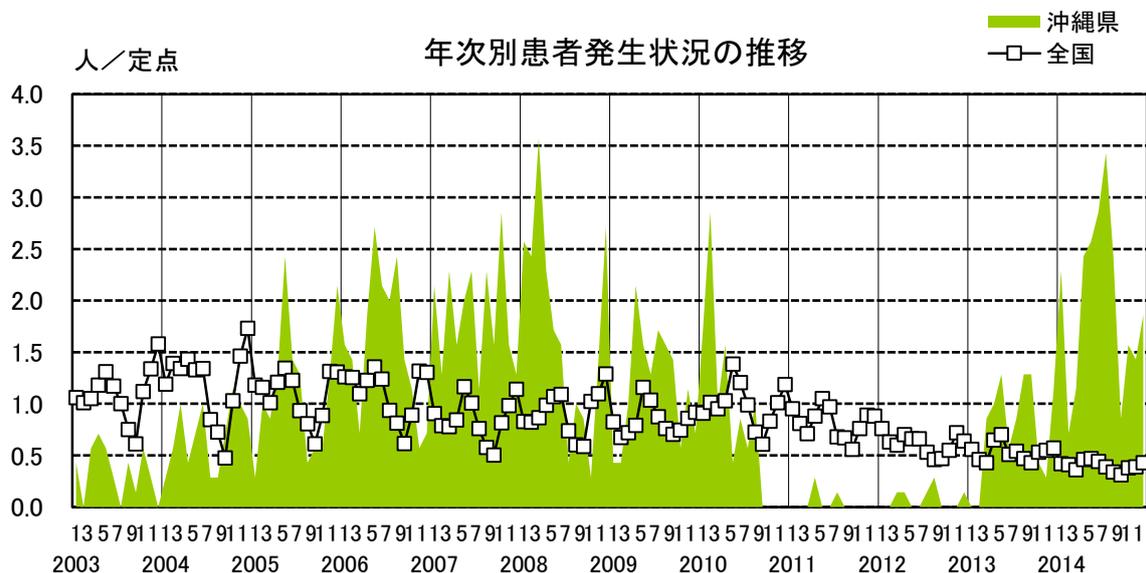
### 年齢階級別割合



## ペニシリン耐性肺炎球菌感染症（PRSP）

ペニシリン耐性肺炎球菌（PRSP）感染症は、抗生物質であるペニシリンに耐性を獲得した肺炎球菌である。通常は無症状であるが、小児の中耳炎、肺炎、高齢者の肺炎などの原因菌となって発症することがある。

2014年県内での患者報告数は165人、定点あたり23.58人であった。2010年以降、2年連続で減少していたが、2013年から増え始め、今年は前年比2.61と増加している。



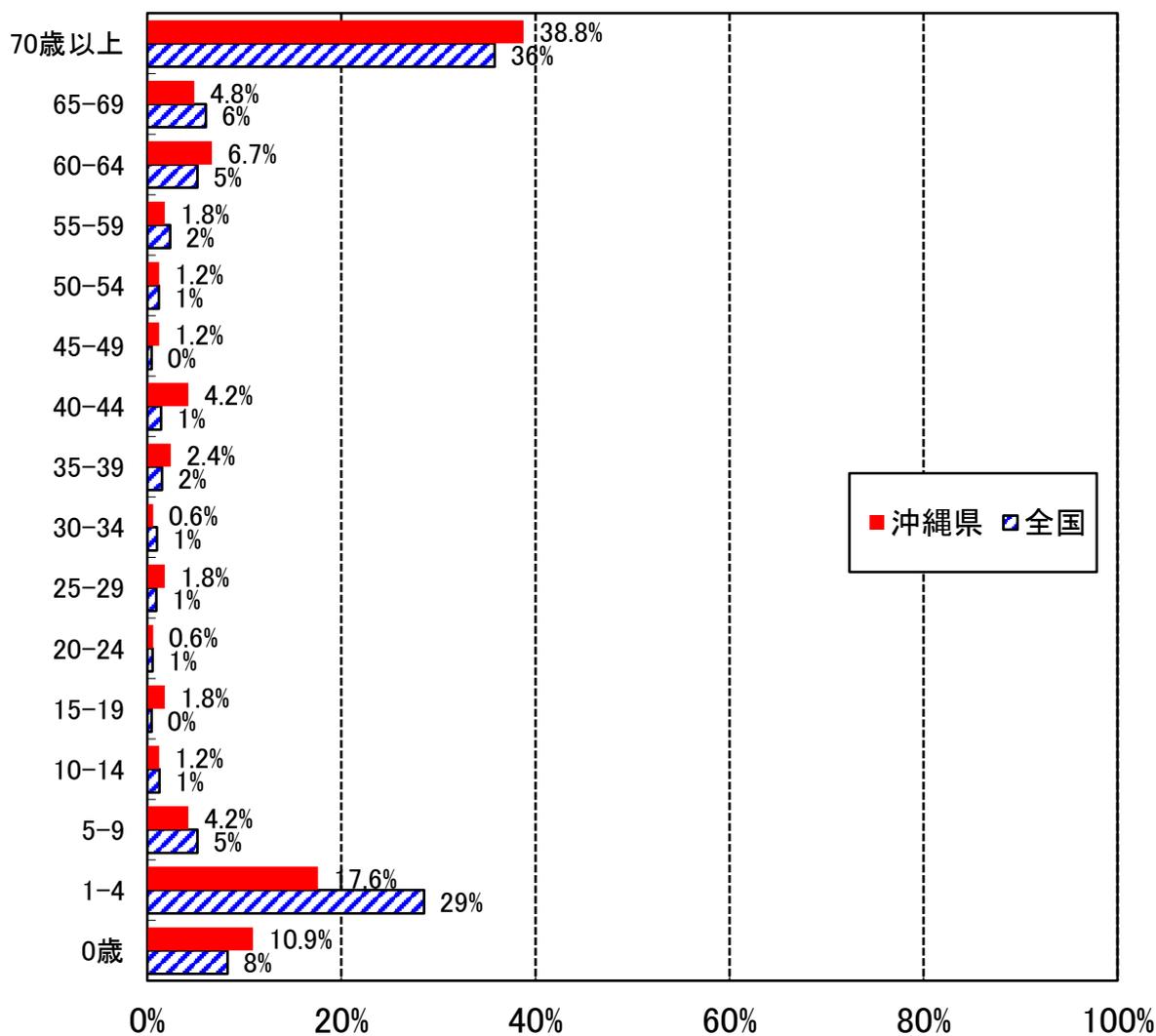
## シーズン別の報告数合計： ペニシリン耐性肺炎球菌感染症

平均報告数	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年
61	70	3	6	63	165

### ペニシリン耐性肺炎球菌感染症 保健所別発生状況



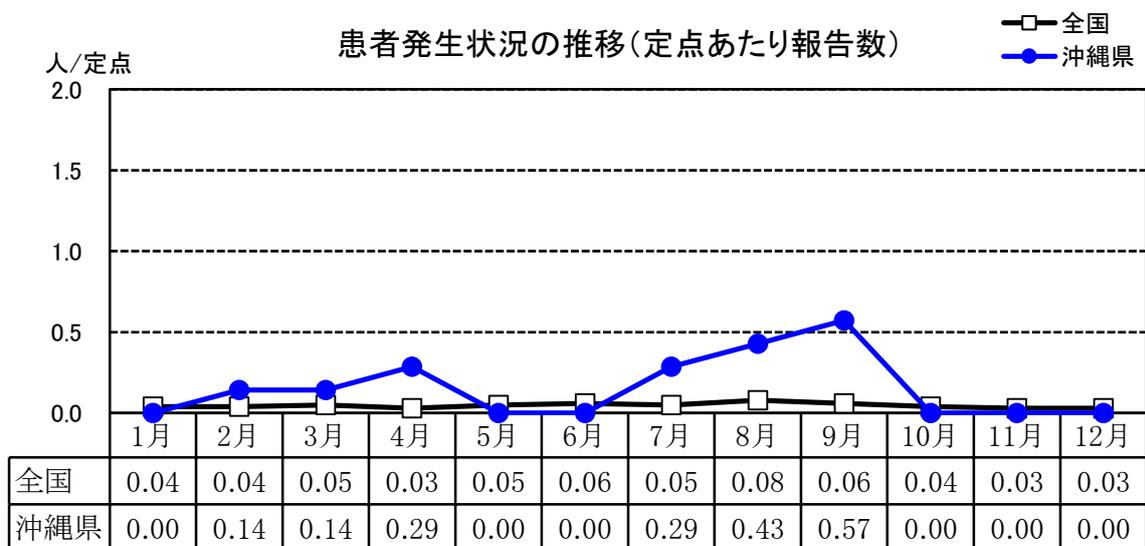
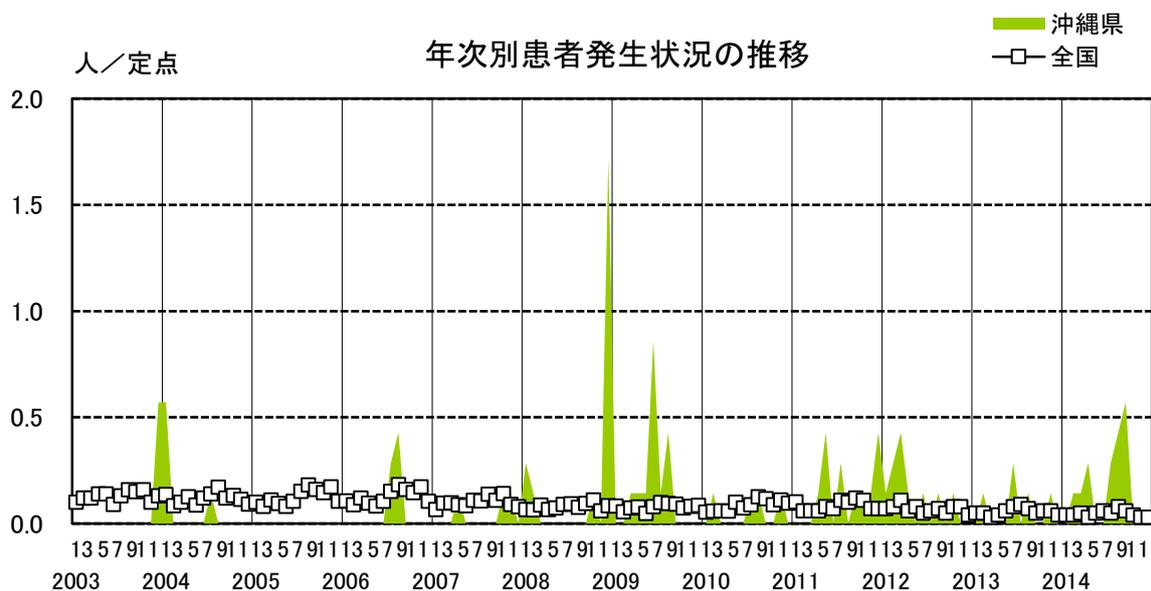
### 年齢階級別割合



## 薬剤耐性緑膿菌感染症

薬剤耐性緑膿菌感染症は、広域β-ラクタム剤、アミノ配糖体、フルオロキノロンの3系統の薬剤に対して耐性を示す緑膿菌による感染症である。感染防御機能の低下した患者や抗菌薬長期使用中の患者に日和見感染し、敗血症や骨髄、気道、尿路、皮膚、軟部組織、耳、眼などに多彩な感染症を起こす。

2014年県内の患者報告数は13人、定点あたり1.86人であった。年齢階級別の患者の割合は70歳以上が全体の約7割を占めていた。



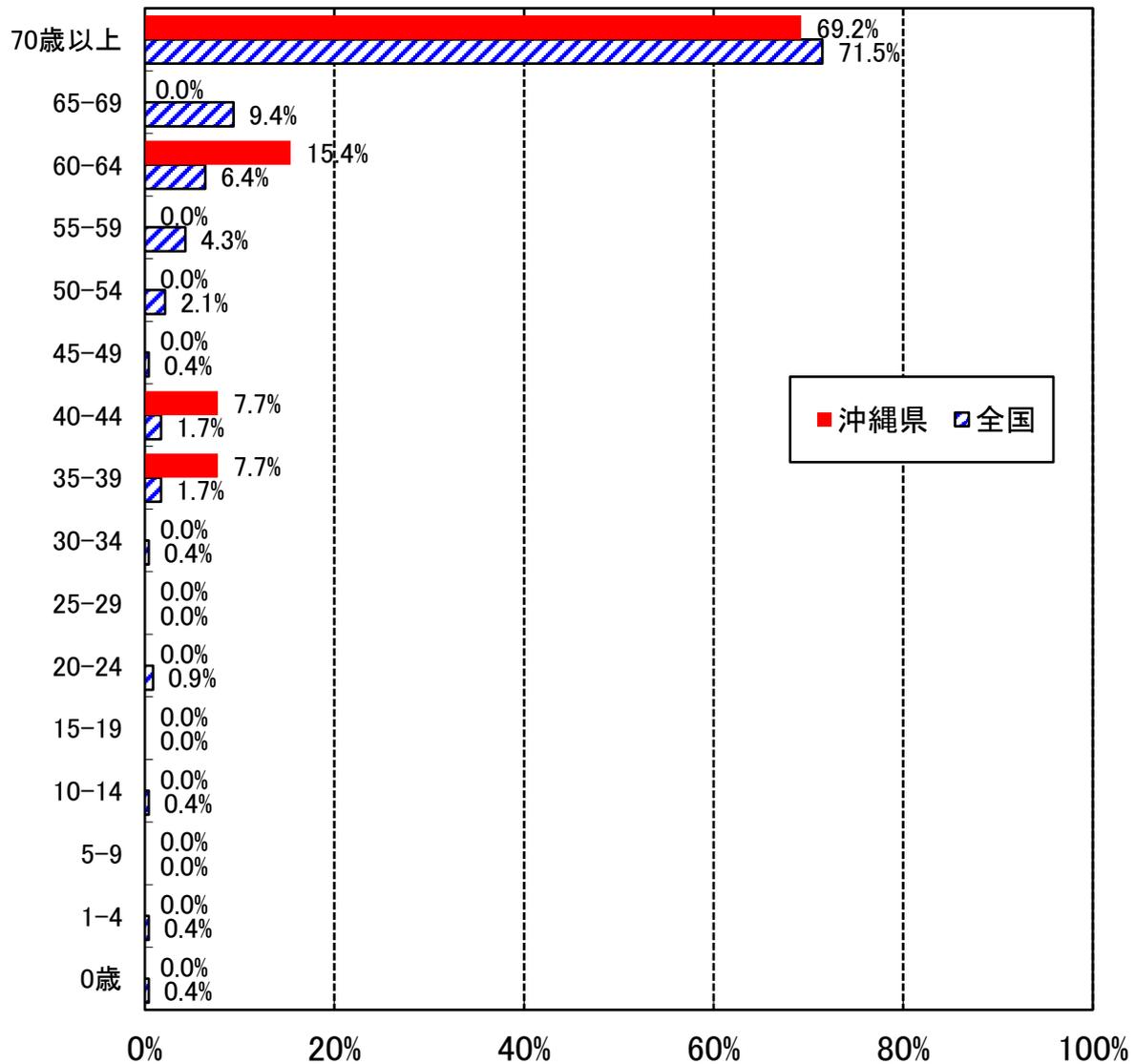
### シーズン別の報告数合計：薬剤耐性緑膿菌感染症

平均報告数	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年
9	4	12	10	5	13

### 薬剤耐性緑膿菌感染症 保健所別発生状況



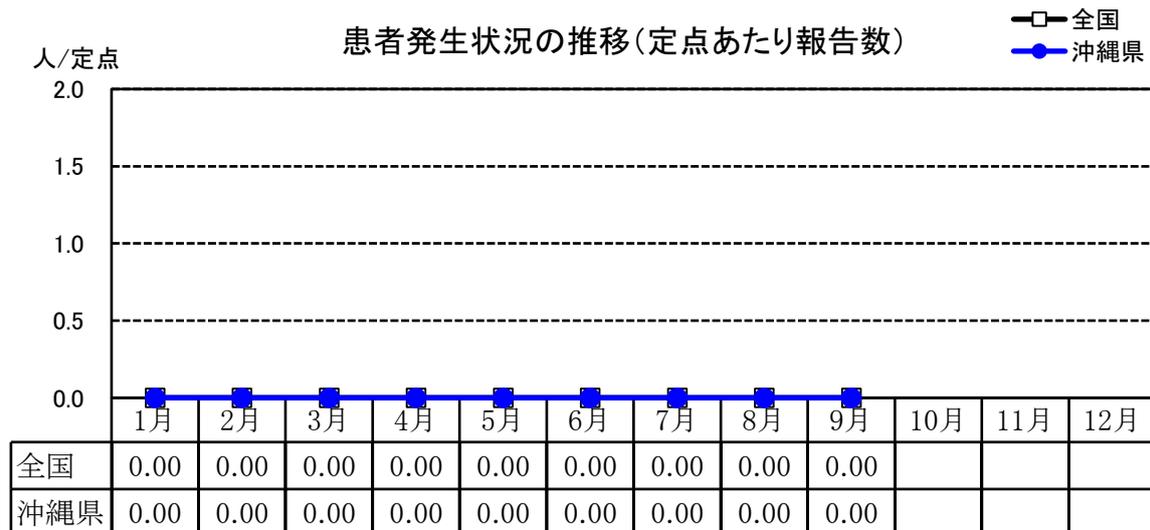
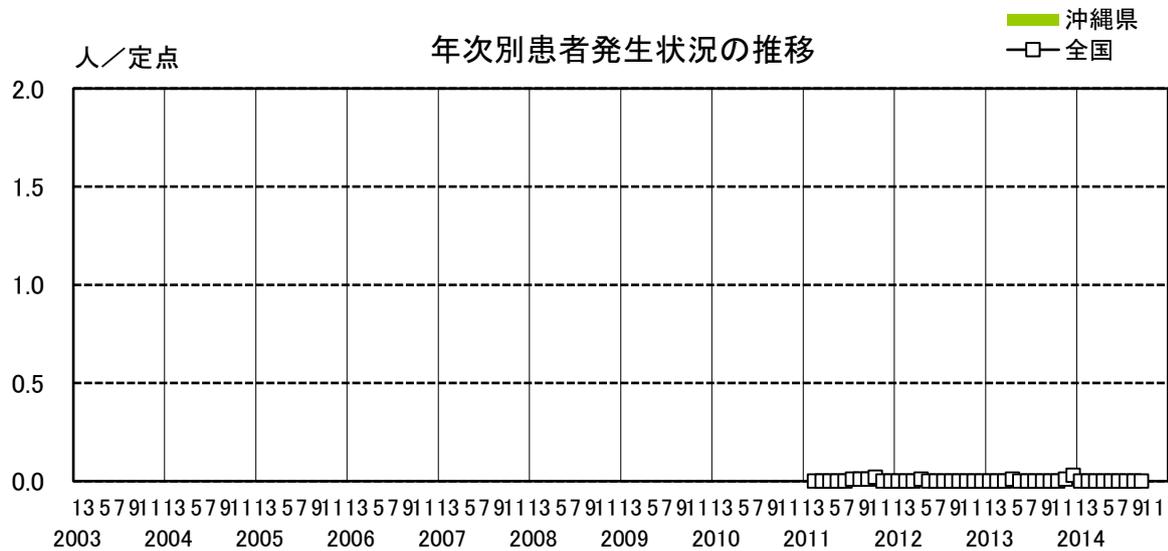
### 年齢階級別割合



## 薬剤耐性アシネトバクター感染症

薬剤耐性アシネトバクター感染症は、平成23年2月1日より五類定点把握対象疾患に追加され、平成26年9月19日より五類全数把握疾患へ変更された。

本県では前年に引き続き、発生報告はなかった。



### シーズン別の報告数合計：薬剤耐性アシネトバクター感染症

平均報告数	2011年	2012年	2013年	2014年
0	0	0	0	0

### 薬剤耐性アシネトバクター感染症 保健所別発生状況

人/定点	保健所別発生状況						
	北部	中部	那覇市	南部	宮古	八重山	沖縄県
人/定点	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
報告数	0	0	0	0	0	0	0

### 年齢階級別割合

